

昭和63年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第 2 分 冊 —

1 9 8 9 ・ 3

三 重 県 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、昭和63年度農業基盤整備事業地域内に係る埋蔵文化財発掘調査の内、上相田遺跡、鳥土遺跡、榎長遺跡、伊勢寺遺跡北浦地区、明星地区内遺跡群の調査結果をまとめたものである。
2. 調査に係る費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は農林水産部が負担した。
3. 調査体制は下記によった。
 調査主体 三重県教育委員会
 調査担当 三重県教育委員会文化課、松阪市教育委員会
 調査協力 三重県農林水産部農村整備課、松阪農林事務所
 堀坂川沿岸土地改良区、明星土地改良区、松阪市教育委員会、明和町教育委員会
 県文化財調査員ほか
4. 調査面積、期間、担当者は下表のとおりである。

遺 跡 名		面 積 (m ²)	調 査 期 間	担 当 者
上相田遺跡		1,000	昭和63年11月2日 ～ 12月6日	三重県教育委員会文化課 主 事 河瀬 信幸 併任主事 小林 秀
鳥戸遺跡		1,200	昭和63年11月25日 ～ 12月14日	三重県教育委員会文化課 主 事 河瀬 信幸 併任主事 江尻 健
榎長遺跡		280	昭和63年12月9日 ～ 12月14日	三重県教育委員会文化課 主 事 河瀬 信幸 併任主事 小高 昌久
伊勢寺遺跡 北浦地区	A地区 B地区	2,300	昭和62年12月7日 ～ 12月22日	松阪市教育委員会 文化財主事 榎本義讓 〃 前川嘉宏
	F地区	780	昭和63年6月7日 ～ 6月29日	三重県教育委員会文化課 主 事 河瀬 信幸 併任主事 江尻 健
	G地区	1,035	昭和63年5月9日 ～ 6月7日	三重県教育委員会文化課 主 事 森川 常厚 併任主事 小高 昌久 〃 江尻 健
明星地区内遺跡群		520	昭和63年6月13日 ～ 7月28日	三重県教育委員会文化課 主 事 森川 常厚 〃 伊藤 裕偉

5. 本書の図面作成及び執筆は主に各調査担当者が行い、目次及び文末にその名を記した。
6. 図面における方位は、全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏6°20′（昭和62年）である。
7. 本書に用いた事業計画図面は、農林水産部の提供による。
8. 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
9. 本書で用いた遺構略記号は下記による。
 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：焼土 SH：竪穴住居 SK：土坑
10. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目 次

I. 松阪市伊勢寺町 上相田遺跡	(小林 秀)	1
1. 歴史的環境		1
2. 遺 構		4
3. 遺 物		4
4. 小 結		6
II. 松阪市伊勢寺町 鳥戸遺跡	(江尻 健)	9
1. 遺 構		9
2. 遺 物		11
3. 小 結		11
III. 松阪市伊勢寺町 榎長遺跡	(江尻 健)	19
1. 前 言		20
2. 遺 構		20
3. 遺 物		21
4. 小 結		21
IV. 松阪市伊勢寺町 伊勢寺遺跡(北浦地区)		23
1. 前 言	(森川常厚)	23
2. 地理的環境	(〃)	26
3. A地区	(〃)	26
4. B地区	(〃)	29
5. F地区	(江尻 健)	29
6. G地区	(森川常厚)	32
7. 結 語	(〃)	40
V. 多気郡明和町 明星地区内遺跡群	(伊藤裕偉)	51
1. はじめに		51
2. 調査区の位置と周辺環境		51
3. 調査の成果－層位と遺構－		51
4. 調査の成果－出土遺物－		56
5. 調査のまとめと検討		58

挿 図 目 次

I. 上相田遺跡		第23図 A地区出土遺物実測図 ……………	28
第1図 遺跡位置図 ……………	1	第24図 F地区遺構平面図 ……………	30
第2図 遺跡地形図 ……………	2	第25図 S H 18・19、S B 12・14・15・17	
第3図 調査区位置図 ……………	2	実測図 ……………	31
第4図 西側調査区遺構平面図 ……………	3	第26図 F地区出土遺物実測図 ……………	32
第5図 東側調査区遺構平面図 ……………	4	第27図 G地区遺構平面図 ……………	34
第6図 遺物実測図 ……………	5	第28図 G地区遺構平面図 ……………	35
		第29図 G地区土層図 ……………	36
II. 鳥戸遺跡		第30図 S H 24・25・27・29、S B 26・28	
第7図 遺跡地形図 ……………	9	・30・31、S A 33実測図 ……	37
第8図 調査区位置図 ……………	10	第31図 S K 21・22実測図 ……………	38
第9図 遺構平面図 ……………	12	第32図 G地区出土遺物実測図 ……………	39
第10図 遺構平面図 ……………	13	第33図 G地区出土遺物実測図 ……………	40
第11図 S B 1・2・4・5・14実測図 ……	14		
第12図 S B 15～19実測図 ……………	15	V. 明星地区内遺跡群	
第13図 遺物実測図 ……………	16	第34図 遺跡位置図 ……………	51
		第35図 調査区位置図 ……………	52
III. 榎長遺跡		第36図 調査区土層断面図 ……………	53
第14図 遺跡地形図 ……………	19	第37図 調査区平面図 ……………	54
第15図 調査区位置図 ……………	20	第38図 調査区地区割り図 ……………	55
第16図 遺構平面図 ……………	20	第39図 II区S D 1土器出土状況図 ……	55
第17図 遺物実測図 ……………	21	第40図 III区南の隆起地形 ……………	56
		第41図 III区S B 1およびS K 1	
IV. 伊勢寺遺跡(北浦地区)		平面・土層断面図 ……	57
第18図 遺跡地形図 ……………	23	第42図 III区土坑S K 3平面・土層断面図 …	57
第19図 調査区位置図 ……………	24	第43図 土坑S K 3、掘立柱建物S B 1	
第20図 A地区遺構平面図 ……………	25	他出土土器 ……………	58
第21図 A地区土層図 ……………	26	第44図 I、II、III区各遺構他出土土器 ……	59
第22図 S H 2～4、S B 1・5・6実測図			
……………	27		

表 目 次

I. 上相田遺跡		IV. 伊勢寺遺跡（北浦地区）	
表 1 遺物観察表	6	表 4 遺物観察表（1）	41
II. 鳥戸遺跡		表 5 遺物観察表（2）	42
表 2 遺物観察表	16	表 6 遺物観察表（3）	43
III. 榎長遺跡		表 7 遺物観察表（4）	44
表 3 遺物観察表	22	V. 明星地区内遺跡群	
		表 8 遺物観察表（1）	60
		表 9 遺物観察表（2）	61

写 真 目 次

面調査部分（南から）	7	G地区全景（北から）	49
S H 1（北西から）	7	S H 24・25・27・29（北から）	49
出土遺物	8	出土遺物	50
II. 鳥戸遺跡		V. 明星地区内遺跡群	
S B 1（西から）	17	調査前風景（Ⅲ区）	63
S B 15（西から）	17	調査風景（Ⅲ区）	63
S B 17～19（西から）	18	北側全景（南から）	64
調査区全景（西から）	18	S D 4 および東壁土層断面（西から）	64
出土遺物	18	全景（南から）	65
III. 榎長遺跡		溝 S D 1 遺物出土状況および	
調査区全景（南から）	22	土層断面（西から）	65
IV. 伊勢寺遺跡（北浦地区）		全景（北から）	66
A地区全景（西から）	45	S B 1 付近（西から）	66
S B 1（北から）	45	土器出土状況（東から）	67
S H 2（東から）	46	完掘状況（東から）	67
S B 6（南から）	46	S K 3 出土土器（第43図）	68
F地区全景（西から）	47	土器溜り出土土器（第44図）	68
紡錘車出土状況（北から）	47	S B 1 出土土器（第43図）	69
S B 12（西から）	48	土製支脚・土錘他土師器類（第44図）	69
S B 14（西から）	48	須恵器・陶器類（第44図）	70
		I・II区出土土器（第44図）	70

I. 松阪市伊勢寺町 上相田遺跡

1. 歴史的環境

上相田遺跡は、堀坂川によって形成された扇状地の、ほぼ中央部分に位置している。そして、周囲には既に多くの遺跡の存在が確認されている。中でも広大な面積を占める伊勢寺遺跡が一際目を引くが、一見して遺跡が堀坂川水系に集中していることに気付く。

平安時代に成立した『倭名類聚抄』^①には、周辺の郷として一志郡「民太」、水系を異にしているが飯高郡「英太」の名が見えている。そして、それぞれ現在の松阪市美濃田、及び阿形に比定されている。しかし、遺跡の集中している現在の伊勢寺町には、対比され得る古代郷名は確認されていない。ただ、遺跡の密度や伊勢寺廃寺の存在からすれば、この地域が古代よりかなり繁栄していたことは確実である。

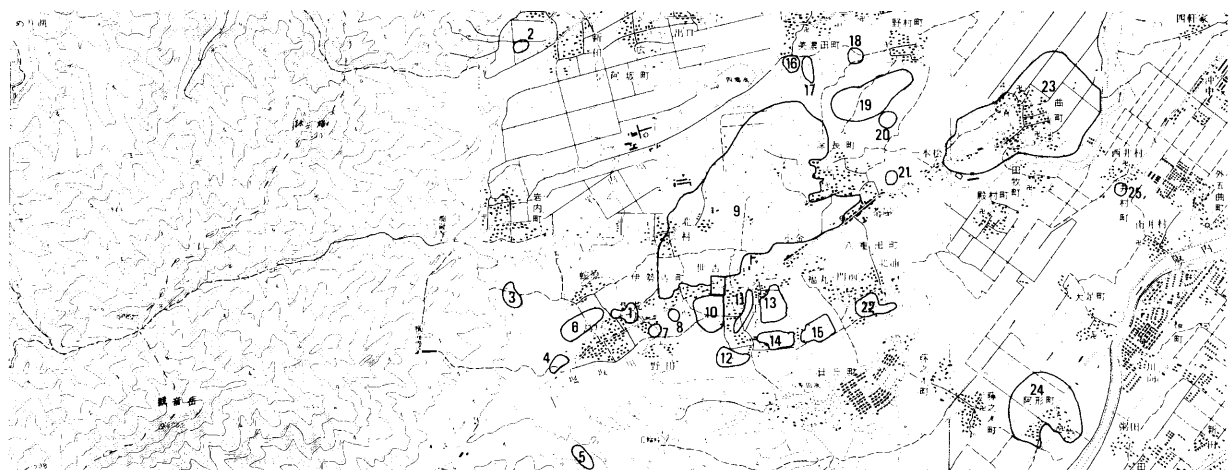
さて、伊勢国の古代から中世の歴史的様相を理解する上で、最も重要なのが伊勢神宮の存在である。当遺跡の位置する旧一志郡や隣接する飯高郡は「神郡」にこそ含まれてはなかったが、中世においては幾つかの御園・御厨を確認することができる。中世の中頃の伊勢神宮領の実情を伝える『神鳳鈔』^②には、当該地域の神宮領として、飯高郡深長御厨・英

太御厨・岩内御厨、一志郡の大阿射賀・小阿射賀御厨が載せられている。

『吾妻鏡』^③所収の文治3年(1187)6月20日付けの関東下文によれば、伊勢国の神宮領に補任されていた地頭が「致自由之濫行」し、所々を押領して神人を煩わせるなどの悪行をしていたことが記されている。このような状況は伊勢寺周辺でも同様であったようで、同じく『吾妻鏡』所収の「内宮役夫人工作料未済成敗所々事」の中に、「但於阿射賀者補地頭所也」とあることからわかるのである。即ち当該地域には、恐らく神宮領の経営に係わっての様々な人々が居住し、集落を形成していたことであろう。このことは、広大な墓域を持つ横尾中世墳墓群の存在によっても確認できよう。

〔註〕

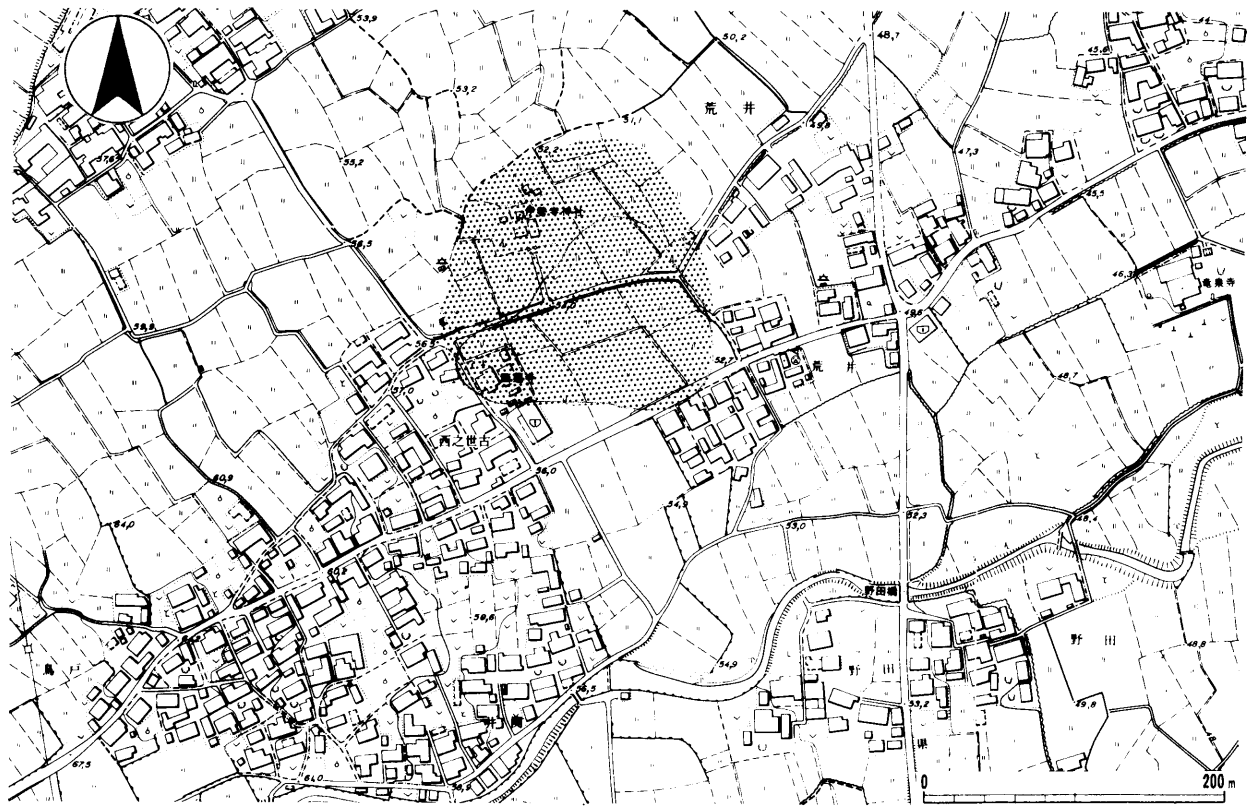
- ① 『倭名類聚抄』（臨川書店刊本）
- ② 『神鳳鈔』（『群書類徒』所収）
- ③ 『吾妻鏡』（『国史大系』所収）



- | | | | | | |
|-----------|------------|----------|-------------|------------|------------|
| 1. 上相田遺跡 | 2. 新田遺跡 | 3. 蛇原広遺跡 | 4. 榎長遺跡 | 5. 横尾墳墓群 | 6. 鳥戸遺跡 |
| 7. 辻之前遺跡 | 8. 辻墓垣内遺跡 | 9. 伊勢寺遺跡 | 10. 大垣内遺跡 | 11. 王子遺跡 | 12. 向王子B遺跡 |
| 13. 大坪遺跡 | 14. 向王寺A遺跡 | 15. 中広遺跡 | 16. 美濃田出口遺跡 | 17. 別当垣外遺跡 | 18. 赤城遺跡 |
| 19. 前沖遺跡 | 20. 北小麦遺跡 | 21. 本堂遺跡 | 22. 門前遺跡 | 23. 曲遺跡 | 24. 阿形遺跡 |
| 25. 山の神遺跡 | | | | | |

第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

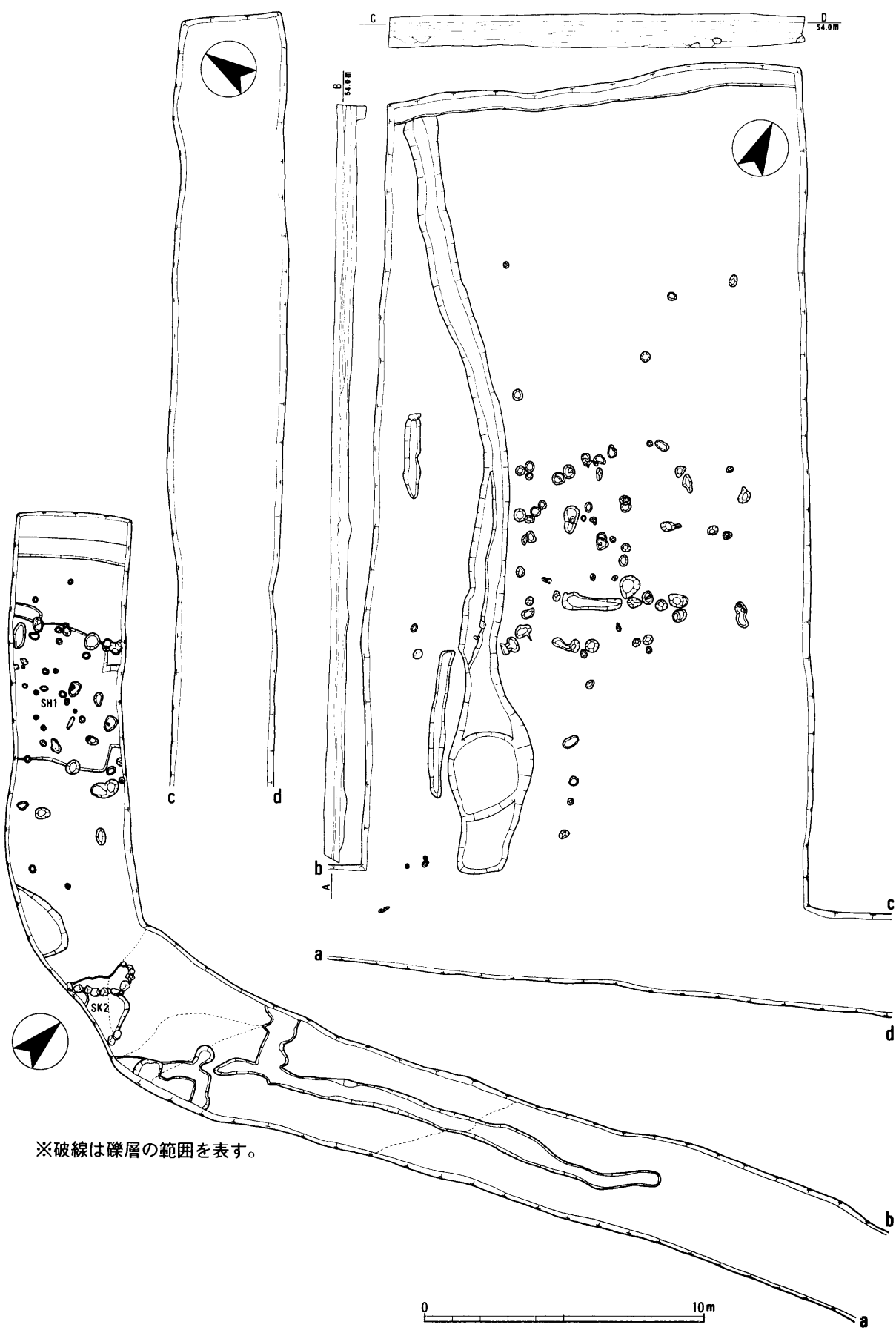
(国土地理院・大河内・松阪・1 : 25,000)



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)



※破線は磔層の範囲を表す。

第4図 西側調査区遺構平面図 (1:200)

2. 遺 構

400㎡程の面調査と、伊勢寺神社を取り囲む形でのトレンチ調査を実施した。神社の参道を挟んで西側の地区では比較的良好な遺物包含層が確認され、奈良時代から平安時代の遺物がかなり混入していたが、遺構としてのまとまりに欠けていた。また東側では、耕作土直下において黄赤褐色粘質土の安定した地山に達した。

まずSH1とした遺構であるが、不定形であること、及び焼土が3ヶ所で認められたことより、複数棟の竪穴住居が複雑に切り合っているものと判断される。したがって、個々の住居の規模や年代を確定するには到らなかったが、大きくは、出土遺物から奈良時代頃と考えられる。

SK2は、部分的に石で囲った土坑である。用途については不明である。出土遺物より、近世の遺構と判断される。

次に面調査部分であるが、遺構検出面が人頭大の石を多く含んだ荒砂層であったため、厳密な検出が出来ない状況であった。調査区中央の小穴集中部分には恐らく掘立柱建物があつたと見られるが、平面形や規模は特定できなかった。南北に走る溝はこの建物の区画とも考えられるが、遺物がなく、関連性は確定できない。

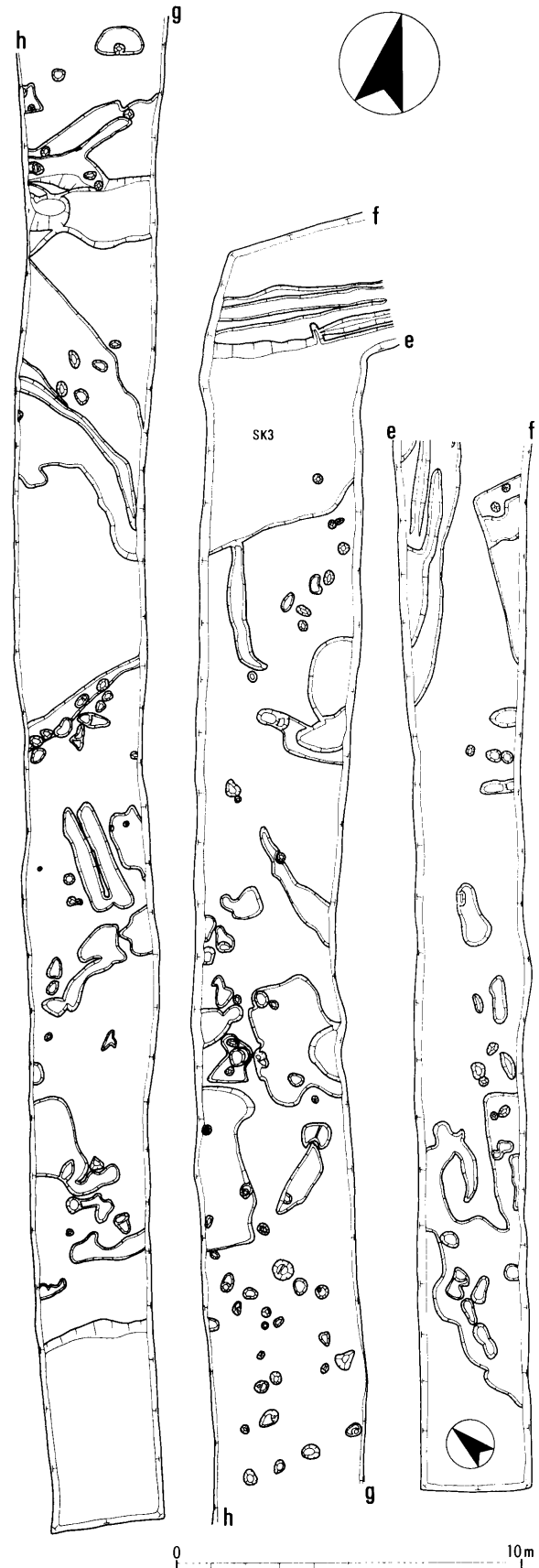
東側の地区は多くの小穴や土坑を検出したが、出土遺物がほとんど無く、SK3を除いて見るべき遺構はない。

SK3は、あるいは溝とも考えられるが、一応土坑と判断した。用途は不明ながらも、16世紀の初頭頃に比定し得る南伊勢系の土師器埴が相当量出土している。

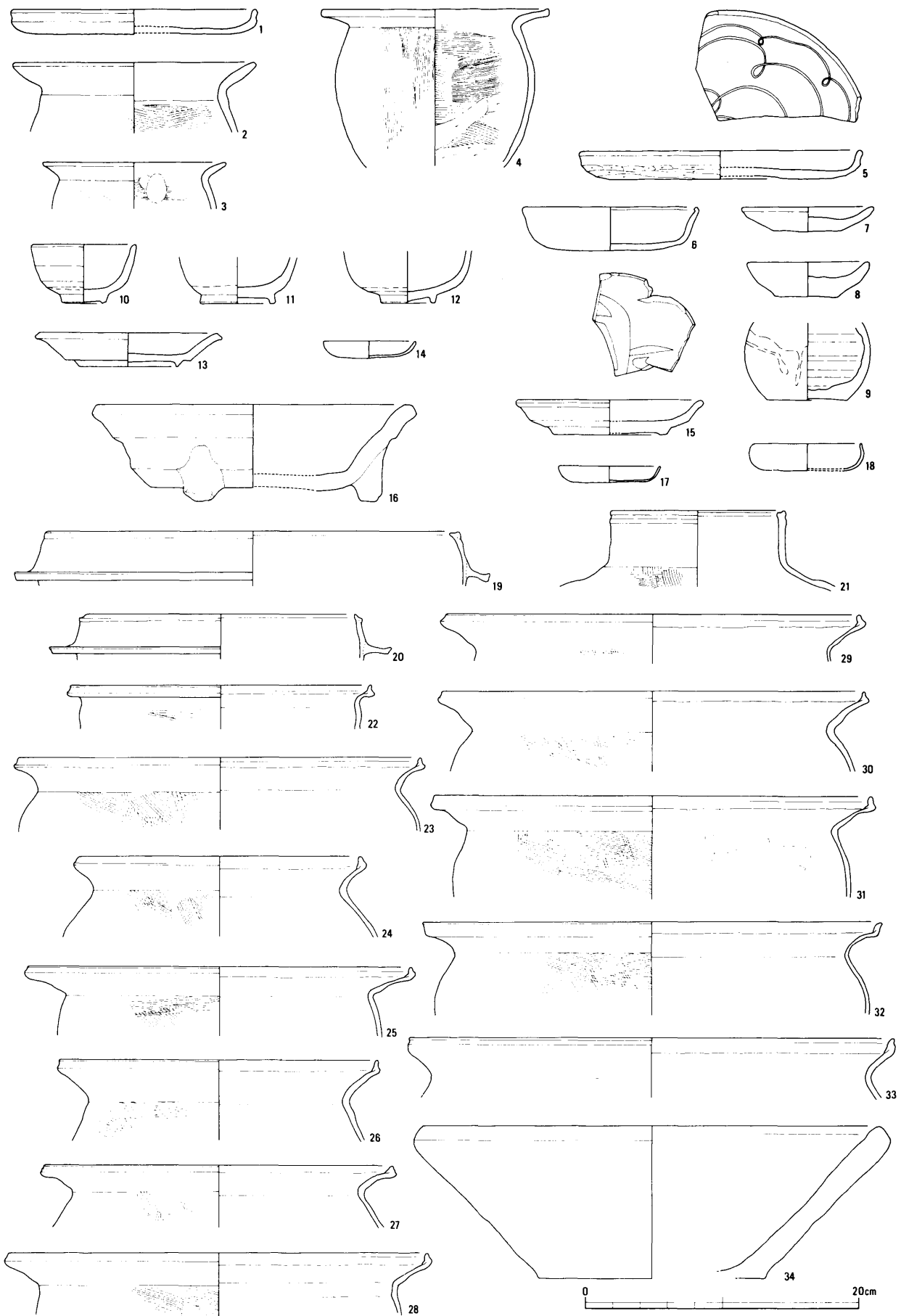
3. 遺 物

土師器甕(2~4)はSH1からの出土である。口縁部を強く「く」字形に屈曲させ、大きく開くものである。胴部外面には縦方向のハケメが、内面には横方向のハケメが施されている。

平安時代の遺物はほとんどなかったが、ロクロ土師器皿(7・8)は包含層の出土ながら完形であった。



第5図 東側調査区遺構平面図 (1:200)



第6図 遺物実測図 (1:4)

SK 3 出土の埴は、口径より25cm前後のものと33cm前後の2種類があった。器壁は非常に薄く、胎土も緻密で焼成も良好である。口縁端部を折り返し、内外を強くナデて、断面は三角形を呈す。時期的

には16世紀初頭頃の特徴を持っている。ただ、31~33は口縁端部の形状を異にしており、若干先行する時期のものと考えられる。

4. 小 結

今回の調査はトレンチ調査が中心であったので、本遺跡の性格を把握するに足る十分な成果が得られなかった。しかし周囲に奈良時代から中世にかけて

の、良好な遺跡のある可能性は確認できたものと思う。今後の調査の進展に期待したい。

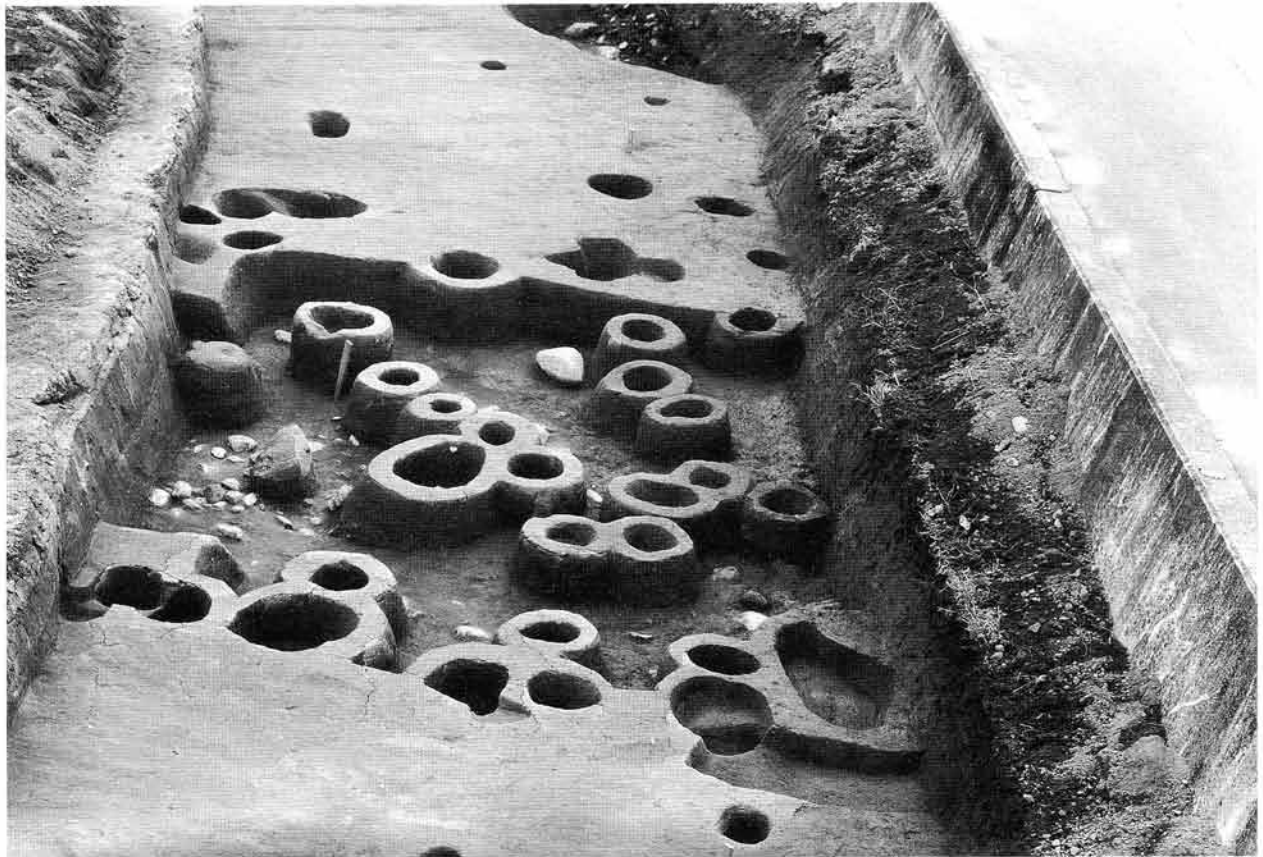
(小林 秀)

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
1	SH1	土師器	皿	口:18.0 高:1.8	口縁内外面ヨコナデ	淡褐色	密	良	口縁 1/8		52-36
2	〃	〃	甕	口:17.8	口縁内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ	橙褐色	やや粗	軟	口縁P 1/8		X53-12
3	〃	〃	〃	口:13.4	〃	暗赤褐色	密	やや軟	口縁 1/4		51-7
4	〃	〃	〃	口:16.4	口縁内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ 底部内面ケズリ	暗褐色	やや粗	良	口縁 1/4	外面煤付着	60-34
5	包含層	〃	皿	口:20.6 高:2.0	口縁内外面ヨコナデ 底部外面ケズリ	明赤褐色	粗	〃	30%	内面に暗文	50-2
6	〃	〃	杯	口:12.8 高:3.2	口縁内外面ヨコナデ	乳褐色	〃	軟	90%		50-1
7	〃	〃	皿	口:9.6 高:1.8	ロクロナデ 底部糸切	黄灰褐色	〃	〃	55%		50-5
8	〃	〃	〃	口:8.8 高:2.5	〃	淡黒褐色	〃	〃	完形		50-4
9	〃	陶器	壺		〃	白灰色	密	良	底部 1/2	外面に灰釉	54-17
10	SK2	〃	碗	口:7.4 高:4.3	ロクロナデ 高台ケズリダシ	淡灰色	〃	〃	口縁 1/7	内外面に施釉	62-42
11	〃	〃	〃		〃	白褐色	〃	〃	底部 1/2	鉄釉	53-14
12	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	底部 80%	〃	53-15
13	包含層	〃	皿	口:13.6 高:2.4	〃	明灰色	〃	〃	50%	全面施釉	50-3
14	SK2	土師器	〃	口:6.8 高:1.2	ユビオサエ・ナデ	褐色	〃	〃	70%		60-33
15	〃	陶器	〃	口:13.8 高:2.6	ロクロナデ 高台ケズリダシ	明乳灰色	〃	〃	20%	全面施釉	61-40
16	包含層	〃	鉢	口:23.6 高:7.0	口縁内外面ヨコナデ 脚ハリツケ	暗赤褐色	〃	〃	口縁 1/8	煤付着	54-16
17	SK3	土師器	皿	口:6.4 高:1.2	ユビオサエ・ナデ	明乳褐色	〃	〃	口縁 1/4	歪み大きい	52-37
18	〃	〃	〃	口:8.8 高:2.0	ユビオサエ・ナデ	暗褐色	〃	〃	口縁 1/4		60-32
19	〃	〃	羽釜	口:30.0	口縁内外面ヨコナデ 鐙ハリツケ	乳褐色	〃	〃	口縁 1/16	外面煤付着	55-19
20	〃	〃	〃	口:19.4	口縁内外面ヨコナデ 鐙ハリツケ	黄褐色	〃	〃	口縁 1/10	〃	55-20
21	〃	〃	茶釜	口:12.8	口縁内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ	橙褐色	〃	〃	口縁 1/2		51-10
22	〃	〃	埴	口:22.0	〃	暗褐色	〃	〃	口縁 1/7	外面煤付着	58-27
23	〃	〃	〃	口:29.2	〃	暗赤褐色	〃	〃	口縁 1/9	〃	55-18
24	〃	〃	〃	口:20.4	〃	暗褐色	〃	〃	口縁 1/12	〃	57-23
25	〃	〃	〃	口:27.8	〃	〃	〃	〃	口縁 1/12	〃	58-39
26	〃	〃	〃	口:23.2	〃	〃	〃	〃	口縁 1/16	〃	59-29
27	〃	〃	〃	口:25.4	〃	〃	〃	〃	口縁 1/10	〃	59-28
28	〃	〃	〃	口:30.2	〃	〃	〃	〃	口縁 1/10	〃	57-21
29	〃	〃	〃	口:30.2	〃	〃	〃	〃	口縁 1/15	〃	59-30
30	〃	〃	〃	口:30.8	〃	淡褐色	〃	〃	口縁 1/16	〃	58-26
31	SK3	土師器	埴	口:31.8	〃	淡橙褐色	密	良	口縁 1/10	外面煤付着	55-9
32	〃	〃	〃	口:33.6	〃	淡褐色	〃	〃	口縁 1/5	〃	51-8
33	〃	〃	〃	口:35.4	〃	〃	〃	〃	口縁 1/16	〃	60-31
34	SK2	陶器	鉢	口:34.8 高:11.0	ロクロナデ	暗赤褐色	粗	軟	口縁 1/12	使用痕跡あり	53-13

表1 遺物観察表



面調査部分（南から）



SH1（北西から）



6



13



7



8



14



31



32

出土遺物 (1 : 3)

Ⅱ. 松阪市伊勢寺町 ^{とりど}鳥戸遺跡

当遺跡は、松阪市伊勢寺地区の大部分を占める堀坂川の扇状地の上位部に所在し、現況は水田がほとんどで、僅かに畑地が混在している。調査区は水路造成部分にあたるため、幅約3m、長さ約280mにわたる非常に細長い区画を設定せざるを得なかった。

層序は、基本的に表面から耕作土・床土・暗褐色砂質土（中世遺物包含層）・褐色砂質土（奈良～平安時代遺物包含層）・黄褐色砂質土（地山）である。遺構の検出は黄褐色砂質土上面で行った。

1. 遺 構

調査の結果、掘立柱建物10棟と土坑6基、そして多くの小穴や溝を検出した。出土遺物量は、東のより低位部で多い傾向にあった。中央部から西側では多くの小穴を検出したものの、遺構としてのまともには確認できなかった。また、土坑SK3・7・9・12・13とSD11からは土師器片が出土したが、顕著

な遺構ではなかった。以下、主な遺構について述べることとする。

(1) 掘立柱建物

SB1 検出できなかった柱穴も多いが桁行3間、梁行3間の南北棟である。棟方向はN4°E、柱間は桁行約1.1m、梁行約0.8mで桁行でやや広がって



第7図 遺跡地形図 (1:5,000)



第8図 調査区位置図 (1:2,000)

いる。出土遺物は細片であるため、時期は特定できない。

S B 2 全体の規模は不明であるが、桁行3間、梁行2間以上の東西棟と考えられる。棟方向はE32° N、柱間はやや広いものもあるが桁行、梁行とも約1.5mの等間である。出土遺物は細片であるため、時期は特定できない。

S B 4 調査区内の中央で検出された。建物の東側は調査区外にあるため規模を確定できないが、仮に南北棟とすれば、桁行3間を確認したことになる。その場合棟方向はN24° E、柱間は不等間である。出土遺物から、奈良時代前半期頃と考えられる。

S B 5 北側は調査区外であるが、桁行3間以上、梁行2間の南北棟と推定した。その場合棟方向はN3° W、柱間は桁行1.5m、梁行1.6mの等間である。出土遺物がなく、年代を決定できなかった。

S B 14 全体の規模は不明であるが、仮に東西棟とした場合の棟方向はN11° E、桁行4間、梁行2間以上を確認したことになり、柱間は不等間である。柱掘形は直径約60cmで、比較的大きかった。S K 13と重複しているが、関連性については分からない。年代は、平安時代前期頃と考えられる。

S B 15 南北棟とすれば棟方向N28° W、桁行2

間以上、梁行2間を確認した。柱間は桁行1.65m、梁行1.5mの等間で、柱掘形は一辺約60cmであった。年代は不明である。

S B 16 東西棟とすれば、棟方向E29° W、桁行3間を確認した。柱間は約2.0mで、柱掘形は直径約60cmで柱痕跡を残すものもあった。年代は不明である。

S B 17 仮に南北棟とした場合、梁行2間を確認したことになる。棟方向はN27° W、柱間は1.85mの等間である。柱掘形は、一辺約80cmの方形を呈する大形のものである。

S B 18 仮に南北棟とした場合、桁行1間以上、梁行2間の総柱の建物である。柱掘形は一辺60cmの方形を呈し、棟方向はN28° W、柱間は桁行1.8m、梁行2.7m+2.25mである。

S B 19 仮に南北棟とした場合、梁行2間分を検出したことになる。棟方向はN26° W、柱間は1.5m+1.8mで、掘形は一辺70cmを呈する大形のものである。

(2) 土坑

S K 10 北半分が調査区外に出ているが、直径約3m、深さ20cmの、ほぼ円形の土坑と考えられる。出土遺物から、平安時代後期頃と考えられる。

2. 遺物

出土遺物は、整理箱に換算して10箱程であった。土坑等から一括して出土したものはなく、包含層からの出土のものが多い。しかも(1)が完形であるほかは、小片のものがほとんどである。時期的には平安時代が中心で、奈良時代の遺物も若干出土している。

(1)は、S B 4出土の土師器の甕、(2~4)は、

S B 14出土の土師器の杯、S B 18からは、土師器杯(5)や高杯(6)が出土している。土師器杯(7~9)や製塩土器(10)はS B 17出土、土師器杯(11、12)はS B 19出土で、須恵器蓋(13)や土師器杯(14)、高杯(15)、灰釉陶器(16、17)は包含層の出土である。

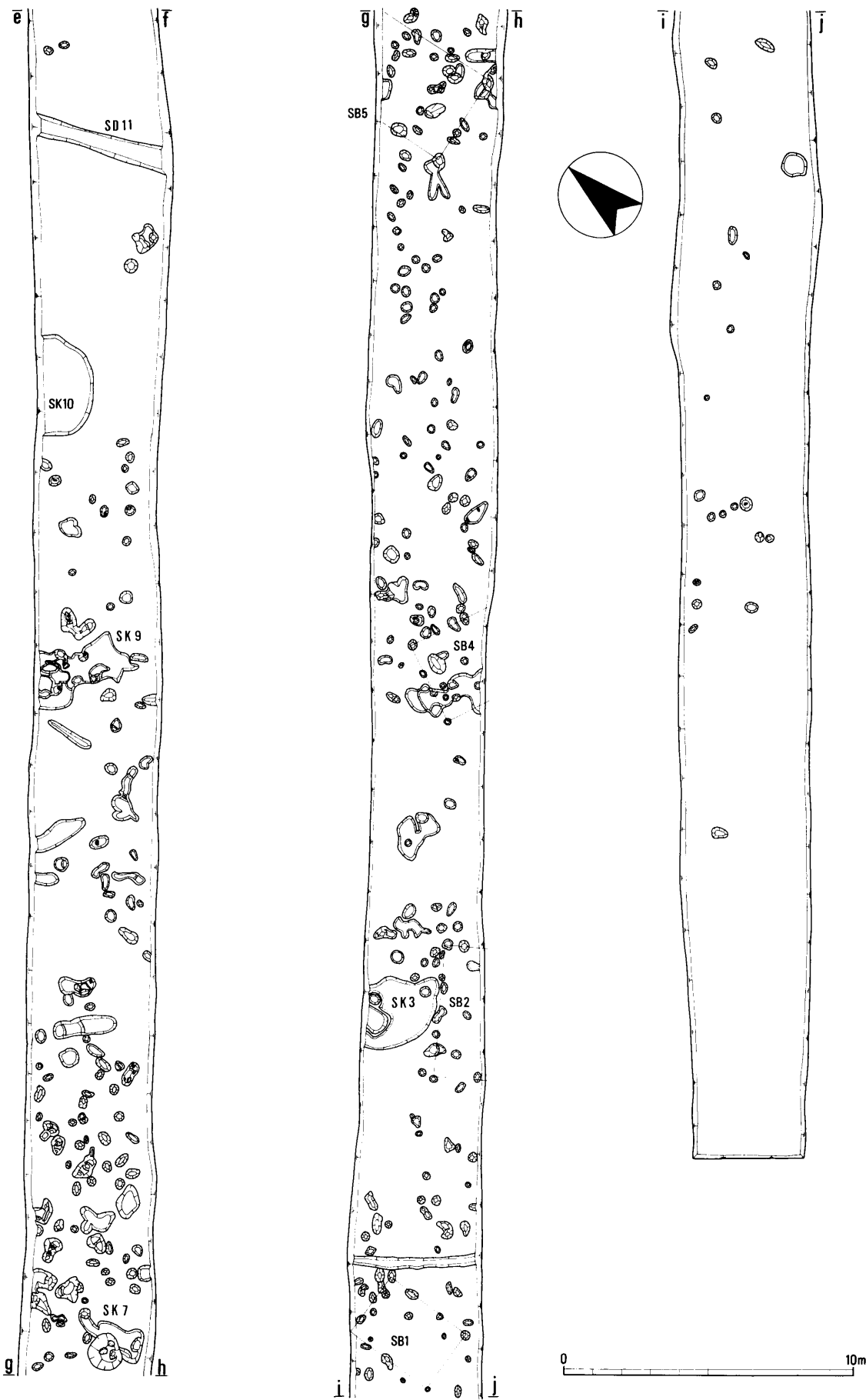
3. 小 結

今回発掘調査を行った部分は当遺跡のほぼ中央部分にあたり、遺物の散布量も多い地域である。しかし、調査区が水路予定地の幅6mに限定されたものであるため、住居跡の存在を確認するにとどまり、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。

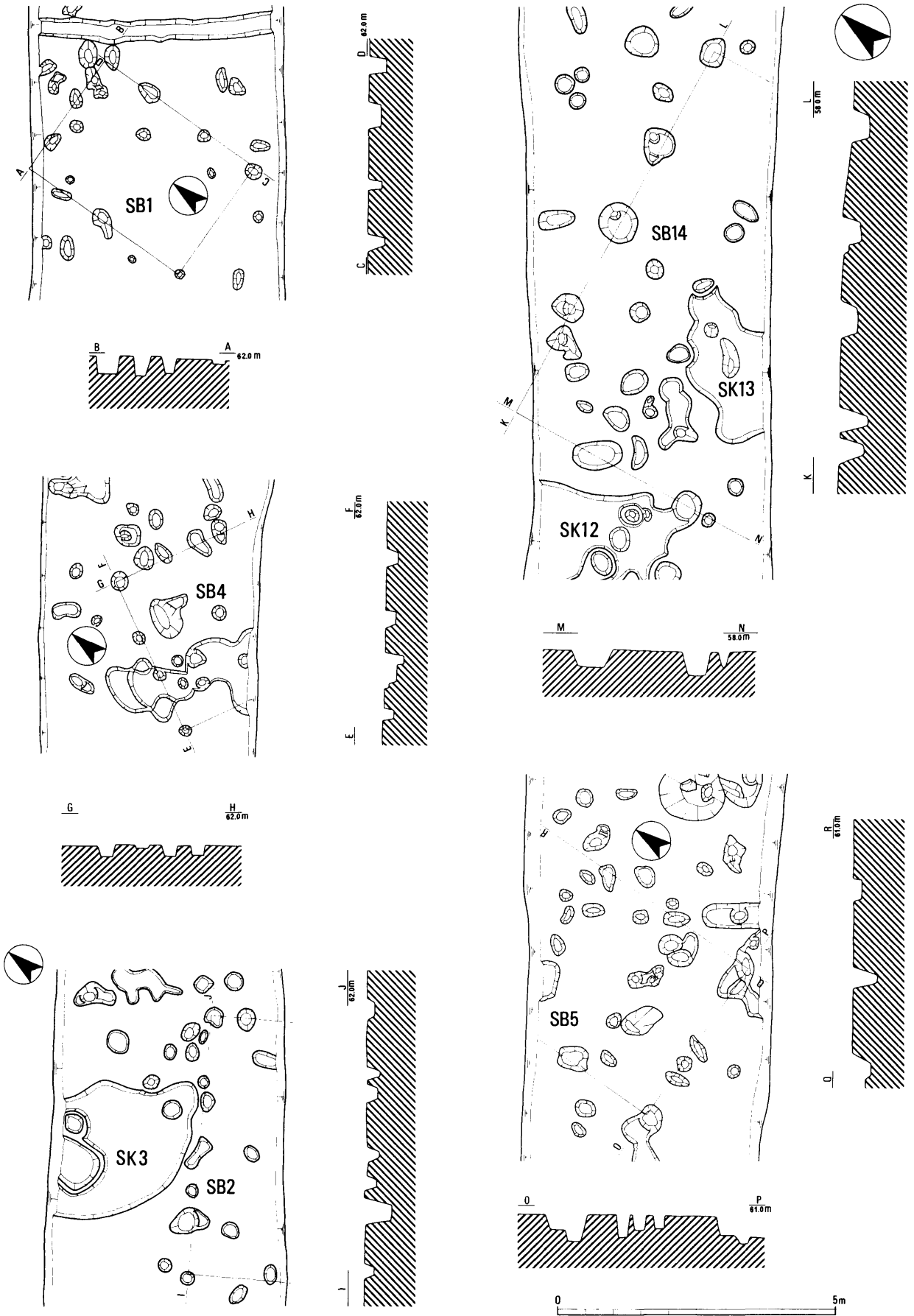
遺構は、時期が不明確なものが多いが、包含層出土遺物等も参考にすれば、調査区西部のものが奈良時代、東部のものは平安時代前半に相当するものと推測される。その場合、奈良時代の掘立柱建物S B 1・2・4・5は、柱掘形が小さく小規模なもので、棟



第9図 遺構平面図 (1:200)



第10図 遺構平面図 (1 : 200)



第11图 SB1·2·4·5·14实测图 (1:100)

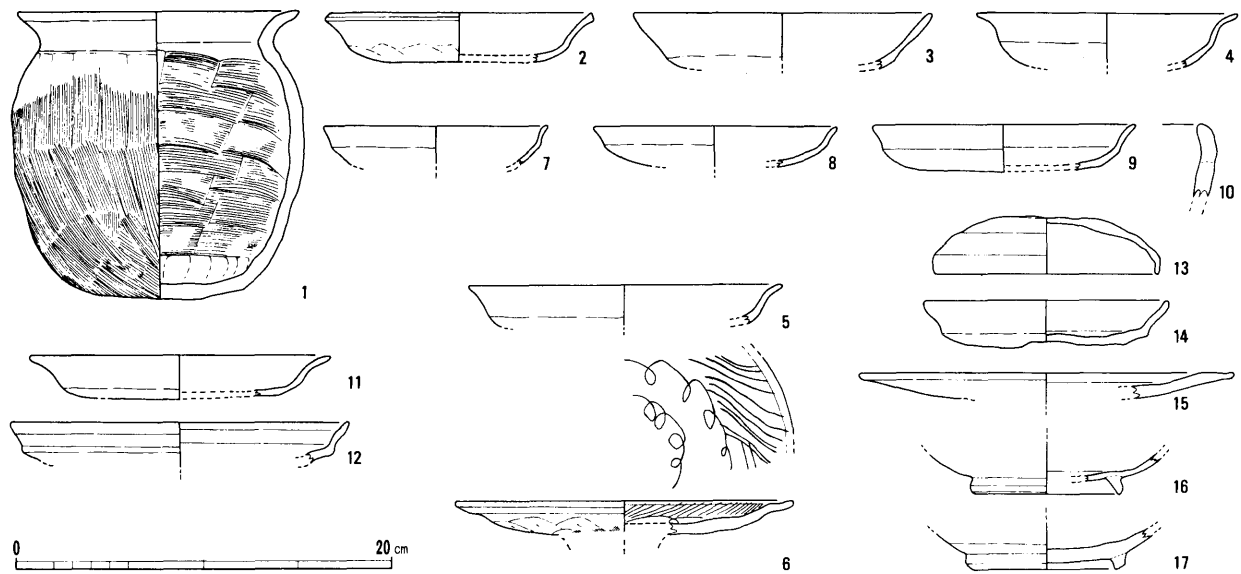


第12図 SB15～19実測図 (1:100)

方向も様々である。それに対して平安時代前期と推測されるSB15～19は、比較的大形の方形の柱掘形をもち、棟方向も揃えており、規格的な配置をもつ建物群である。したがって、奈良時代と平安時代前

半では遺跡の性格が大きく変わったことが推測されるが、遺構の時期決定に不確定の要素も多いことから、その可能性を指摘するにとどめる。

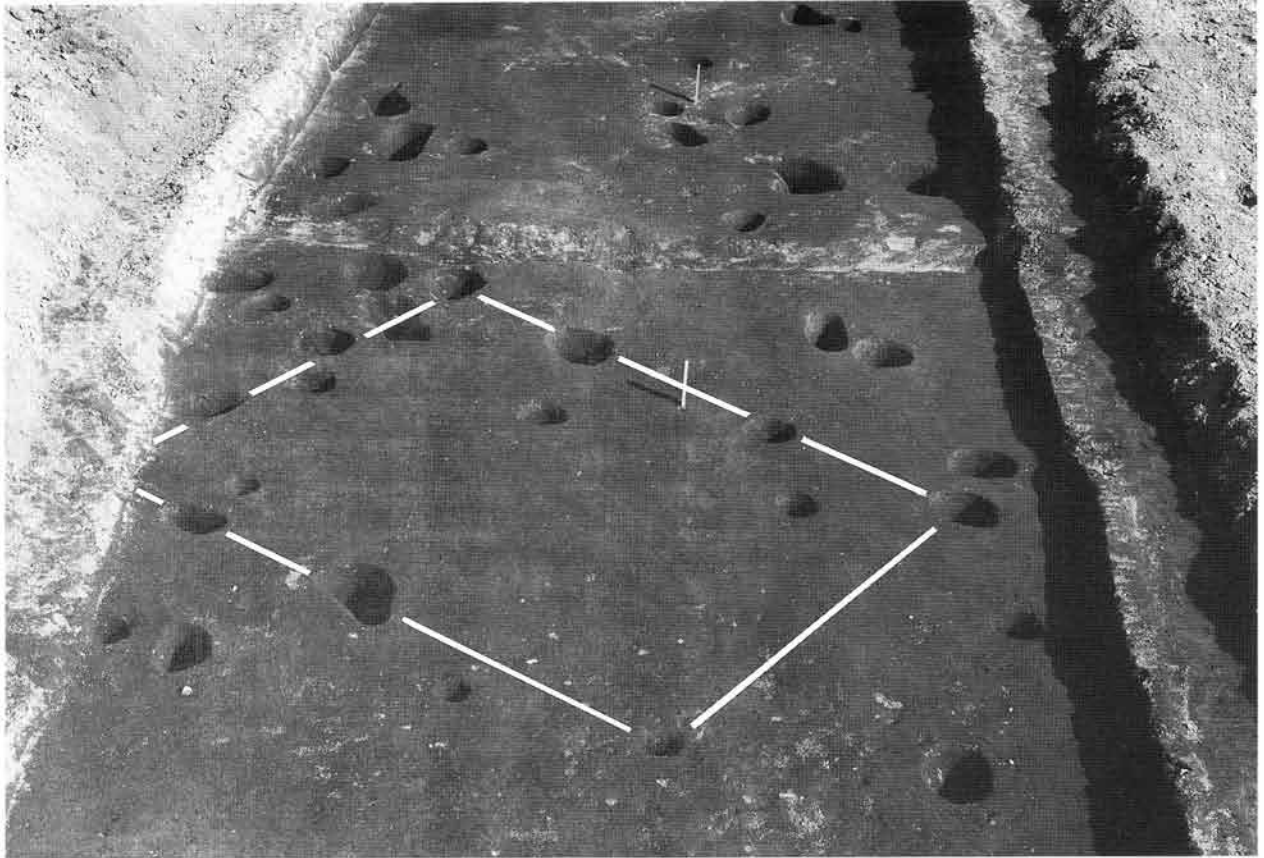
(江尻 健)



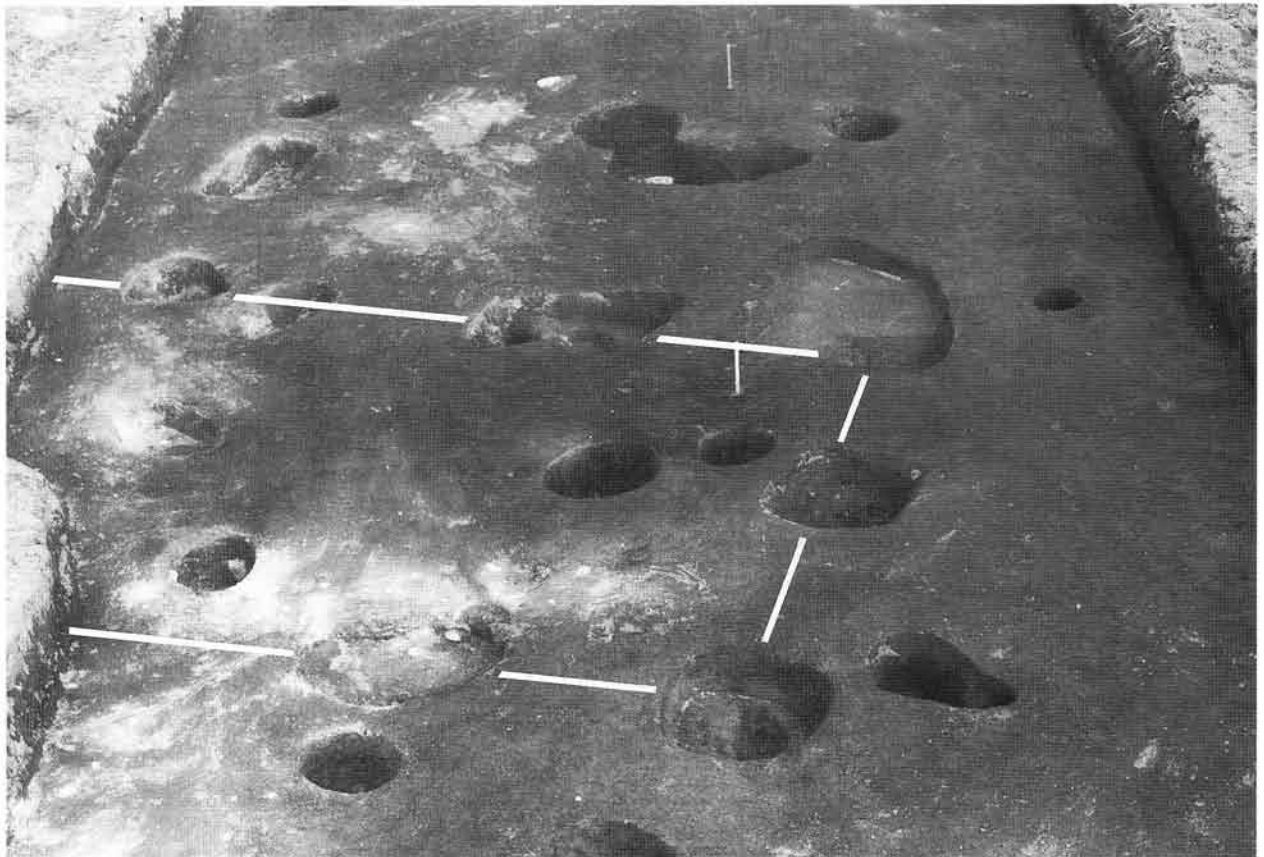
第13図 遺物実測図 (1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径	器高	その他						
1	19	土師器・甕	SB 4	15	15.3		体部外面ハケメ、内面細かいハケメ	やや粗	良	淡灰褐色	完形	
2	5	土師器・杯	SB 14	14	2.7		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	良	良好	赤褐色	1/10	
3	6	〃	〃	16	3.2		〃	〃	〃	〃	〃	内部に炭化物付着
4	14	〃	〃	14	3.0		〃	〃	〃	明褐色	〃	
5	7	〃	SB 18	17	2.5		〃	〃	〃	赤褐色	1/20	
6	3	土師器・高杯	〃	20	-		杯部内面放射暗文とラセン暗文、外面ヘラケズリ	〃	〃	〃	1/10	
7	13	土師器・杯	SB 17	12	3.0		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	〃	やや軟	明灰褐色	1/10	
8	18	〃	〃	13	2.4		〃	〃	良	淡褐色	〃	
9	17	〃	〃	14	2.3		口縁部ヨコナデ、底部外面ナデ	〃	〃	〃	〃	
10	18	製塩土器	〃	-	-		内面ナデ、外面未調整	粗	軟	明褐色	小片	
11	9	土師器・杯	SB 19	16	2.3		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	良	良	赤褐色	1/10	
12	10	〃	〃	18	3.0		口縁部2段にヨコナデ、底部外面未調整	〃	〃	〃	〃	
13	1	須恵器・蓋	包含層	12	3.1		内外面口クロナデ、天井部外面ヘラ切り未調整	良	良好	暗灰色	1/4	
14	2	土師器・杯	包含層	13	2.5		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	やや粗	良好	〃	1/4	
15	8	土師器・高杯	〃	20	-		口縁部ヨコナデ、他は不明確	良	〃	赤褐色	1/10	
16	11	灰釉陶器・碗	〃	-	-	高台径 8	底部外面口クロケズリ、他は口クロナデ	精良	〃	明灰白色	1/5	
17	12	〃	〃	-	-	高台径 9	〃	〃	〃	〃	〃	

表2 遺物観察表



SB 1 (西から)



SB 15 (西から)



S B17~19 (西から)



調査区全景 (西から)



出土遺物 (1:3)

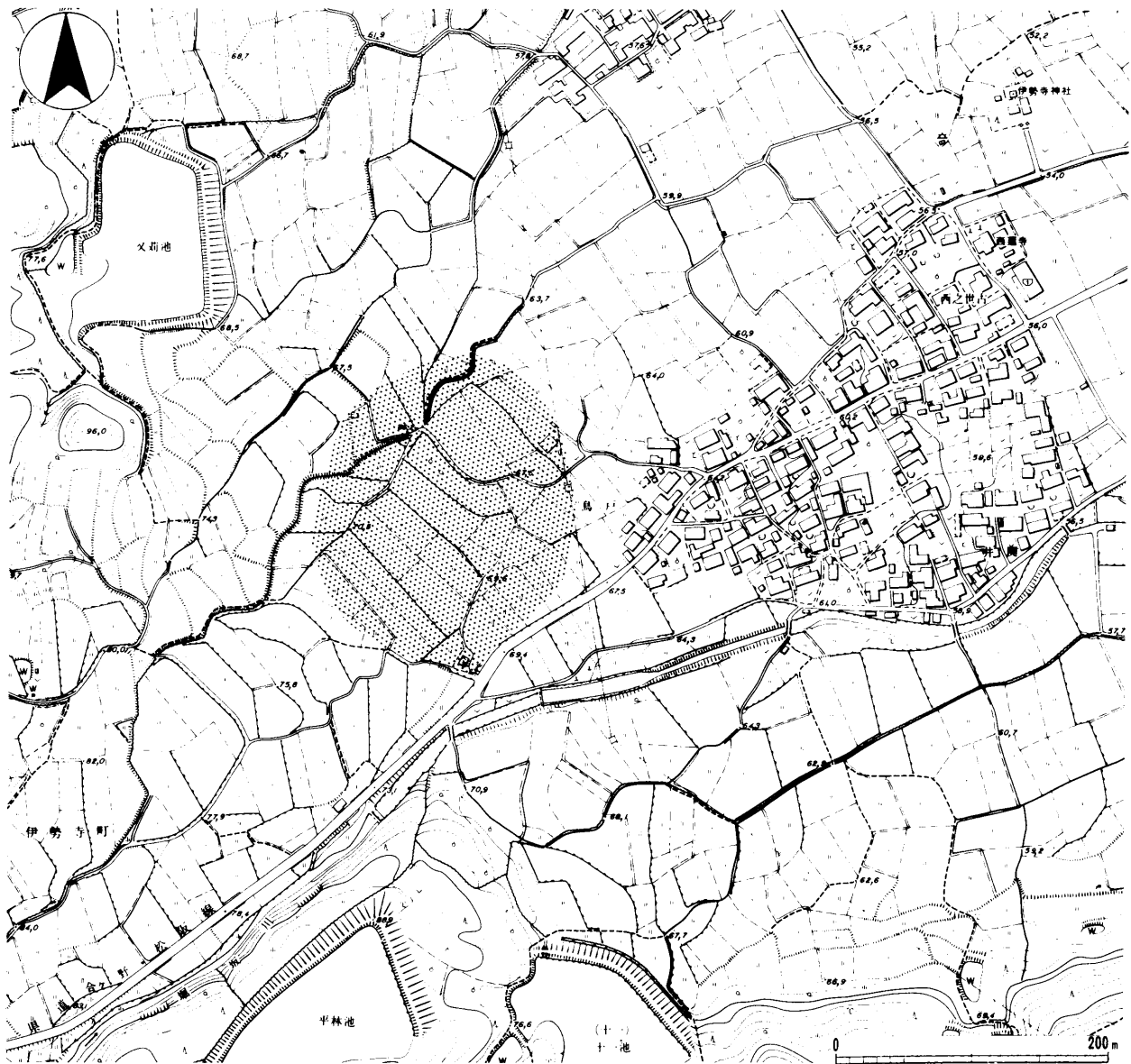
1

Ⅲ. 松阪市伊勢寺町 ^{えんのきおさ} 榎長遺跡

1. 前 言

当遺跡は、伊勢寺地区の大部分を占める堀坂川扇状地の扇頂部近くに位置し、現況は大部分が水田で若干の畑地が混在している。名称は異なるものの、隣接する鳥戸遺跡とほぼ同一の性格をもつ遺跡と考えられる。調査区は、排水路予定地の幅3m、総延長76mに及び、これは扇状地の上位やや下方を横断

するかたちとなる。基本層序は、耕作土（褐灰色砂質土）、床土（橙褐色砂質土）、灰色砂質土（中世遺物包含層）、褐色砂質土（奈良・平安時代遺物包含層）、黄褐色混礫土である。遺構検出は、黄褐色混礫土上面で行った。



第14図 遺跡地形図 (1:5,000)

2. 遺 構

遺構は、調査区の西側に集中して検出されたが、調査区の幅が3mと狭いこともあって、建物に復元できるものはなかった。

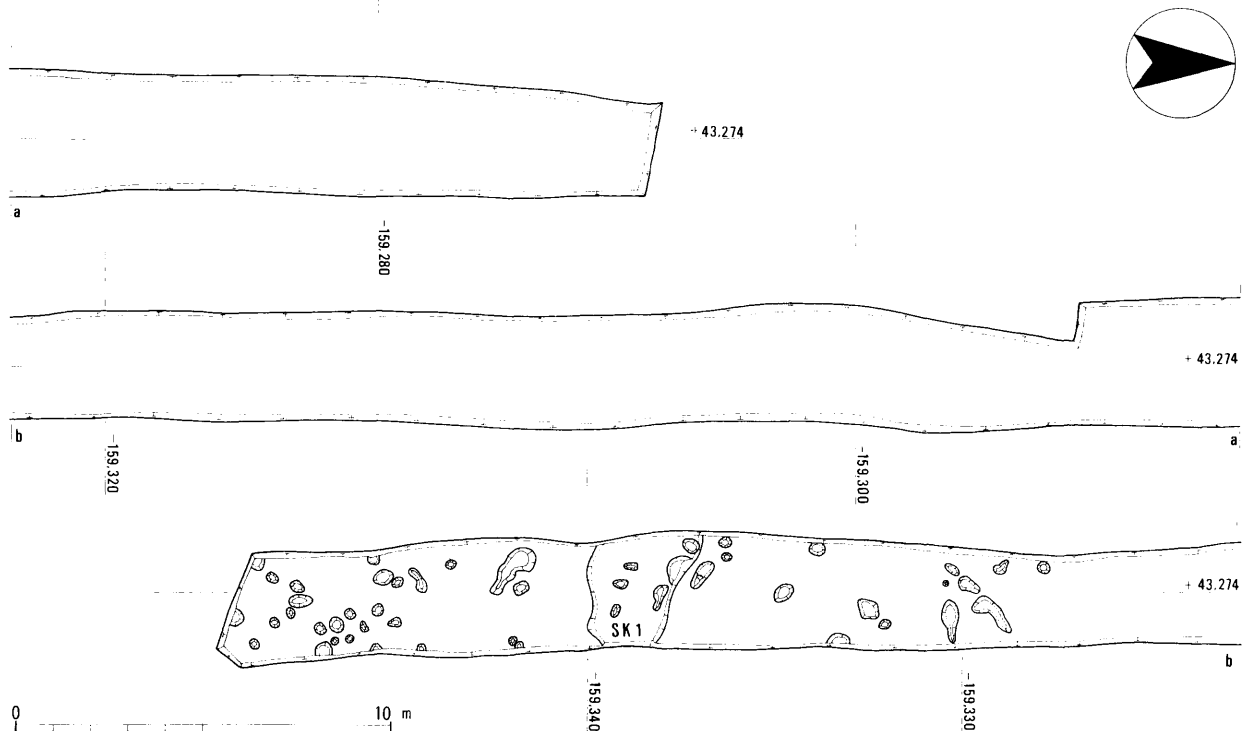
SK1 調査区を東西に横断するかたちで検出された。不定形な楕円形を呈し、底部は平である。深さは検出面から20cmと浅い。埋土の遺物から、奈良

時代前期頃と考えられる。

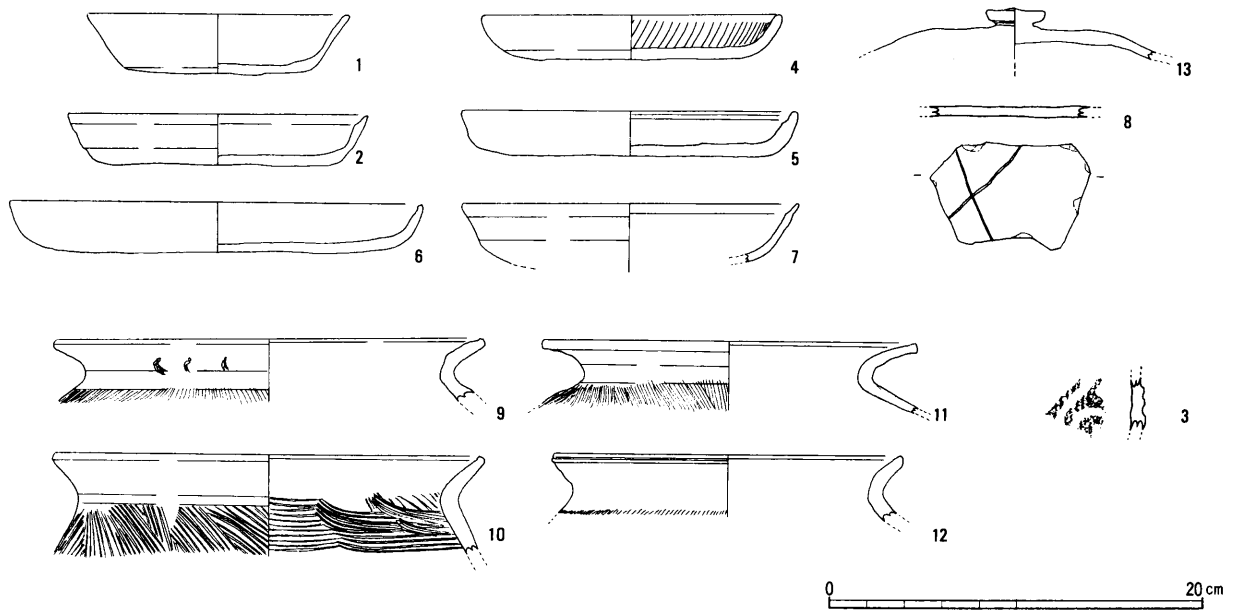
小穴群 調査区西部で検出された。昭和60年に当調査区の西側10mで、近畿自動車道に伴う発掘調査が行われた際に、多数の竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、それらとの関連が考えられる。



第15図 調査区位置図 (1:2,000)



第16図 遺構平面図 (1:200)



第17図 遺物実測図 (1:4)

3. 遺物

整理箱5箱程度の出土があり、その大半は土器である。時期は奈良時代の土師器・須恵器が中心で、器種は皿・甕が多い。また小片であるが、縄文時代中期末～後期前半に比定されるものも出土した。

(1) SK1出土の遺物

(1)は須恵器の杯、(2)は土師器の皿である。(2)の口縁端部内面は、弱い凹面を呈する。

(2) 包含層出土の遺物

縄文土器 (3) 外面に縄文を施した後、沈線を刻まれる。中期末～後期前半に属するものと考えられる。

土師器 (7)は杯、(4)～(6)は皿、(9)～(12)は甕である。(8)は底部片であり、杯の

可能性もあるが、一応皿としておく。

皿には、口縁端部内面に弱い沈線を施すもの(5)・(6)と、まるくおさめるもの(4)がある。底部外面の調整は、(5)が未調整の他は、ヘラケズリと考えられるが、(6)・(8)は明瞭でない。(8)の底部外面には、「×」のヘラ記号が刻まれる。

甕は、いずれも体部から「く」字に屈曲する口縁部をもつが、(9)・(11)は水平ちかくまで外反する。調整は、外面ハケメ、内面ナデであるが、(10)は内面にもハケメを施す。(9)の頸部外面には、ヨコナデが雑なため、工具痕が三日月状に残る。

須恵器 (13) 偏平なつまみを貼り付ける蓋である。天井部外面の1/3をロクロケズリする。

4. 小 結

榎長遺跡は、昭和60年に近畿自動車道建設にともない、約2,500㎡がすでに調査され、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物等が検出されている^②。今回の調査区は、その東側に約10mの間隔をおいて並行する幅3mのトレンチである。このため、検出できた遺構

は、SK1と小穴群にとどまった。いずれも奈良時代に属するものと考えられ、前回の調査で検出したものと一連の遺構群と推測される。このため、SK1は竪穴住居、小穴群は掘立柱建物の柱穴の可能性はある。

(江尻 健)

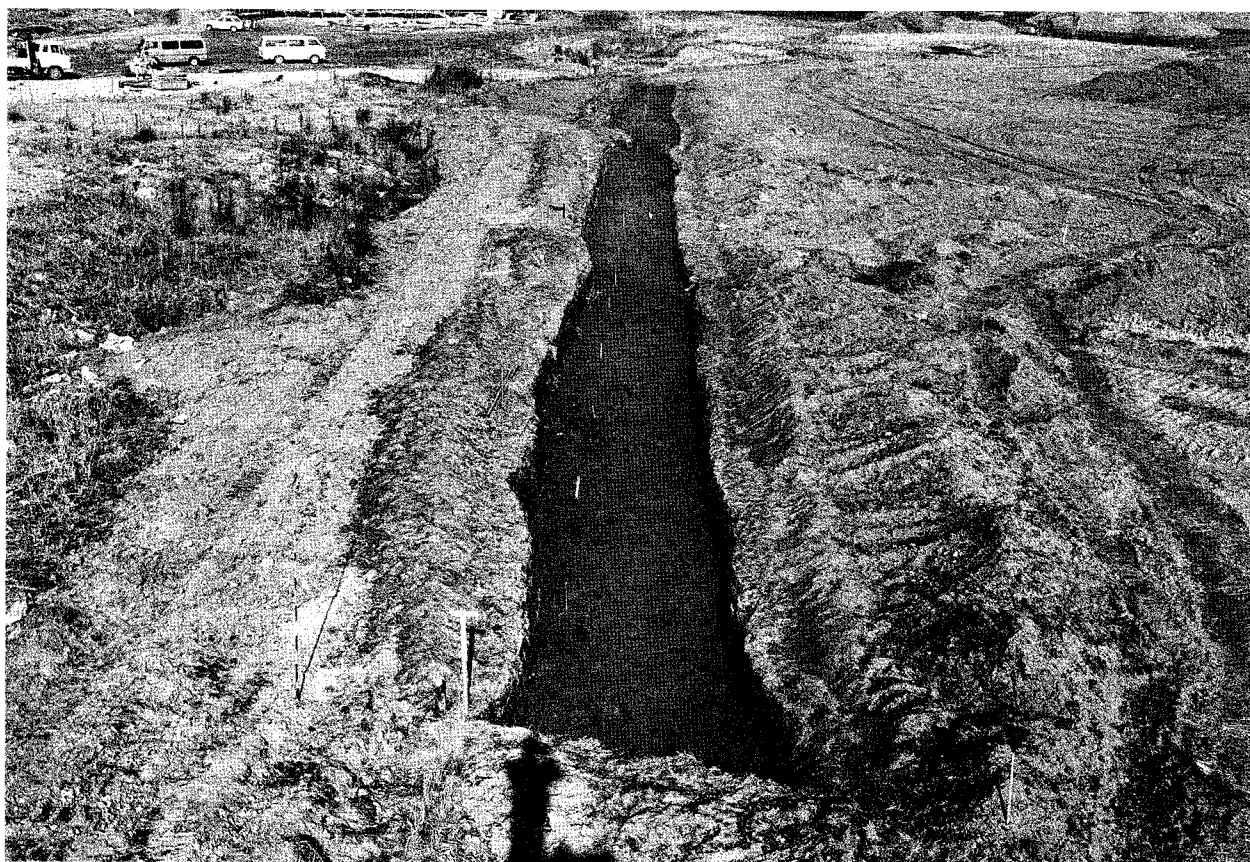
[註]

① 河北秀実 「榎長遺跡」『近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会 1986.3

② 前掲①に同じ

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
1	SK1	B-5 土坑1	須恵器	杯	口径 14 器高 3.2	平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	明灰色	密	1/3	やや不良	5
2	〃	〃	土師器	皿	口径 16 器高 2.7	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部内面に面をもつ。	底部外面ヘラケズリ(?)、口縁部ヨコナデ	赤褐色	〃	1/16		6
3	—	B-3 包	縄文土器	鉢	—		外面縄文を施した後沈線	明褐色	砂粒多含	小片		13
4	—	包	土師器	皿	口径 16 器高 2.4	平な底部から屈曲ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	内面放射暗文、底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	淡黄橙色	密	1/16		4
5	—	包 淡褐色土	〃	〃	口径 18 器高 2.4	平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部内面に弱い沈線を施す。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	明黄橙色	〃	1/10		7
6	—	〃	〃	〃	口径 22 器高 2.7	〃	底部外面ヘラケズリ(?)、口縁部ヨコナデ	明赤褐色	〃	1/4		3
7	—	B-3 包	〃	杯	口径 18 器高 3.2	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は外反する。	底部外面ナデ、口縁部ヨコナデ	赤褐色	〃	〃		10
8	—	包 淡褐色土	〃	皿	—		底部外面ヘラケズリ(?)	鈍橙色	〃	小片	外面ヘラ記号「×」	9
9	—	B-3 包	〃	甕	口径 22.6	「く」字に屈曲する口縁部で、端部はつまみ上げる。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	赤白色	〃	1/10		12
10	—	〃	〃	〃	口径 22.8	「く」字に屈曲する口縁部で、端部は内に肥厚する。	内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	〃	1/8		11
11	—	B-4 P1	〃	〃	口径 20	「く」字に大きく外反する口縁部で端部は肥厚し外に面をもつ。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	明黄橙色	〃	1/4		8
12	—	包 淡褐色土	〃	〃	口径 19	「く」字に屈曲する口縁部で、端部は外に面をもち、沈線を巡らす。	〃	淡褐色	〃	1/8		2
13	—	〃	須恵器	蓋	—	平な天井部に偏平なつまみをはり付ける。	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	明灰色	〃	3/4		1

表3 遺物観察表



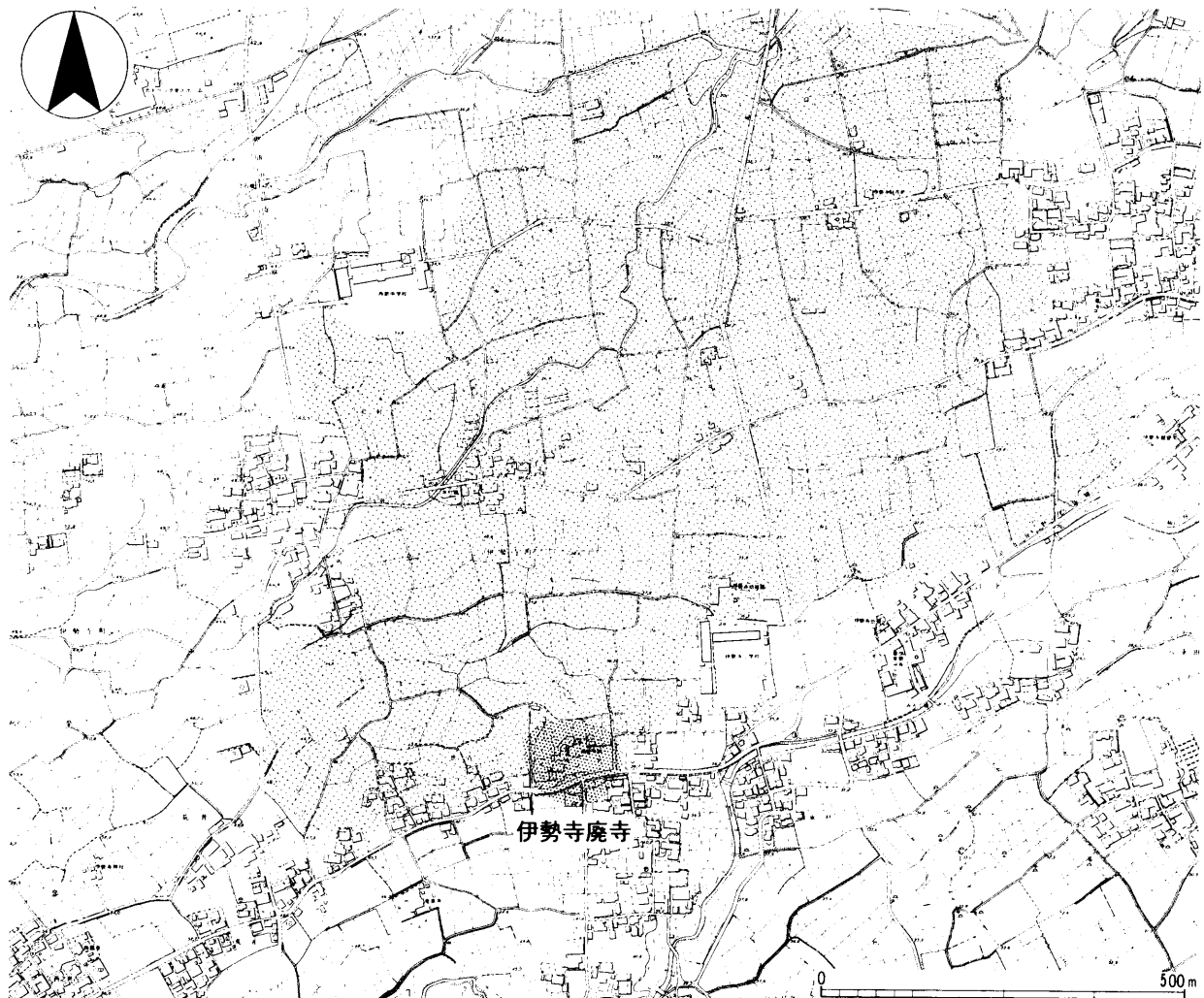
調査区全景（南から）

N. 松阪市伊勢寺町 いせでら 伊勢寺遺跡 きたうら (北浦地区)

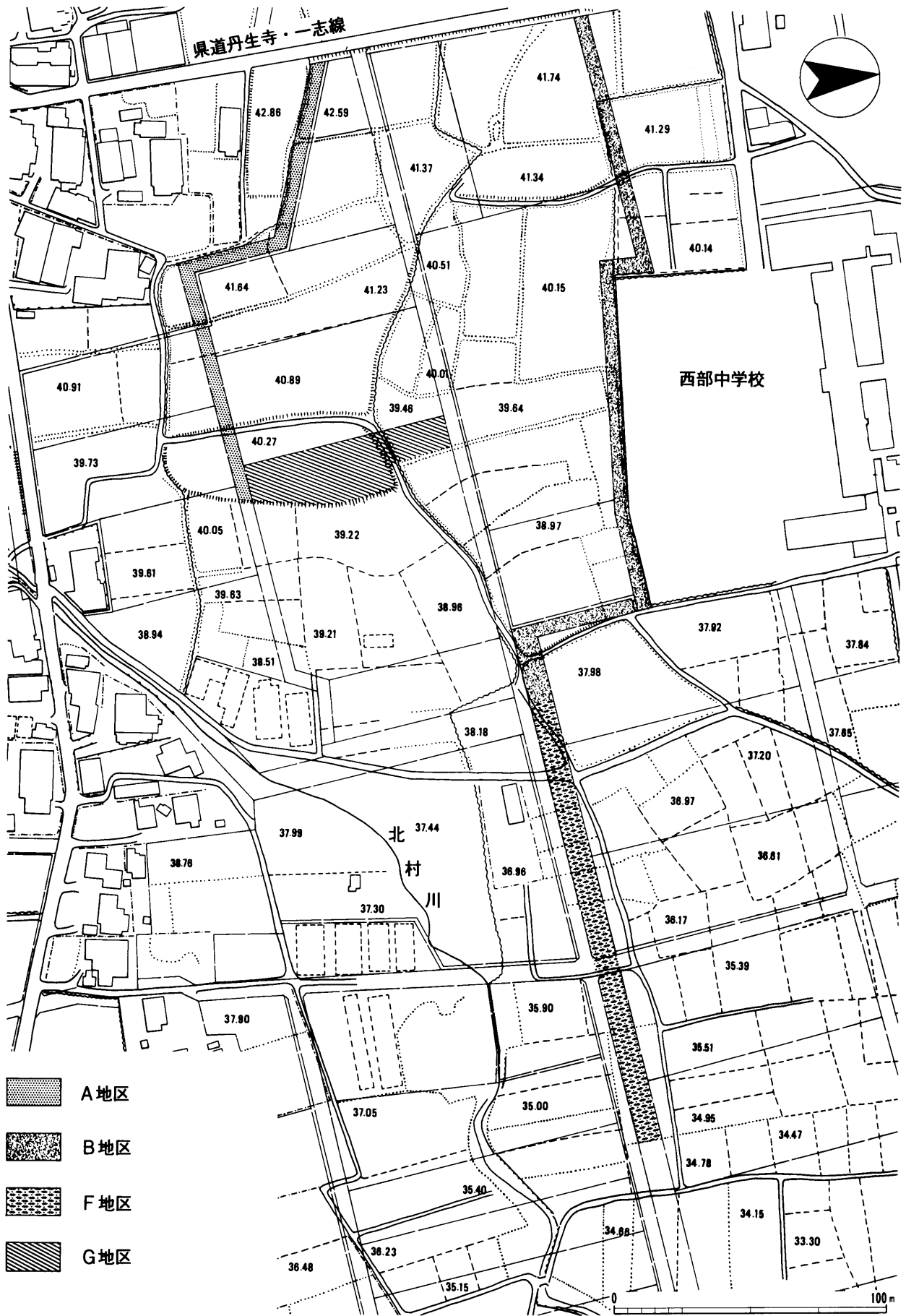
1. 前 言

昭和62年度の県営圃場整備事業は、NTT関連の大型補正予算の結果、年度途中にその予定面積を大幅に拡大することになった。県教育委員会文化課では、急遽、該当地域内で埋蔵文化財の分布調査を行い、その有無の確認に努めた。伊勢寺町北浦地区では、伊勢寺遺跡が当地区まで広がることが予想されたため、昭和62年11月に試掘調査を行った。その結果、事業地内約80,000㎡に遺跡が存在することが確認された。この結果をもとに県農村整備課と遺跡保

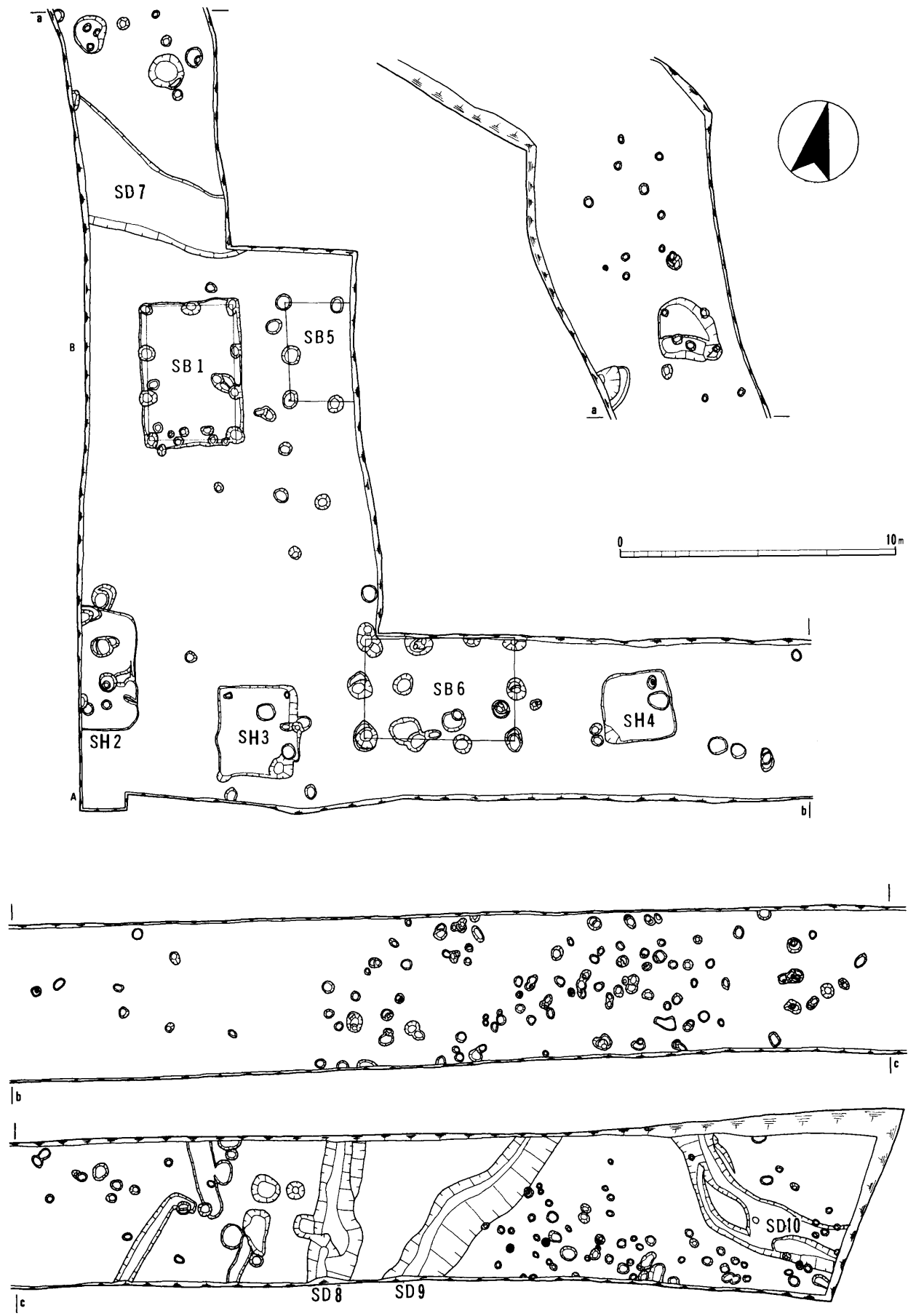
護についての協議を重ねたが、排水路部分を中心とする4,115㎡についてはどうしても記録保存せざるを得ないことになった。しかし県教育委員会文化課では、年度当初の発掘予定面積ですすでに対応能力を越えており、年度内の調査は困難として再三協議を重ねた結果、排水路部分の西側2,300㎡を松阪市教育委員会に調査を依頼し、残りの東側1,815㎡については工事を延期し、昭和63年度に発掘調査を行うことになった。



第18図 遺跡地形図 (1 : 10,000)



第19図 調査区位置図 (1:2,000)



第20图 A地区遺構平面図 (1:200)

2. 地理的環境

松阪市の西部は、紀伊山地の北東端にあたり堀坂山、観音岳をはじめとする標高600~750mの山々が連なっている。これらの山々から東方に広がる伊勢湾へ向かって幾筋もの中小河川が流れている。これらの河川は、伊勢寺町周辺で大規模な複合扇状地を形成する。伊勢寺遺跡はこれらの扇央部から扇端部

にかけて広がっている。北浦地区は伊勢寺遺跡の北端部、岩内川とその支流の北村川によって形成された扇状地の扇端部近くに位置する。標高は40m前後で現況は水田である。なお、当遺跡の歴史的環境は「I. 上相田遺跡」を参照されたい。

3. A 地区

1. 遺構

調査区西部では、遺構の検出はなく、中央部で奈良時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟、時期不明の掘立柱建物1棟、溝1条、東部で室町時代の溝3条を検出した。この他にも2ヶ所でピット群を検出したが、調査区が狭いこともあって、建物としてとらえることができない。

A. 奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

SH2 調査区中央で検出した。西半が調査区外であるため全体の規模は不明であるが、南北4.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。床面南東部で竈の痕跡を検出した。

SH3 SH2の東側で検出した。東西3.9m、南北3.3mの長方形を呈する。南東隅で直径約1mの小土坑を検出した。壁の傾斜は緩やかで、そのため底部では直径約30cmほどになる。外側にあたる南東壁は焼土となっており、焼土と炭の混じった砂質土が、土坑内や、それを覆うように堆積している。またこの近辺には多くの土器が散乱している。竈に関連する遺構と考えられるが、確証はない。

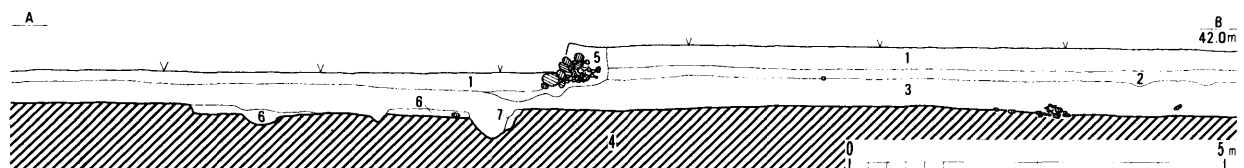
SH4 調査区中央で検出した。東西2.5m、南北2.4mの小規模な方形を呈する。床面で弱いながらも焼土を検出した。

(2) 掘立柱建物

SB1 調査区の中央部で検出した。桁行3間(約4.9m)×梁行2間(約3.26m)の南北棟であるが、南側梁行は3間となる特殊な形態である。さらに建物内を竪穴状に掘り、白茶色の粘土を貼り広げている。粘土は非常に硬くよく締まっており、床面北側で2ヶ所で焼土となっている。柱掘形は粘土を切って掘られており、竪穴側壁に位置する。柱間は桁行、北側梁行とも1.63mの等間であるが、南側梁行は0.89m+1.33m+1.04mの不等間である。棟方向はN12°Eである。

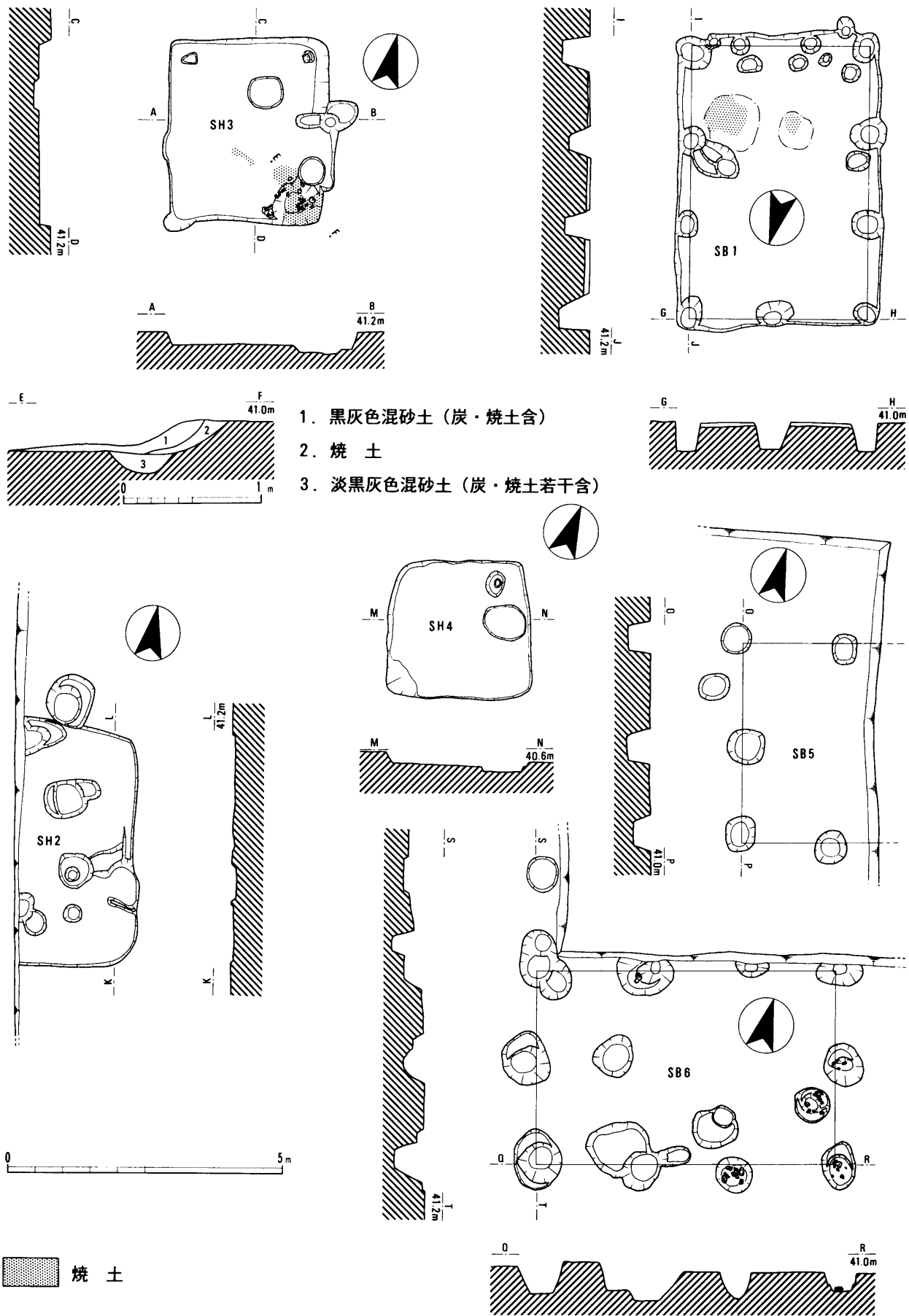
SB5 出土遺物からはこの時代のものとは決定できなかったが、この近辺の遺構が全て奈良時代のものであり、棟方向がSB6とほぼ同じE8°Nであるためこの時代のものとした。調査区中央で検出したが、東側は調査区外に延びているため桁行は1間分しか検出できなかった。梁行は1.8mの等間である。

SB6 桁行3間(5.4m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方向はE5°N柱間は桁行、梁行とも1.8mの等間である。柱掘形は直径70cm~1m



1. 茶灰色土(耕作土) 2. 1と3の混り 3. 黒色土 4. 黄褐色粘質土 5. 暗茶灰色土
6. 3と4の混り(SH2埋土) 7. 若干4の混り3(SH2埋土)

第21図 A地区土層図 (1:100)



第22图 SH2、SH3、SH4、SB1、SB5、SB6 实测图 (1:100)

の大形のもので、中から小石を検出したものもあり、根石かもしれない。西側梁行を北に延長する位置で柱穴を検出した。北側に庇が付くかもしれない。

(3) 溝

SD7 幅3m~2m、深さ10cm程度の浅い溝である。建物群の北限を示すように東西へ延びるためこの時代としたが、出土遺物もなく確証はない。

B. 室町時代の遺構

(1) 溝

SD8 南北に延びる溝で、両端は調査区外のため不明である。深さ80cm~45cmで、北側ほど深くなっている。

SD9・10 調査区東端で検出した。G地区の調査の結果、SD9・10は同一の遺構であることが判明した。調査区外東側から緩やかに北へ向きを変え、さらに大きく蛇行して南側調査区外へ延びている。東端では深さ10cm前後と浅いが北端では27cmを、南端では約60cmを測り、急激に深くなっている。

2. 遺物

遺物は、整理箱に6箱程度と少なかったが、SH3とSD8から比較的まとまった出土があった。

A. 奈良時代の遺物

図示できたものはすべてSH3出土である。

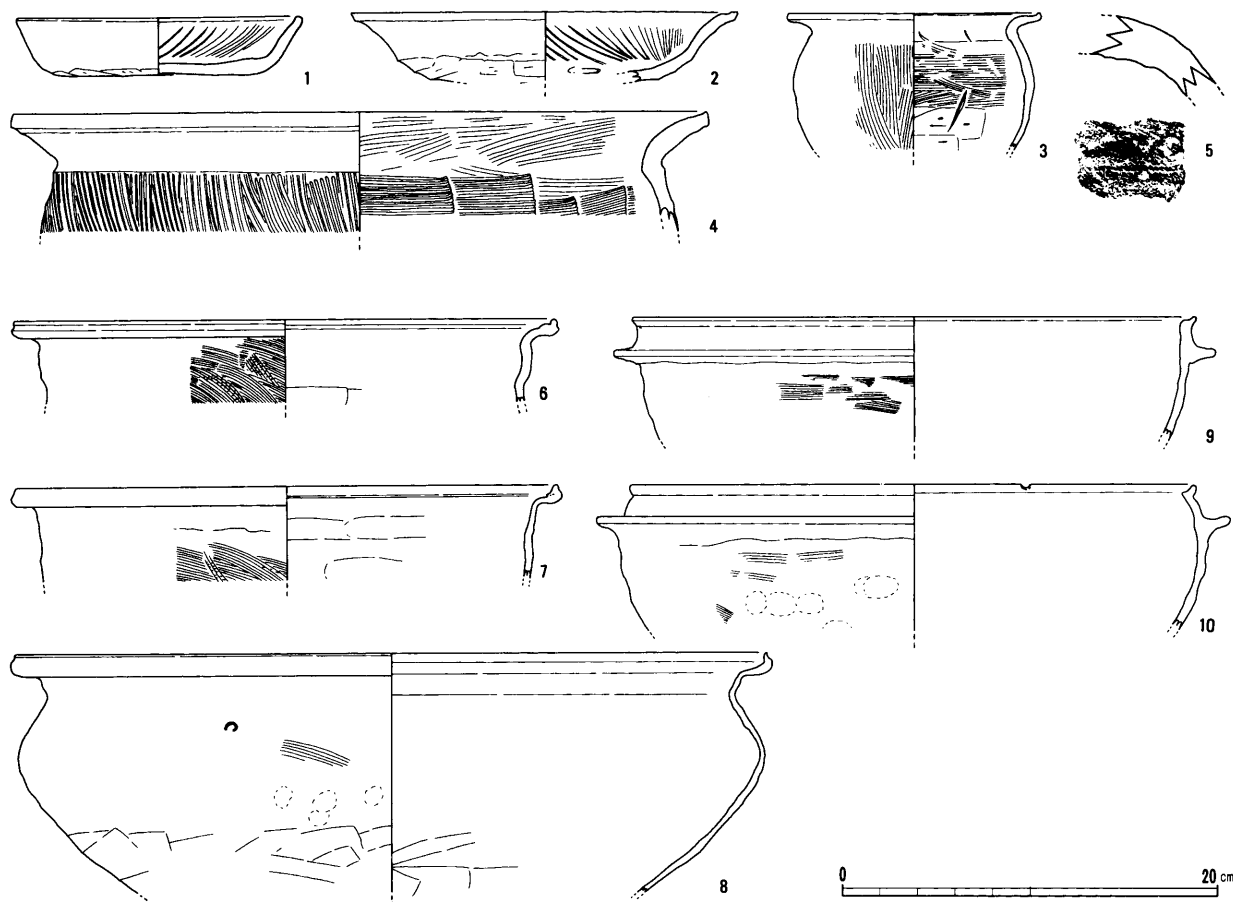
〈土師器〉

杯(1) 摩滅が激しいためラセン暗文は確認できなかった。底部外面はヘラケズリされる。

甕(3),(4) (3)は口径13.3cmの小型のもの、(4)は口径37cmの大型のもので長胴甕になるものと思われる。両者ともハケメにより調整され、外面のハケメの方が粗い。特に(4)のものは3本/1cmと非常に粗いもので、口縁部内面も同一原体と思われる。また、体部内面のハケメは深くえぐるように行っている。(3)の内面では、工具のあたり痕が観察でき、外面は口縁端部まで煤の付着がある。

高杯(2) 脚部を欠損している。大きく外反する杯部で、外面下半はヘラケズリされる。

瓦(5) 丸瓦の小片である。外面ヘラケズリ、内面には布の絞り痕が明瞭に残る。



第23図 A地区出土遺物実測図(1:4) 1~5はSH3、6~10はSD8 出土

B. 室町時代の遺物

図示できたものはすべてSD8出土である。

〈土師器〉

鍋(6)～(8) 口縁部が短く外反するもの(6)、(7)と「く」字状に屈曲して外反するもの(8)がある。口縁端部は、(6)が内に巻き込み気味で外面に凹線を施し、(7)は折り返し、(8)はつまみ上げと様々である。調整は、いずれも外面7本/1cmの細かいハケメであるが、(8)は未調整の部分も多く残す。(6)の内面下半はヘラケズリされるが、(7)は頸部内面は指によるえぐるような強い

ナデ、他は浅いヘラケズリともとれるナデである。(8)の体部下半は、内外面ともナデととれるほど浅いヘラケズリである。(8)の肩部には竹管状の工具で穿孔を試みた痕跡がある。三者とも外面には煤が付着している。

羽釜(9)、(10) 口縁部が短く直立するもの(9)、内傾するもの(10)がある。両者とも上端部は面をもち、蓋がのるものと思われる。調整は両者とも外面ハケメ、内面ナデで、鏝以下には煤が付着する。(10)の口縁上端部には棒状工具により押圧されたくほみがあるが、乾燥時についたものと考えられる。

4. B 地区

松阪西部中学校の南側に接する、幅4m、全長300mのトレンチである。遺構は全く検出されず、遺物も山茶碗がトレンチ東端のF地区近くで出土したの

みである。

(森川常厚)

5. F 地区

幅5m、長さ156mのトレンチである。層序は、耕作土(暗褐色粘質土)、明黄褐色土、明褐色砂質土、褐色砂質土、黄褐色混礫土の順で、耕作土から褐色砂質土までは遺物を多く含む。遺構検出は、黄褐色混礫土上面で行った。

1. 遺構

調査区西部で竪穴住居2棟、掘立柱建物4棟、溝3条を検出した。調査区が幅5mと狭いので、掘立柱建物についてはその規模を確定することができなかった。東部では遺構はまったく検出されなかった。

A. 奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

SH18 南北4m、東西3m、深さ約30cmの長方形を呈し、四隅に小穴があるが、主柱穴は不明である。南側60cmは、やや浅くなっている。竈は、中心よりやや南に下がった東側で検出された。埋土から完形の須恵器蓋(15)が出土した。

SH19 北側は調査区外のため全体の規模は不明であるが、東西3.4mの正方形に近い形態を呈するものと思われ、深さは約25cmである。床面で1基の柱

穴を検出したが、他のものはなく、竈も不明である。埋土から鉄製紡錘車出土した。

(2) 掘立柱建物

SB12 調査区やや西よりで検出した。3間×3間(柱間約1.4m)で、柱掘形の直径は約60cmである。直径約30cmの柱痕跡を検出できたものもある。仮に南北棟とした場合の棟方向は、N22°Wである。

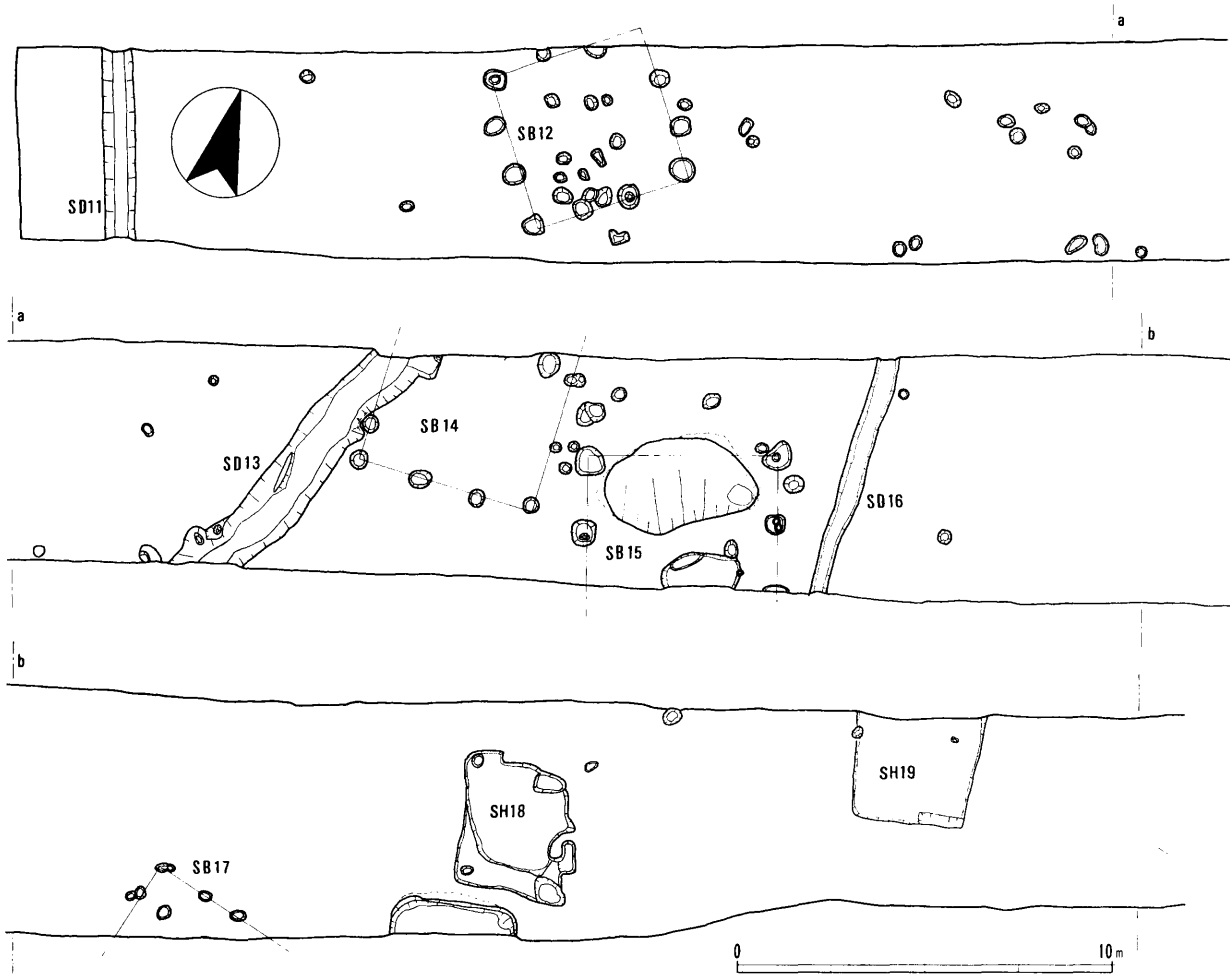
SB14 3間×3間以上で、柱掘形の直径は60cmを測る。SD13を切る。仮に南北棟とした場合の棟方向はN、桁行は1.8m、梁行1.6mの等間である。

SB15 南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、2間×2間以上で、柱間は不等間である。柱掘形は一辺約80cmの不整形を呈する大形のものである。3基の柱穴で柱痕跡を検出できた。仮に南北棟とした場合の棟方向はN16°Wである。

B. 平安時代前期の遺構

(2) 掘立柱建物

SB17 大部分が調査区外のため、全体の規模は不明であるが、2間以上×3間以上を検出した。柱間は不等間で、柱掘形の直径(約35cm)から考えると、他の掘立柱建物より小規模なものとして推定される。



第24図 F地区遺構平面図 (1:200)

仮に南北棟とした場合の棟方向はN17° Eである。

C. 鎌倉時代前期の遺構

(1) 溝

SD11 調査区西端を南北に延びる幅約80cm、深さ約50cmの溝で、幅、深さともに均一な整然としたものである。

D. 時期不明の遺構

(1) 溝

SD13 幅約1.5m前後、深さ約30cm前後の自然流路的な溝で、調査区を北東から南西に横切っている。SB14に切られる。溝底から縄文土器片が出土しているが、混入と考えられる。

SD16 幅60cm、深さ10cm前後の溝である。SB14と方向がほぼ揃うため、関連する遺構であるかもしれない。

2. 遺物

整理箱6箱程度の出土遺物があり、そのほとんど

は土器である。しかし、遺構に伴う遺物は少なく、包含層出土の土器が多い。土器は奈良時代の土師器が中心で、平安時代前期の土師器、鎌倉時代前期の山茶碗、晩期後半の縄文土器片等があり、またSH19の竪穴住居からは鉄製紡錘車も出土した。

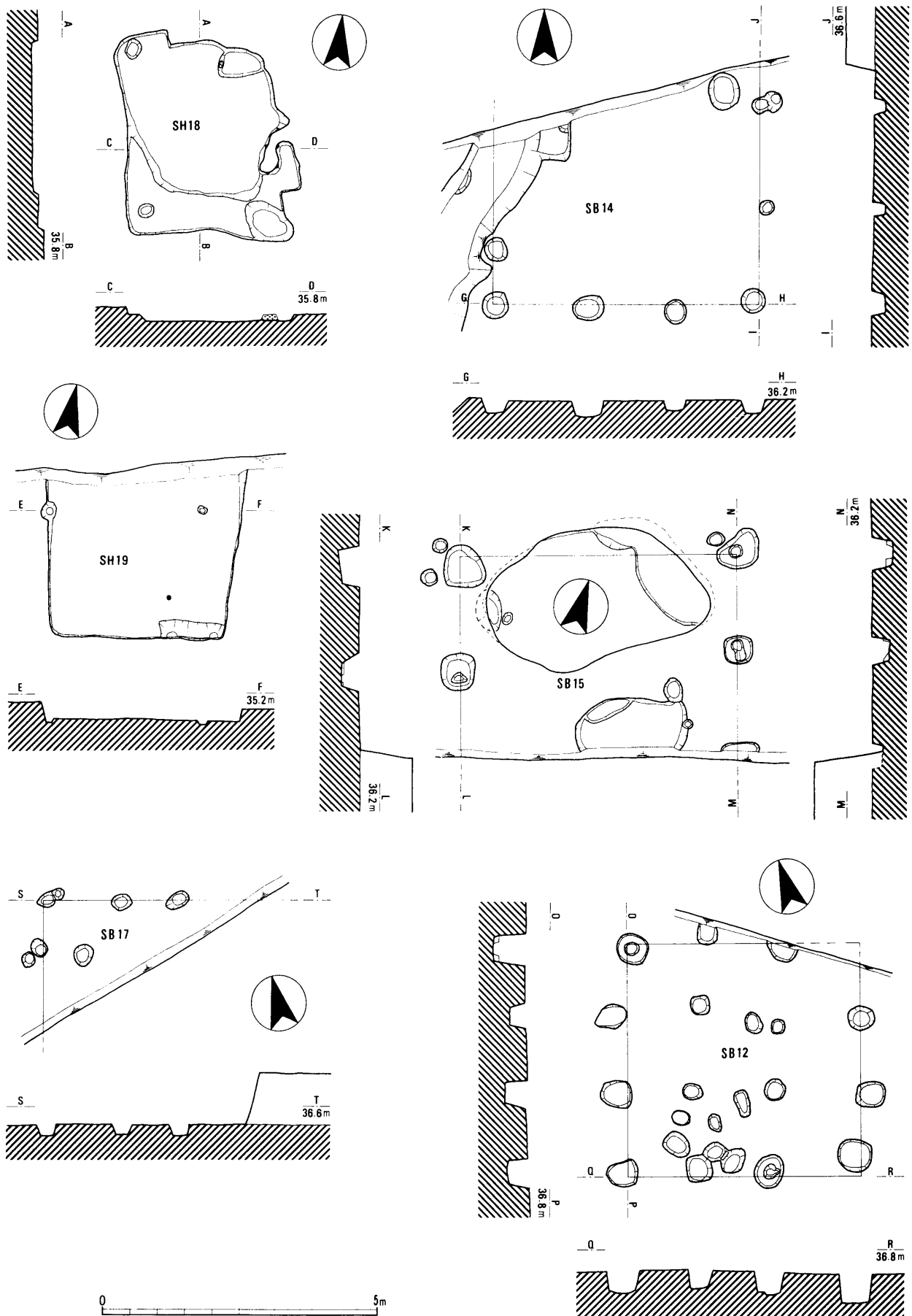
A. 奈良時代の遺物

(1) SH18出土の遺物

土師器の粗製椀(11)、皿(12)、甕(13)、(14)、須恵器の蓋(15)がある。(14)は小形で比較的長い口縁部をもつのに対し、(13)は短く屈曲し、端部をつまみ上げる。(15)のつまみは、宝珠つまみであるが、非常に偏平なために、中央が窪んだ形を呈する。

(2) SB14出土の遺物

土師器の杯(16)、皿(17)、甕(18)、(19)がある。(18)、(19)はいずれも口縁端部を摘み上げる。(18)の頸部外面には、ハケメ調整時の工具の当たり痕が明瞭に残り、やや荒い仕上げである。



第25図 SH18、SH19、SB12、SB14、SB15、SB17実測図 (1 : 100)

(3) SH19出土の遺物

土師器の甕(20)、鉄製紡錘車(21)がある。(21)は、紡輪、紡茎ともそろった完形に近いものである。

(4) SB12出土の遺物

図示できるものは、土師器皿(22)のみである。口縁端部内面には浅い1条の沈線が巡るが、調整時のもので、意識的なものではないようである。

B. 平安時代前期の遺物

(1) SB17出土の遺物

土師器の杯(23)、(24)がある。両者とも口縁部は大きく外反し、底部外面は未調整であるが、(24)は非常に深い形態である。

C. 鎌倉時代前期の遺物

(1) SD11出土の遺物

図示できるものは、山茶碗(25)のみである。高台の接地面には靱殻痕が残る。

D. 包含層出土の遺物

縄文土器(26)と土師器の皿(27)がある。(26)はSD13出土であるが、混入と考えられる。外面には二枚貝による条痕を施し、内面はナデ消しているようである。晩期後半のものと考えられる。(27)は強いヨコナデのため、体部との境が弱い段を呈している。

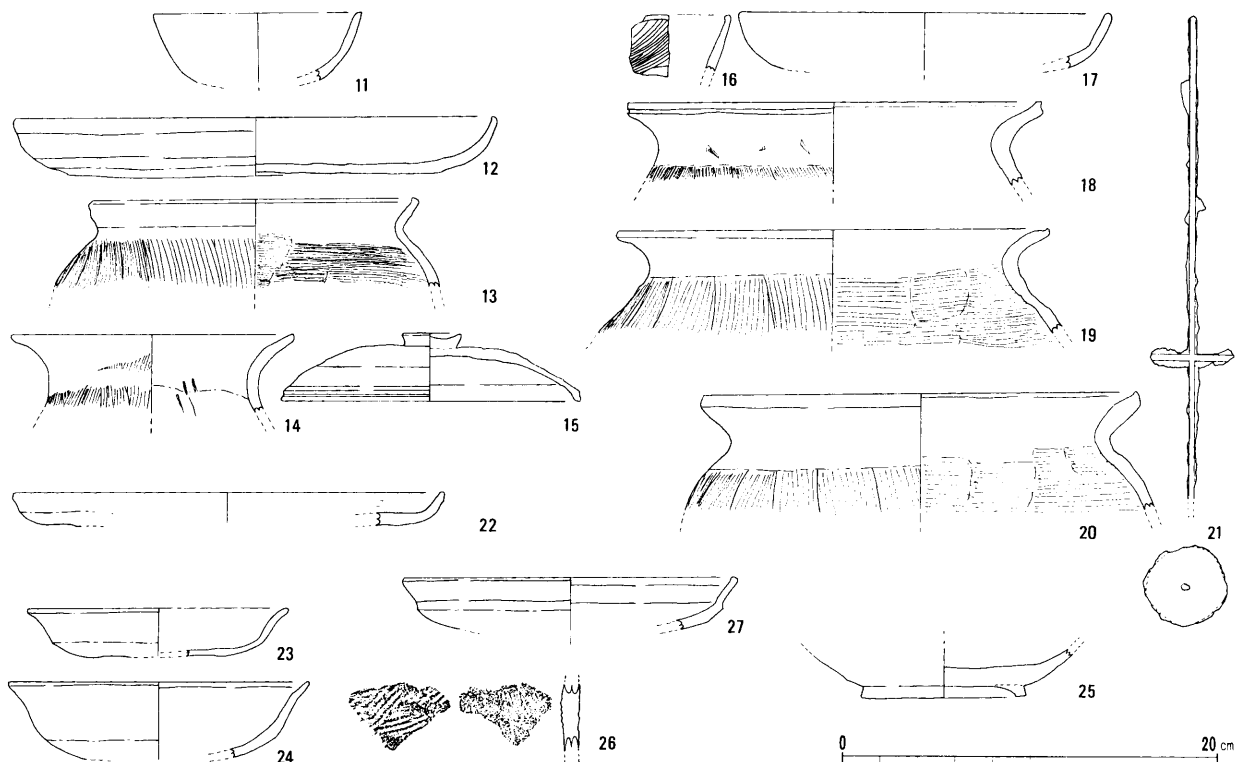
(江尻 健)

6. G 地区

G地区は、A地区の北に接する調査区である。層序は、耕作土、床土、茶褐色土(包含層)、暗茶褐色土、黄色粘土(地山)の順で、地表から60cm~80cmで地山にいたる。遺構は茶褐色土下から切り込んでいるものがほとんどであるが、検出が容易なため黄色粘土上面で行った。

1. 遺構

飛鳥時代~室町時代の竪穴住居、掘立柱建物、溝等を検出したが、すべて調査区南部からで、特に調査区南東部で集中して検出された。調査区北部では、小穴を検出したにとどまり、調査区をトレンチに縮小して行った。



第26図 F地区出土遺物実測図 (1:4) 11~15はSH18、16~19はSB14、20、21はSH19、22はSB12、23、24はSB17、25はSD11、26はSD13、27は包含層出土

A. 飛鳥時代の遺構

(1) 竪穴住居

S H24 調査区南東部で検出した。東部をS H27に切られるため全体の形態は不明であるが、一辺約3.6mの方形を呈するものと考えられる。支柱穴は検出できなかった。北辺中央に焼土があり、竈の痕跡と考えられるが、この焼土はS H27に切られておらず、S H27に伴うものと重複しているようである。

S H25 調査区南東端で検出したため全体の形態は不明であるが、一辺約5.5mの方形を呈するものと考えられる。北辺中央で焼土を検出したが、この焼土内から出土した土師器杯(40)は、外反して端部が内傾する口縁部の形態や底部外面にヘラケズリが認められない等から斎宮のS K1445かその前後に並行するものと考えられる。したがってS H25に伴う焼土とは考えられず、形態を検出できなかったが、平安時代初～前期に属する竪穴住居が重複していたようである。

S F36 調査区東部の中央で検出した焼土である。焼土の範囲は直径60cmほどで、付近から土師器杯(28)、皿(29)、甕(30)が出土しており、竪穴住居の竈の痕跡と推定される。

B. 奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

S H27 調査区南東部でS H24・25と重複して検出された。遺物によれば、先行するS H24・25を切ることになるが、S H25については明確ではない。一辺4.5mの方形を呈するものと考えられ、西辺中央に焼土があり、竈の痕跡と考えられる。

S H29 調査区南東部でS H25・27と重複して検出された。両者を切り、南北3m、東西2.5mの正方形に近い長方形を呈する。東壁中央と西壁近くの2ヶ所で焼土を検出した。しかし、どちらがこの住居に伴うものかは不明である。検出面からの深さは30cmほどであるが、東側は60cmもあり、別の土坑の重複かもしれない。

(2) 土坑

S K32 直径2.6m～3mの不整円形を呈する。検出面からの深さは10cm～15cmで、中央がやや深いもののおおむね平らである。

S K37 調査区中央北側で、他の遺構とはやや離

れて検出された。直径1.6m～2mの不整円形を呈し、深さは検出面から1.1mを測る深いものである。埋土は4層に分かれ、厚さ40cmの第Ⅰ層：暗茶色土、その下に第Ⅱ層：茶色土、第Ⅲ層：黄褐色土、第Ⅳ層：黒色粘土が厚さ10cm～20cmで続くが、遺物は第Ⅰ層、第Ⅱ層から出土し、第Ⅲ層、第Ⅳ層からは出土していない。したがって土坑の底は、第Ⅲ層上面の可能性もある。その場合の深さは70cmほどである。しかし、第Ⅲ層の黄褐色土は非常に不安定であるため、埋土と考えている。素掘りの井戸と考えられなくもないが確証はない。

C. 鎌倉時代の遺構

(1) 土坑

S K21 調査区南端で検出した。南側をS D9・10に切られるが、東西1.1m、南北1.1m以上の隅丸長方形を呈するものと考えられる。東に接して同様な遺構S K22がある。不慮にして1個石を取り上げてしまったが、40cmほどの細長い石を3個、「コ」字状に配置している。遺物は出土しなかったが、包含層から完形の土師器皿3枚が出土しており、この土坑に埋納されたものかもしれない。

S K22 S K21の東に接して検出された。形態はS K21と同様で、やはり南側をS D9・10に切られる。深さが検出面から40cmほどであるが、やや掘りすぎたようで、S K21と同様20cmほどであったものと考えられる。S K21と同様に石を配置しているが、東西両壁に2段に石を積み上げ、あたかも石室状を呈している。中央北寄りに土師器皿2枚(64)、(65)を正立状態に南北に並べて埋納している。

(2) 溝

S D34 調査区中央で検出した逆「L」字状に屈曲する溝である。幅60cm、検出面からの深さ20cmほどの小溝である。埋土は全てが小石である部分があり、区画溝とも暗渠排水とも考えられる。

D. 室町時代の遺構

(1) 掘立柱建物

S B26 梁行2間の東西棟と考えられるが、桁行の南側が3間、北側が2間の変則的な建物である。北側には庇が付き、柱穴は直径40cm～50cmの円形を呈し、庇の柱穴はやや小さく直径40cm以内である。柱間は不等間で、棟方向はE31°Nである。



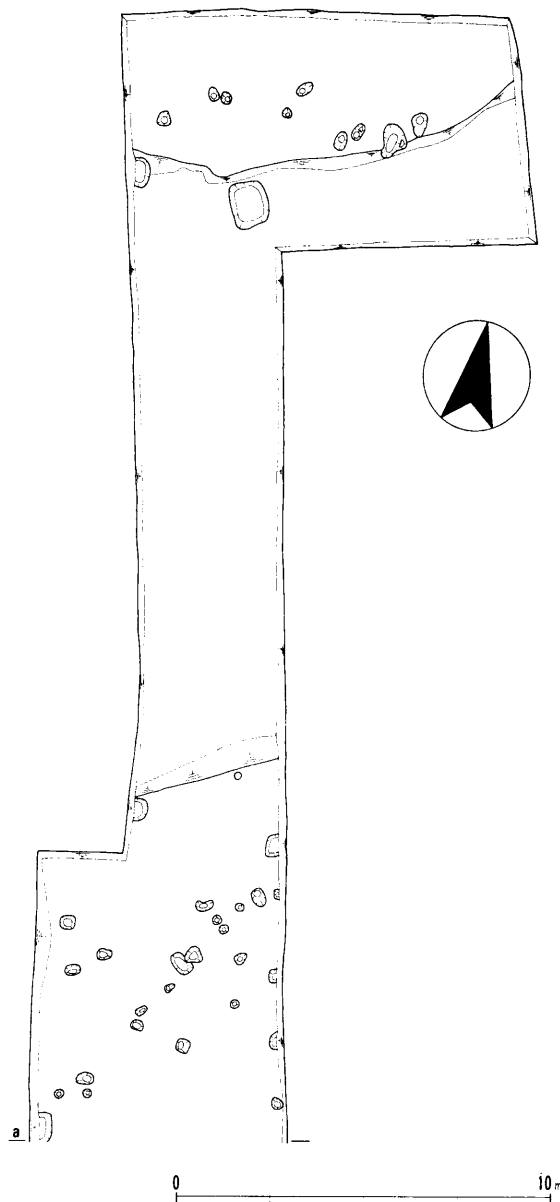
第27图 G地区遺構平面図 (1:200)

S B30 柱穴からは室町時代の遺物は出土していないが、S B26と方向が同様なため、この時代に属するものと考えられる。2間×2間の東西棟で、柱間は不等間、棟方向はE28° Nである。柱穴は直径40cm～50cmの円形で、検出面から60cm～70cmほどしっかり掘り込まれている。

S B31 S B30と同様、S B26と方向がほぼ同じであるため、この時代に属するものとした。3間×2間の東西棟で、棟方向はE20° Nである。桁行は不等間であるが、梁行は1.8mの等間である。柱穴は、直径50cm～60cmの円形を呈する。

(2) 柱列

S A33 S B31の北に3.4m離れて、東西に延びる



第28図 G地区遺構平面図 (1:200)

柱列である。柱穴は直径30cm～60cmの円形で、方向はE20° Nである。S B31と方向が一致するため、これに伴うものと考えられる。

(3) 溝

S D23 調査区南端で検出した「L」字状に屈曲する溝である。南側は調査区外へ続いているが、A地区では検出されておらず、調査区端で止まるものと推定される。幅90cm、深さは検出面から60cm前後の深いものである。

E. 時期不明の遺構

(1) 掘立柱建物

S B28 検出できなかった柱穴もあるが、4間×2間の南北棟に推定した。棟方向はN10° Wである。他の建物より大規模で、柱穴も大きく、直径50cm～70cmを測るが、形態は円形または方形と多様である。柱間も不等間であり、建物とするに疑問もある。南東角の柱穴の上面には焼土が及んでおり、この焼土より先行するものであることがわかる。前述したように、この焼土が平安時代初期～前期に属することからそれ以前のものである。A地区、F地区で奈良時代の建物が検出されていることから、この時代に属する可能性が大きい。

(2) 溝

S D20 調査区南端を東西に延びる溝である。西側は調査区外に続き、東側はSD9・10に切られる。幅60cm、深さは検出面から30cmほどである。SD9・10に切られることから室町時代以前のものである。

S D35 調査区中央を東西に延びる溝で、両端とも調査区外へ続いている。幅1m前後、検出面からの深さ60cmで、少なくとも3回以上掘り直されている。西側では、掘り直しの度に方向のずれが認められる。埋土からは常時水が流れていた様子は認められず、何かを区画していたものと考えられる。SD34に切られることから鎌倉時代以前のものであり、S B28と方向がほぼ揃うことから同時期の可能性もある。

2. 遺物

遺物は整理箱に20箱程度出土した。

A. 飛鳥時代の遺物

(1) S F36出土の遺物

(28)は土師器の杯、(29)は皿、(30)は甕である。

(28) は口縁部と底部の一部を欠損しており、器形の復元は推定で行った。暗文は、底部近くの体部内面を横方向に平行に行い、その後放射暗文→ラセン暗文の順に施している。(29) の内面にはハケメが明瞭に残る。(30) の体部と口縁部の接合は雑である。

(2) S H 24出土の遺物

(31) は土師器の杯、(32) は甕、(33) は須恵器の蓋である。(31) の内面は、放射暗文とラセン暗文を2段に施し、口縁端部外面に1条の沈線を巡らす。(32) の体部外面には、記号と思われる1条のヘラ沈線が施されている。

(3) S H 25出土の遺物

〈土師器〉

杯(40) 摩滅が激しいが、底部外面はナデにより調整されるものと考えられる。他のものとは時期差があり、平安時代に属するものと考えられる。

皿(41)、(42) 両者とも底部から屈曲して立ち上がる口縁部の端部は外反するが、(41) は、全体に厚く仕上げられている。摩滅が激しいが、底部外面はナデにより調整されるものと考えられる。(42) の底部外面には「⊗」のヘラ記号が刻まれている。焼成後の鋭利な工具によるものと考えられる。

蓋(46) 平坦な天井部を呈するものと考えられ、つまみ側面には指頭圧痕を残す雑な仕上げである。

甕(43)～(45) 口径15cmの小形のもの(43)、25cmの大形のもの(44)、鍋に近い形態のもの(45)がある。(45) は小片からの推定のため、もう少し口径が小さい可能性もある。また、体部外面下半のハケメは、ヘラケズリ状に非常に強く施されている。

高杯(48) 杯部外面にハケメを残し、暗茶色を呈する粗製の高杯である。

〈須恵器〉

図示できたものは、蓋(47)のみである。

B. 奈良時代の遺物

(1) S H 27出土の遺物

(34) は土師器の杯、(35)、(36) は高杯である。(34) のラセン暗文は2重に施されている。外面はヘラケズリで調整するものの、粘土紐接合痕が残る。(35)、(36) は接合しなかったが、色調、胎土が酷似しており、同一個体の可能性がある。(36) は面取りの意識は認められるものの不明瞭で、板状工具によるものと思われる縦方向の不規則な沈線が残る。また、筒部と裾部の接合も雑である。

(2) S K 32出土の遺物

(37) は土師器の杯、(38)、(39) は甕である。(37) の口縁部のヨコナデは、底部内面中央近くにまで及んでいる。(42) は口縁端部外面にハケメが残り、内面のハケメは1cmに20本の非常に細かいものである。

(3) S H 29出土の遺物

〈土師器〉

杯(49) 口縁部は、2段にヨコナデされる。

皿(50) 口縁部は、内弯して内に肥厚する。

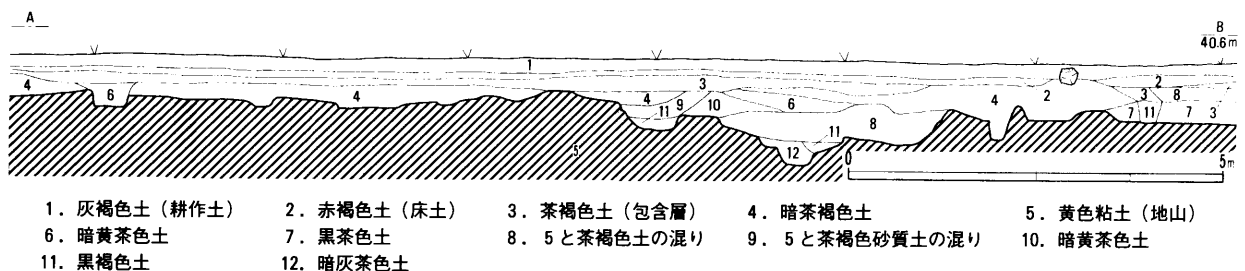
甕(51)～(54) (53)、(54) は長胴になるものと考えられる。(52) のハケメは1cmに4本の粗いものであり、(54) の外面では、原体が確認でき、1.6cmに8本である。内面は板状工具によりナデられるが、浅いハケメとすることもできる。(51) の体部外面には「ㄨ」のヘラ記号が刻まれている。

甗(55) 体部内面上部はナデで調整されるが、ハケメが若干残る。

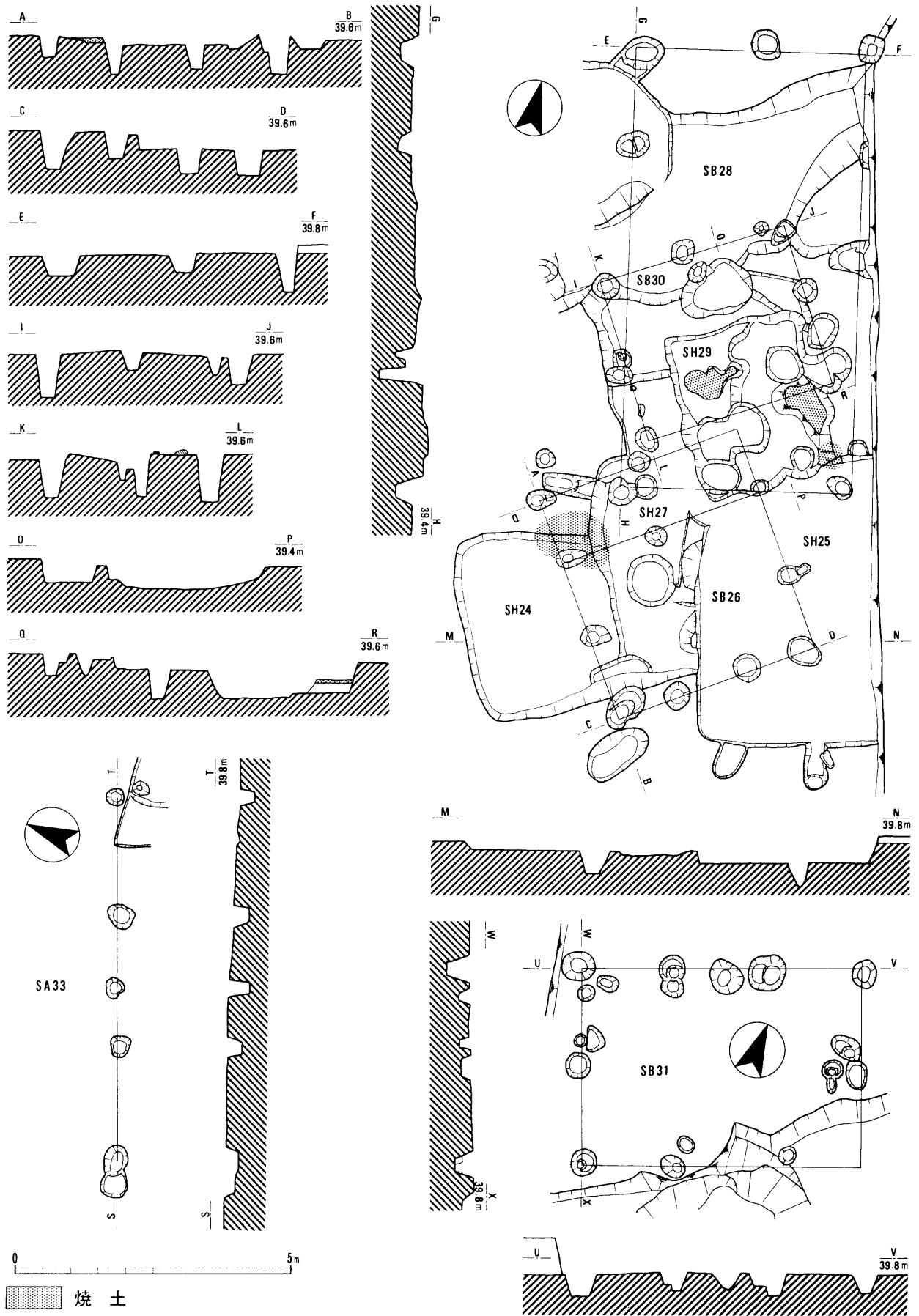
〈鉄製品〉

釣針(56)～(59) (56)～(59) は、錆が激しく分離できなかったが、無鐵の単式釣針と考えられ、ちもとはそのままおわるものと考えられる。

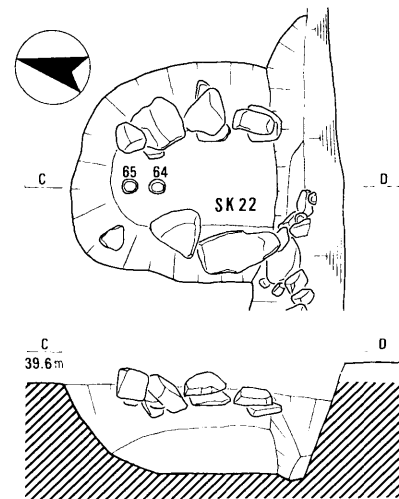
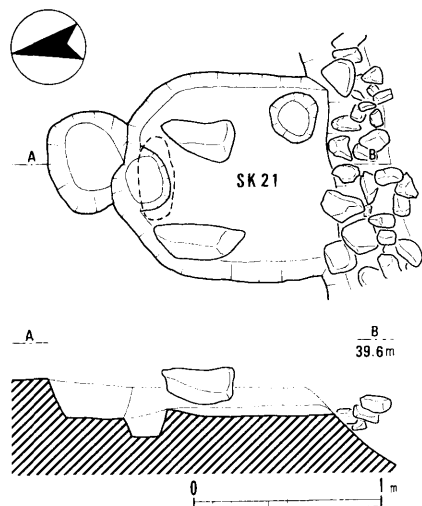
鉄鎌(60) 平基有茎で、正三角形にちかい五角形を呈する。



第29図 G地区土層図 (1:100)



第30图 SH24、SH25、SH27、SH29、SB26、SB28、SB30、SB31、SA33 实测图 (1:100)



第31図 SK 21、SK 22 実測図 (1:40)

C. 鎌倉時代の遺物

(1) SD 34出土の遺物

山茶椀 (62)、青磁椀 (61)、須恵器甕 (63) がある。(61)の外表面には、連弁文が浮き彫りにされ、(62)の高台接地面には粉殻痕が認められる。(63)は混入と考えられ、外表面には棒状工具による1条の沈線と同一工具による波状文が左回りに施文される。

(2) SK 22出土の遺物

出土したものは埋納されたものと考えられる土師器皿 (64)、(65)である。両者とも雑な成形ではあるが、口径はほぼ同じである。

D. 包含層出土の遺物

〈縄文土器〉

(66)～(69)があり、(66)、(68)、(69)は中期、(67)は後期に属するものと考えられる。(66)は、隆帯による区画内に羽状沈線を施す。羽状沈線は、一部3段以上で隆帯上にも及んでいる。(67)の口縁部は波状を呈するものと思われ、沈線と擦り消し縄文で施文される。縄文はLRである。(68)は、口縁端部直下に2条の凹線を巡らし、その下に刺突文を施している。刺突は半裁竹管により、斜め右方向から施している。(69)は、凹線を巡らし、その間に刺突文を施す。刺突は斜め右方向から行っている。

〈土師器〉

杯 (70)～(73) 口縁部が外反するもの (70)、外反して端部で内弯するもの (71)～(73)がある。前者は底部外面をヘラケズリするが、後者はナデか未調整である。(73)の口縁端部外面には1条の浅い沈線が巡る。

皿 (74)～(76) いずれも口径8cm弱の小皿である。内面のみナデ調整するが、(76)は口縁端部外面までナデが及ぶ。(75)の底部外面には粉殻圧痕が若干認められる。

鍋 (77) 外面のハケメは1cmに5本のやや粗いもので、煤の付着がある。

〈ロクロ土師器〉

図示できたものは (78)のみである。底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。

〈須恵器〉

図示したものは (79)のみである。宝珠つまみが付くものと考えられる。

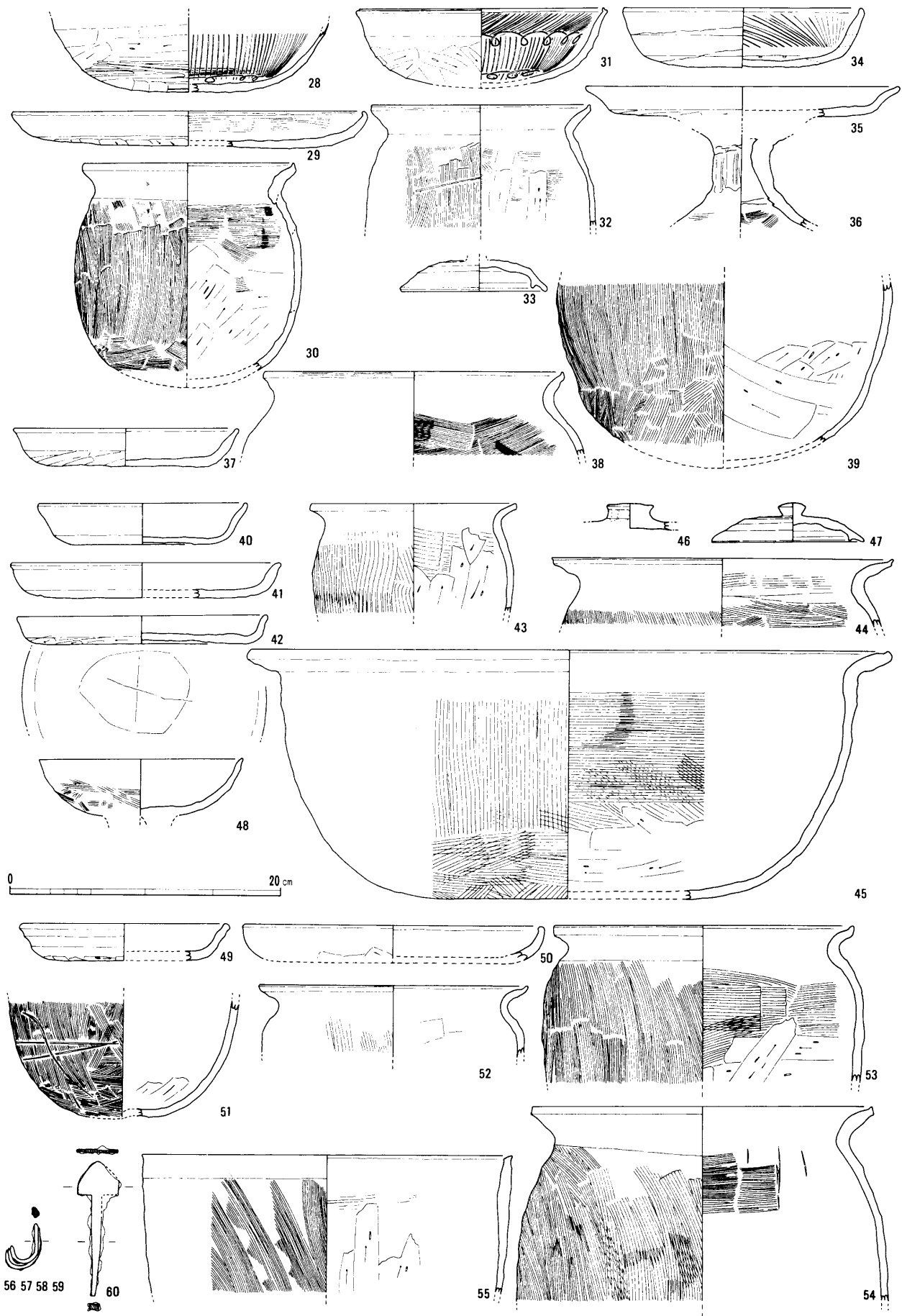
〈青磁〉

図示したものは (80)のみである。高台は削り出され、全面に施釉される。

〈山茶椀〉

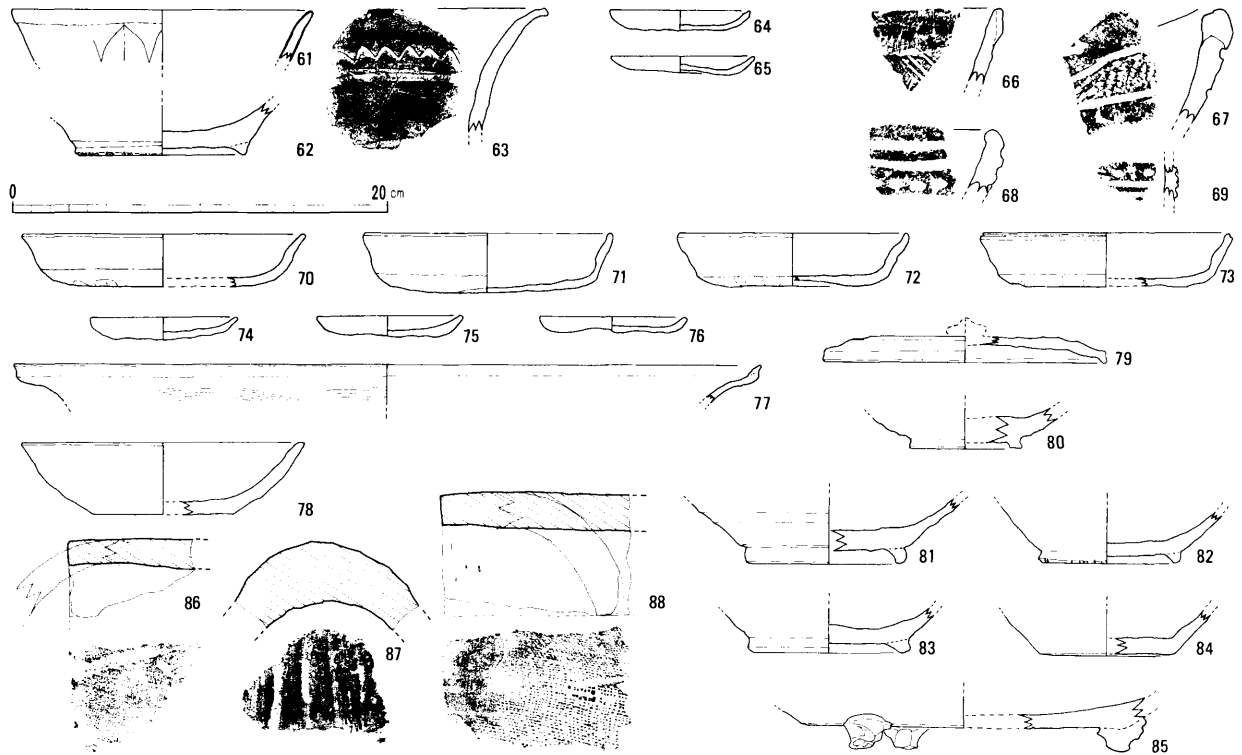
椀 (81)～(84) 高台を張り付けるもの (81)～(83)、高台の無いもの (84)がある。(81)の高台は比較的高く、見込みには輪状に煤状のものが付着している。また、内面は (81)のみナデられるが、他のものは未調整で、糸切り痕が残る。(82)の高台接地面には、粉殻痕が認められ、(81)～(83)の内面には自然釉がかかる。

脚付鉢 (85) ロクロケズリで調整された平らな底部に、手づくねの脚を張り付ける特殊な形態である。脚は雑に張り付けられており、その時の指頭圧痕が残る。脚は3足で図化しているが、4足の可能性もある。



第32図 G地区出土遺物実測図 (1 : 4)

28~30は S F 36、31~33は S H 24、34~36は S H 27、37~39は S K 32、
40~48は S H 25、49~60は S H 29出土



第33図 G地区出土遺物実測図 61～63はS D34、64、65はS K22、68はS H29、69は小ビット、他は包含層出土

〈瓦〉

(86)～(88)があり、いずれも小片であるが、丸瓦と考えられ、(88)は行基瓦である。(86)の内

面には布の絞り目が残りに、(87)は模骨痕が認められるが、欠損部近くでは布目も観察できる。模骨1本の幅は約1cmである。

7. 結 語

伊勢寺遺跡北浦地区は、伊勢寺遺跡の北西端に位置する。そして調査結果もそれを立証するものであった。B地区では遺構は全く検出されず、遺物もF地区よりで若干の山茶碗が出土したのみで、当調査区は遺跡外に位置するものと考えられる。また、A地区、G地区においては、遺構は調査区南部から検出されており、遺跡の北限を示すものと考えられる。F地区東部でも遺構は検出されていないが、表土には多数の遺物の散布があり、既に削平されてしまった可能性が高い。また、遺構を検出できた部分でもその密度は低く、遺跡の縁辺部であることを表しているものと考えられる。

遺構は、飛鳥時代から平安時代前期に属するものと、鎌倉時代から室町時代のものに分かれる。前者は、竪穴住居と掘立柱建物、後者は掘立柱建物が中心である。また、A地区のSH2～4、SB1・5・

6は、方向をほぼ揃えて建てられており、同時に存在した可能性が高い。奈良時代、当遺跡では竪穴住居と掘立柱建物が混在していた様子がうかがえる。SB1は、建物内を竪穴状に掘り下げ、粘土を貼る特殊な構造をもつ。類似する遺構としては、大鼻遺跡で検出された竪穴住居⁷がある。鎌倉時代に属し、SB1とは大きな時期差があるが、竪穴内に粘土を貼る点は共通している。平面形態も両者とも長方形を呈し、3間×2間であることも共通するが、竪穴住居7では総柱となっている。両遺跡とも、このような形態の建物は1棟しか検出されていないことから一般住居とは考え難く、特殊な用途に使用されたものと考えられる。しかし、SB1床面に残る焼土が、その使用時の痕跡を僅かにとどめるのみである。

全地区とも遺物の出土量は少なく、良好な一括資料に乏しい。そのなかでは出土例の少ない飛鳥～奈

良時代の鉄製品が注目される。鉄製紡錘車は、県内では上寺遺跡^③、斎宮跡^④、寺垣内館址^⑤等から出土しているが、完形のものではなく、その点では県内唯一の貴重な資料である。鉄鏃、釣針がG地区SH29から出土したが、遺構の重複が激しく、混入遺物も多いことから、奈良時代とするに疑問も残る。しかし、重複する遺構の時期から、飛鳥～平安時代前期までにおさまるものである。鉄製釣針については、福岡県海の中道遺跡から多数出土し、その分類がなされている。それによると当遺跡のものは、小型で鏃がなく、軸部の短いⅡ類cに属することになる。Ⅲ類

とされるものは、樹皮で束ねた釣針で、イカ、タコ用の疑似針である可能性が指摘されている。当遺跡のものは、4本が錆により接着しているが、樹皮は確認できないものの、元来束ねられて使用されていたものであるならば、Ⅲ類に属する可能性も大きくなる。当遺跡から海岸までは約7km離れているが、イカ、タコ類を目的とした漁労に出張していたものなのか、同様な疑似針が淡水魚にも有効であったのか、当時の生活を知るうえで興味深い資料である。

(森川常厚)

[註]

- ① 三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」【史跡 斎宮跡・三重県斎宮跡調査事務所年報1984】 昭和60年3月
- ② 三重県教育委員会「一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要」 1987.3
- ③ 山田猛「上寺遺跡」【昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告】三重県教育委員会 1980.3
- ④ 三重県斎宮跡調査事務所【史跡 斎宮跡・三重県斎宮跡調査事務所年報1987】 昭和63年3月
- ⑤ 下村登良男「寺垣内館址」【東名阪道路埋蔵文化財調査報告】三重県教育委員会 1970
- ⑥ 山崎純男【海の中道遺跡・福岡市埋蔵文化財調査報告第87集】福岡市教育委員会 1982

番号	遺構	位置	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
1	SH3	SB3 No1	土師器	杯	口径15.0 器高 3.1	平な底部から屈曲ぎみに立ち上がる口縁部をもつ	底部外面ヘラケズリ、口縁部内面放射暗文	明赤色	雲母微片若干含	1/2	磨滅により、ラセン暗文の有無は不明	013-02
2	〃	SB3	〃	高杯	口径26.0	大きく外反する口縁部で端部は外に面をもつ	杯部外面下半ヘラケズリ、内面放射暗文とラセン暗文	赤茶色	〃	脚部欠損 杯部欠	磨滅により、ラセン暗文不明確	013-03
3	〃	SB3 焼土内 No3	〃	甕	口径13.3	球形の体部に大きく水平近く外反する口縁部がつき、端部は弱くつまみ上げる。	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ	黄茶色	1mm以下の砂粒若干含	1/3	外面の一部に煤付着	013-04
4	〃	SB3 No3	〃	〃	口径37	「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	淡赤茶色	2mmの砂粒若干含	1/4		013-01
5	〃	SB3 焼土内3層	瓦	丸瓦	—		外面ヘラケズリ、内面布目が残る。	暗茶色	3mmの砂粒多含	小片		013-05
6	SD2	7B-15-20 SD	土師器	鍋	口径28.9	大きく水平近く外反する口縁部で端部は巻き込みぎみにまとめる。	外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	淡黄茶色	雲母	1/10	外面煤付着	014-01
7	〃	〃	〃	〃	口径28.9	短かく水平近く外反する口縁部で端部は折り返す。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明赤茶色	1mmの砂粒若干含	小片	外面煤付着	014-02
8	〃	〃	〃	〃	口径40	水平近く外反する口縁部で端部はつまみ上げる。	外面若干ハケメを施すが本調整、下半はヘラケズリ、内面ナデ、下半ヘラケズリ	暗茶色	精良	1/4	外面煤付着	015-02
9	〃	〃	〃	羽釜	口径30	体部からそのまま直立する口縁部で、上端部に弱い段をもつ。	外面ハケメ、内面ナデ	淡茶色	雲母微片若干含	1/6	鏝以下に煤付着	14-03
10	〃	〃	〃	〃	口径30	球形に近い体部で、口縁部も内傾し、端部のみに外に屈曲する。	外面一部ハケメを施すが、未調整、内面ナデ	暗茶色	精良	1/4	鏝以下に煤付着	15-01
11	SH18	B-19 SK-2	〃	碗	口径13 器高 4.3	半球状の体部で、口縁端部は内に弱い面をもつ。	体部外面弱いナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明黄褐色	荒	1/3		016-7
12	〃	B-19 SK-1	〃	皿	口径26 器高 3.2	底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚する。	—	内：黄褐色、外：明赤褐色	若干砂粒含	2/3	調整不明	016-9
13	〃	〃	〃	寛	口径17	「く」字に屈曲する口縁部で、端部はつまみ上げる。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	暗灰褐色	良	小片		016-5
14	〃	B-19 SK-1-D	〃	〃	口径15	体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明灰褐色	〃	1/4		016-10

表4 遺物観察表 (1)

番号	遺構	位置	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
15	SH18	B-19 SB1-A	須恵器	蓋	口径16 器高 3.5	丸味をもつ天井部で中央が凹むつまみを張り付ける。	天井部外面1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	ほぼ完形	ロクロ右回転	016-8
16	SB14	B-13 SK1	土師器	杯	—	口縁端部は内に肥厚する。	外面ヘラミガキ、内面放射暗文	赤褐色	良	小片		017-15
17	〃	〃	〃	皿	口径20 器高 3.5	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	—	〃	〃	〃	調整不明	017-17
18	〃	B-13 pit 1	〃	甕	口径22	体部から屈曲ぎみに外反する口縁部で、端部は若干つまみ上げられる。	体部外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明黄褐色	荒	1/4		017-14
19	〃	B-13 A-C1土手	〃	〃	口径23	体部から外反する口縁部で、端部はつまみ上げられる。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明褐色	〃	1/5		017-13
20	SH19	A-22 SK-1, D	〃	〃	口径23	体部から「く」字に屈曲して外方へ開く口縁部で端部はつまみ上げられる。	〃	〃	良	1/3		017-11
21	〃	〃	鉄製品	紡錘車	紡輪径 4.2 紡輪厚 0.3 紡錘長26	棒状の輪茎に円盤状の紡輪がつく。		—	—	ほぼ完形	残存重36g	017-12
22	SB12	B-5 pit 1	土師器	皿	口径23 器高 1.7	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	口縁部強いヨコナデ	明黄褐色	良	1/10		016-1
23	SB17	B-29 南壁中	〃	〃	口径14 器高 2.7	平な底部から丸味をもって立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	明褐色	〃	1/4		016-3
24	SB17	B-30 包	〃	〃	口径18 器高 4.3	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は大きく外反する。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	〃	〃	1/3		016-4
25	SD11	A-2 溝中	山茶碗	碗	高台径 8.6	比較的高い角形高台を張り付ける。	底部外面糸切り後未調整、他はロクロナデ	明灰色	荒	底部完存		016-2
26	SD13	A-11 溝底	縄文土器	—	—		外面2枚貝条痕、内面条痕ナデ消し	明褐色	荒	小片	混入か。	017-17
27	包	B-18~20	土師器	皿	口径16 器高 3.2	底部から弱い段をもって外反する口縁部をもつ。	外面未調整、内面でいねいなヨコナデ	赤褐色	良	1/5		016-6
28	SF36	M-6 包	〃	杯	—	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。	外面ヘラケズリ、一部ヘラミガキ、内面横方向の平行暗文後、放射とラセン暗文	赤茶色	雲母微粒子 微砂若干含	体部欠損		001-03
29	〃	M-6 SK1	〃	皿	口径25.9 器高 2.5	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚し、外に面をもつ。	外面ヘラケズリ、内面ハケメ、口縁部ヨコナデ	〃	2mmの砂粒含、雲母微粒子若干含	1/3		001-02
30	〃	〃	〃	甕	口径15.5 器高16.4	球形に近い体部から短かく外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、外に面をもつ。	体部外面縦方向のハケメ、内面上半横方向のハケメ、下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	茶色	雲母微粒子 多含	口縁部欠損		001-01
31	SH24	Q-4 SB1	〃	杯	口径17.9 器高 5.8	丸味をもつ底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部はつまみ上げる。	体部外面ヘラケズリ、内面ラセン暗文と放射暗文を二段に施す。	暗赤色	雲母微粒子 を若干含む	小片	小片のため口径、器高は不確実	002-07
32	〃	SB1 焼土中	〃	甕	口径16	体部から「く」字に屈曲し、外方へ開く口縁部で端部はつまみ上げ、外に面をもつ。	体部外面縦方向のハケメ、内面横方向のハケメ後、雑なヘラケズリ	赤茶色	3mmの砂粒含	1/6	体部外面に一条のヘラ沈線あり	003-02
33	〃	Q-4 包	須恵器	蓋	口径10.9	丸味をもつ天井部で、かえりは口縁端部より短かい。	天井部外面1/2をロクロケズリ、内面中央仕上げナデ、他はロクロナデ	灰褐色	雲母微粒子 若干含	つまみ欠損	焼成不良	002-02
34	SH27	Q-5 SB2	土師器	杯	口径17.4 器高 4.3	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干内に肥厚する。	底部外面ヘラケズリ、内面放射暗文とラセン暗文、口縁部ヨコナデ	橙褐色	雲母微粒子 若干含	1/2	粘土紐接合痕が残る。	002-06
35	〃	P-4 SB2	〃	高杯	口径23	浅い杯部で、口縁部は大きく外反する。	杯部内面ナデ、外面弱いヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	明赤茶色	1mmの砂粒 雲母片含	口縁部欠損	36と同一個体か。	002-08
36	〃	P-5 SB2 No 1	〃	〃	筒部径 4.2	短かい筒部から大きく開く脚が付く。	外面ナデ、内面ハケメ	〃	2mmの砂粒 若干含、雲母微粒子含	筒部完存	35と同一個体か。	001-04

表5 遺物観察表 (2)

番号	遺構	位置	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号	
37	SK32	O-4 SK1 Na1	土師器	杯	口径16.4 器高2.8	平ら底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干肥厚して丸くおさめる。	外面ヘラケズリ、底部内面中央ナデ、口縁部と底部内面中央近くまでヨコナデ	橙褐色	精良	完形		002-05	
38	〃	O-4 SK1 Na2	〃	甕	口径21.8	外反する口縁部で、端部はつまみ上げられ、外に面をもつ。	外面不明、口縁端部にハケメが残る。体部内面ハケメ。	淡茶色	雲母微粒子を含む。	1/4	外面剥離が激しく調整不明	004-02	
39	〃	G-4 SK1 Na2	〃	〃	—	丸底の底部をもつ。	外面ハケメ、内面下半ヘラケズリ、上半ナデ	茶色	2mmの砂粒含	2/3		004-01	
40	SH25	P-6 SB4 焼土中	〃	杯	口径15.2 器高3	平ら底部から屈曲し、外反して立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。	底部内外面ナデか、口縁部ヨコナデ	暗茶色	雲母微粒子含	1/2	磨減が激しく調整不明確	007-02	
41	〃	P-5 SB4	〃	皿	口径19.8 器高2.5	厚い器壁で、平ら底部から屈曲して立ち上がる口縁部の端部は外傾する。	〃	明黄赤色	雲母微粒子を若干含む	1/7	磨減が激しく調整不明確	007-06	
42	〃	Q-5 SB3 Na1	〃	〃	口径18.5 器高2.1	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干外反する。	底部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	橙乳褐色	精良	完形	底部外面にヘラ記号	003-01	
43	〃	P-5 SB4	〃	甕	口径15	体部からゆるやかに外反する口縁部で、端部は外に弱い面をもつ。	体部外面ハケメ、内面ハケメ後ヘラケズリ	淡黄茶色	1mmの砂粒若干含、雲母片含	〃	口縁部小片類部以	007-01	
44	〃	〃	〃	〃	口径25	大きく水平近く外反する口縁部で、端部は外に面をもつ。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	淡茶色	雲母微粒子若干含	1/7		007-05	
45	〃	〃	〃	〃	口径48.8 器高18.1	平らな底部から丸味をもつて立ち上がる体部から短かく外方へ開く口縁部をもつ。	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	〃	2mmの砂粒雲母片含	1/10		008-02	
46	〃	Q-5 SB4	〃	蓋	—	基部の太い宝珠つまみの変形	つまみ側面指押え、他はナデ	明赤茶色	1mmの微砂若干含	つまみ完存		007-03	
47	〃	P-5 SB4	須恵器	〃	口径11.3 器高2.8	丸味をもつ天井部で、内面のかえりは口縁端部より短い。	天井部外面の $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰褐色	砂粒含	完形		002-01	
48	〃	P-5 SB4 焼土	土師器	高杯	口径15	丸味をもつ杯部で口縁端部は細くなっておわる。	杯部外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	暗茶色	2mmの砂粒若干含、雲母片多含	脚部欠損 完存	内面にタール状物 杯部はぼ 質付着 粗製	007-04	
49	SH29	P-5 SB3	〃	杯	口径15 器高2.7	平らな底部から屈曲して若干外反ぎみに立ち上がる口縁部で、端部はそのまま丸くおさめる。	底部外面ヘラケズリ、口縁部強く2段にヨコナデ	明赤色	雲母微粒子含	1/8		005-01	
50	〃	〃	〃	皿	口径22 器高2.8	平らな底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚する。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	淡赤茶色	雲母微粒子含	〃		005-02	
51	〃	〃	〃	甕	—	丸底の底部をもつ	外面ハケメ、体部内面ナデ、底部内面ヘラケズリ	淡赤色	雲母片若干含	1/3	体部外面にヘラ記号	006-03	
52	〃	〃	〃	〃	口径19.8	体部から大きく外反する口縁部で、端部は若干受け口状を呈する。	体部外面ハケメ、内面ヘラケズリか、口縁部ヨコナデ	茶色	1mmの砂粒多含	1/6		006-01	
53	〃	〃	〃	〃	口径22	体部から短かく外反する口縁部で、端部は外に面をもち、つまみ上げる	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ	白茶色	3mmの砂粒含	1/2		005-03	
54	〃	P-6 SB3 焼土中	〃	〃	口径25.2	長胴の体部から屈曲して外方へ開く口縁部で、端部は外に面をもち、つまみ上げる。	外面ハケメ、内面板状工具によるナデ、浅いハケメとすることもできる。口縁部ヨコナデ。	暗茶色	3mmの砂粒若干含	〃	口縁部小片 体部 $\frac{1}{2}$	外面煤付着	006-02
55	〃	P-5 SB3	〃	甕	口径27.3	体部からそのまま直立する口縁部で、端部は内傾する面をもつ。	体部外面ハケメ、内面上半若干ハケメが残る。下半はヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	赤茶色	雲母片若干含	1/8		008-01	
56	〃	〃	鉄製品	釣針	径0.2 長3.5	無纒の単式釣針で、ちもとはそのままおわる。	—	—	—	完形	錆が多く形態不明確	003-03	
57	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	003-04	
58	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	003-05	
59	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	〃	〃	003-06	
60	〃	〃	〃	鉄鎌	長9.8 最大幅3	平基で正三角形形状を呈し、有茎である。	—	—	—	〃	〃	003-07	

表6 遺物観察表 (3)

番号	遺構	位置	器種	器形	流量 (cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
61	SD34	N-2 SD4	青磁	碗	口径16	口縁部は外に若干肥厚し、やや外傾する。	ロクロナデ	淡緑青色(釉色)	精良	小片	外面に連弁文	004-04
62	〃	N-2 石組中	山茶碗	〃	高台径 8.7	低く幅の広い高台を張り付ける。	底部外面ナデ、他はロクロナデ	茶灰色	1mmの砂粒若干含	底部欠損	高台接地面に粉殻痕	004-05
63	〃	〃	須恵器	甕	—	外反する口縁部で、端部は外面をもつ。	ロクロナデ	黄灰色	4mmの小石多含	小片	外面に波状文と沈線、焼成不良	004-03
64	SK22	R-3 SK1No.2	土師器	皿	口径 7.4 器高 1.1	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は尖りぎみにおわる。	内面ナデ、外面未調整	茶白色	砂粒を若干含む	完形		002-03
65	〃	R-3 SK1No.1	〃	〃	口径 7.4 器高 0.8	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	〃	淡黄茶色	精良	〃		002-04
66	包	K-3	縄文土器	深鉢	—	口縁部外面に隆帯を張り付ける。	内面ナデ、外面沈線文を施す	暗赤茶色	2mmの砂粒多含	小片		011-05
67	〃	K-1 包	〃	〃	—	液状口縁を呈する。	内面ナデ、外面沈線と摺消縄文を施す。	淡茶色	2mmの砂粒雲母多含	〃		011-04
68	SH29	P-5 SB3	〃	〃	—	口縁部は内に肥厚する。	内面ナデ、外面沈線と刺突文を施す。	淡赤茶色	1mmの砂粒多含	小片	混入	005-04
69	—	L-7 P2	〃	〃	—	—	〃	茶色	〃	〃		005-05
70	包	R-1 包	土師器	杯	口径15 器高 2.8	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は大きく外反する。	底部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明赤色	精良	1/4		010-04
71	〃	R-5 包	〃	〃	口径13.2 器高 3.2	平な底部から屈曲して外反ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内湾する。	底部内外面ナデか、口縁部ヨコナデ	明黄赤色	1mm以下の微砂含	ほぼ完形	磨滅のため調整不明確	009-01
72	〃	R-4 包	〃	〃	口径12.1 器高 2.8	〃	底部外面簡単なナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	〃	1mm以下の微砂若干含	1/2		010-02
73	〃	〃	〃	〃	口径13 器高 2.8	平な底部から屈曲して外反ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内湾し、外に沈線を巡らす。	底部外面未調整か。内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	〃	精良	1/4	磨滅のため調整不明確	010-03
74	〃	R-2 包	〃	皿	口径 7.8 器高 1.2	底部から若干立ち上がる口縁部をもつ浅い小皿	内面ナデ、外面未調整	淡黄茶色	2mmの砂粒含	完形		010-05
75	〃	〃	〃	〃	口径 7.7 器高 1.1	〃	〃	淡茶色	雲母片若干含	〃	外面に粉殻圧痕若干あり	010-06
76	〃	〃	〃	〃	口径 7.8 器高 0.8	〃	〃	黄茶色	2mmの砂粒若干含	口縁部若干欠損		010-07
77	〃	R-4 包	〃	鍋	口径38	外反する口縁部で端部は内に巻き込む。	外面ハケメ、内面ヨコナデ	淡茶色	雲母片若干含	1/8	外面煤付着	010-01
78	〃	H-1 包	ロクロ土師器	碗	口径15 器高 3.8	平らな底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡赤色～黄茶色	3mmの砂粒含	1/4	底部外面糸切り痕	010-08
79	〃	O-5 包	須恵器	蓋	口径15	平らな天井部で、弱く屈曲する口縁部をもつ。	天井部外面ロクロケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	緑灰色	2mmの砂粒含	〃	ロクロ右回転	011-01
80	〃	R-4 包	青磁	碗	高台径 6	厚い底部で、削り出し高台である。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	茶緑色(釉色)白茶色(地)	精良	〃	全面施釉	009-07
81	〃	C-2 包	山茶碗	〃	高台径 7.7	比較的高い角形高台を張り付ける。	内外面ロクロナデ	白茶色	1mmの砂粒若干含	1/2	内面に自然釉が若干かかる。	009-05
82	〃	F-2 包	〃	〃	高台径 7	低い角形高台を張り付ける。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	1mm以下の微砂若干含	底部完存	内面に自然釉がかかる。粉殻圧痕	009-02
83	〃	N-4 包	〃	〃	高台径 7.9	〃	〃	淡茶色	3mmの砂粒若干含	1/3	内面に自然釉がかかる。	009-04
84	〃	R-4 包	〃	〃	底径 7.3	高台は付けられていない。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡黄茶色	1mmの砂粒雲母若干含	1/2		009-06
85	〃	N-3	〃	脚付鉢	底径17.5	平な底部に短かい脚が3～4ヶ所に付く。	脚は手づくね、底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰茶色	5mmの砂粒若干含	1/4		009-03
86	〃	P-2 包	瓦	丸瓦	—	—	外面ヘラケズリか。内面布目や、布の絞り目が残る。	白茶色	3mmの砂粒多含	小片	焼成不良	012-03
87	〃	F-2 包	〃	〃	—	—	外面ヘラケズリ、内面模骨痕や布目痕が残る。	暗茶色	2mmの砂粒多含	〃		012-01
88	〃	N-3 包	〃	〃	—	行基瓦と考えられる。	外面ヘラケズリか、内面端部ヘラケズリ、他は布目が残る	灰色～赤茶色	3mmの砂粒若干含	1/6		012-02

表7 遺物観察表 (4)



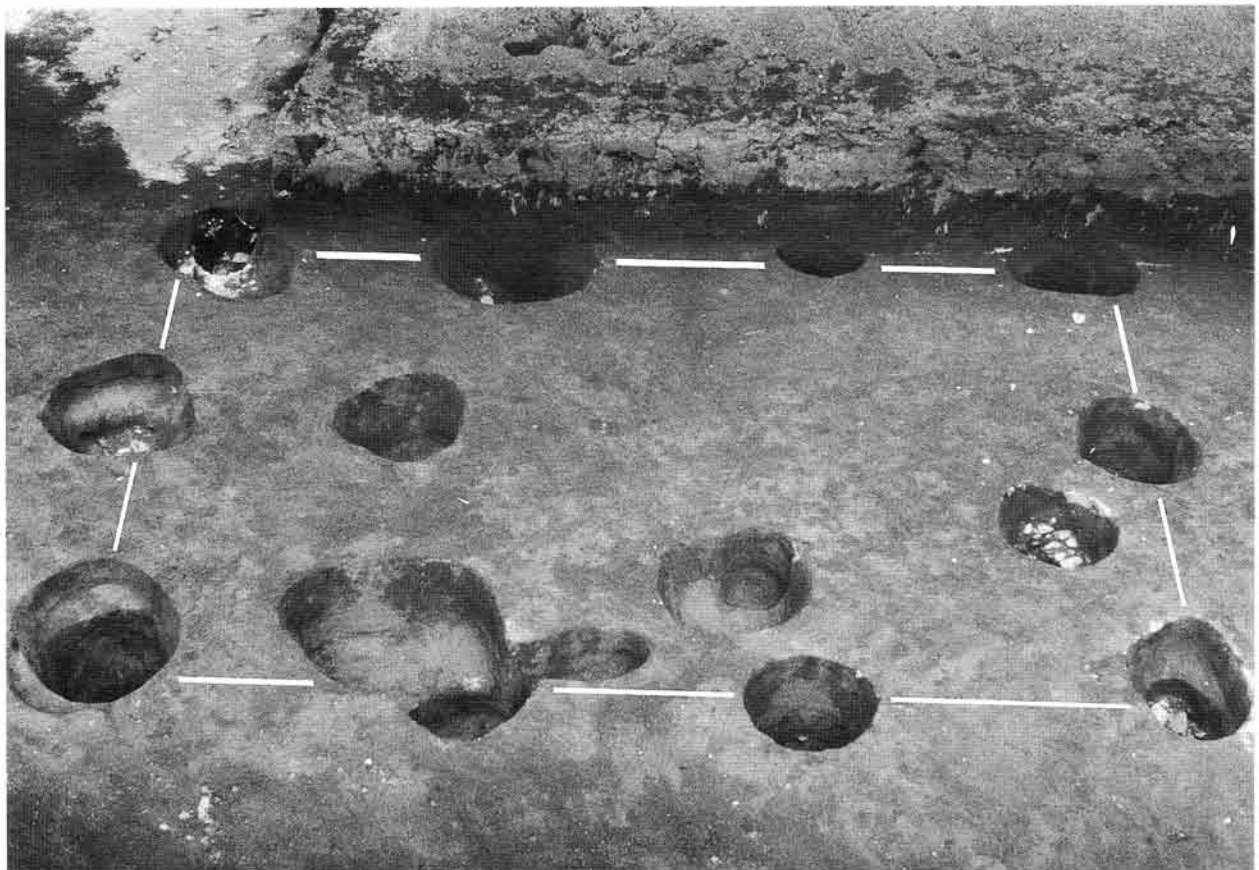
A地区全景（西から）



S B 1（北から）



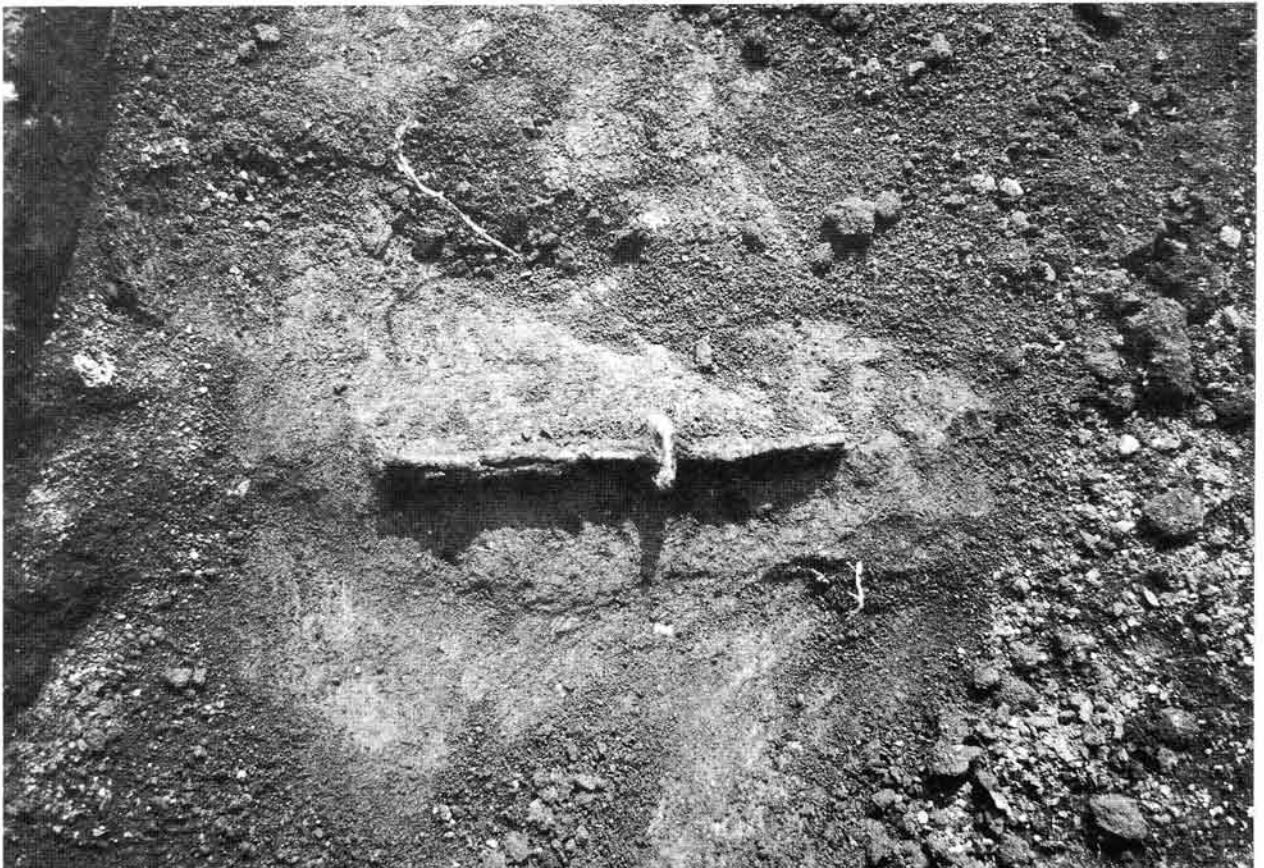
S H 2 (東から)



S B 6 (南から)



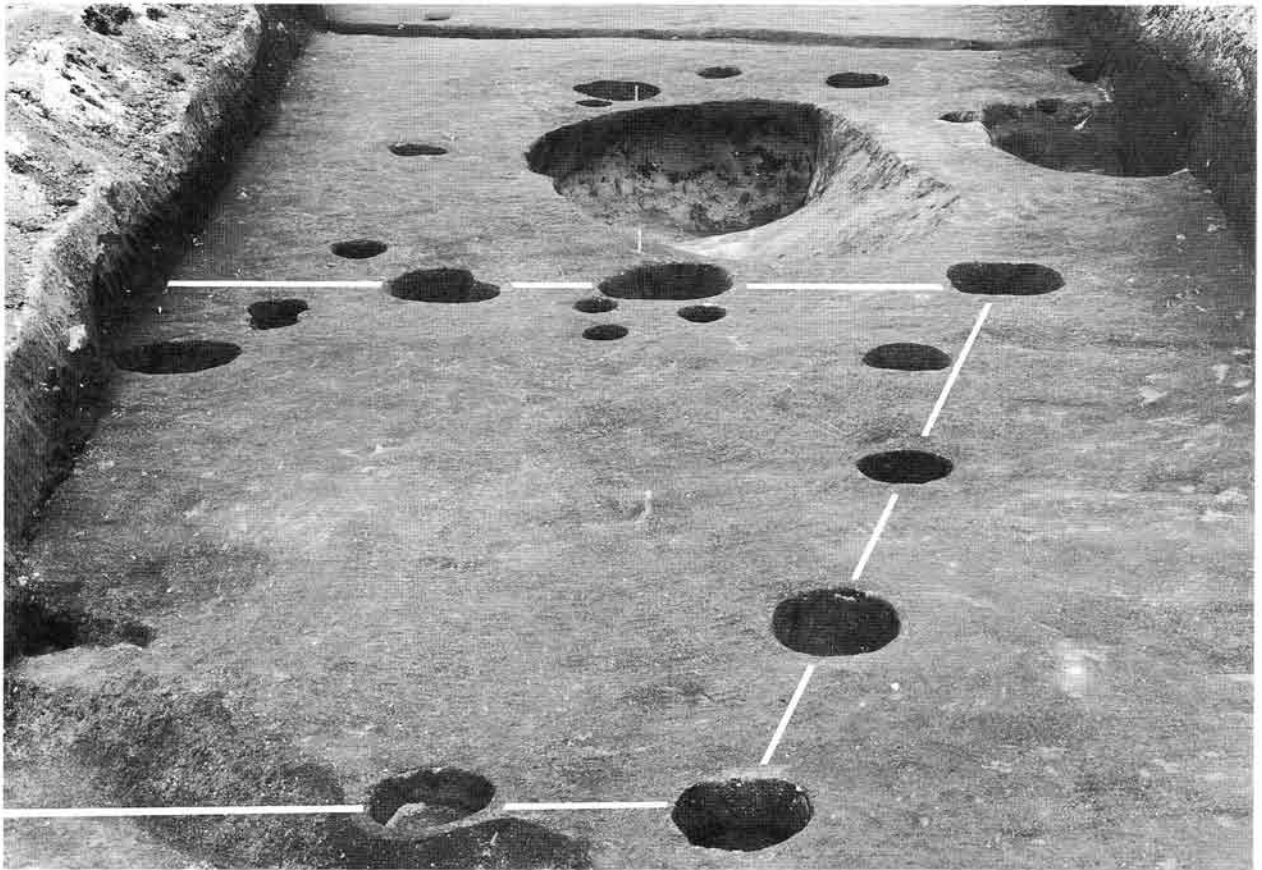
F地区全景（西から）



紡錘車出土状況（北から）



S B12 (西から)



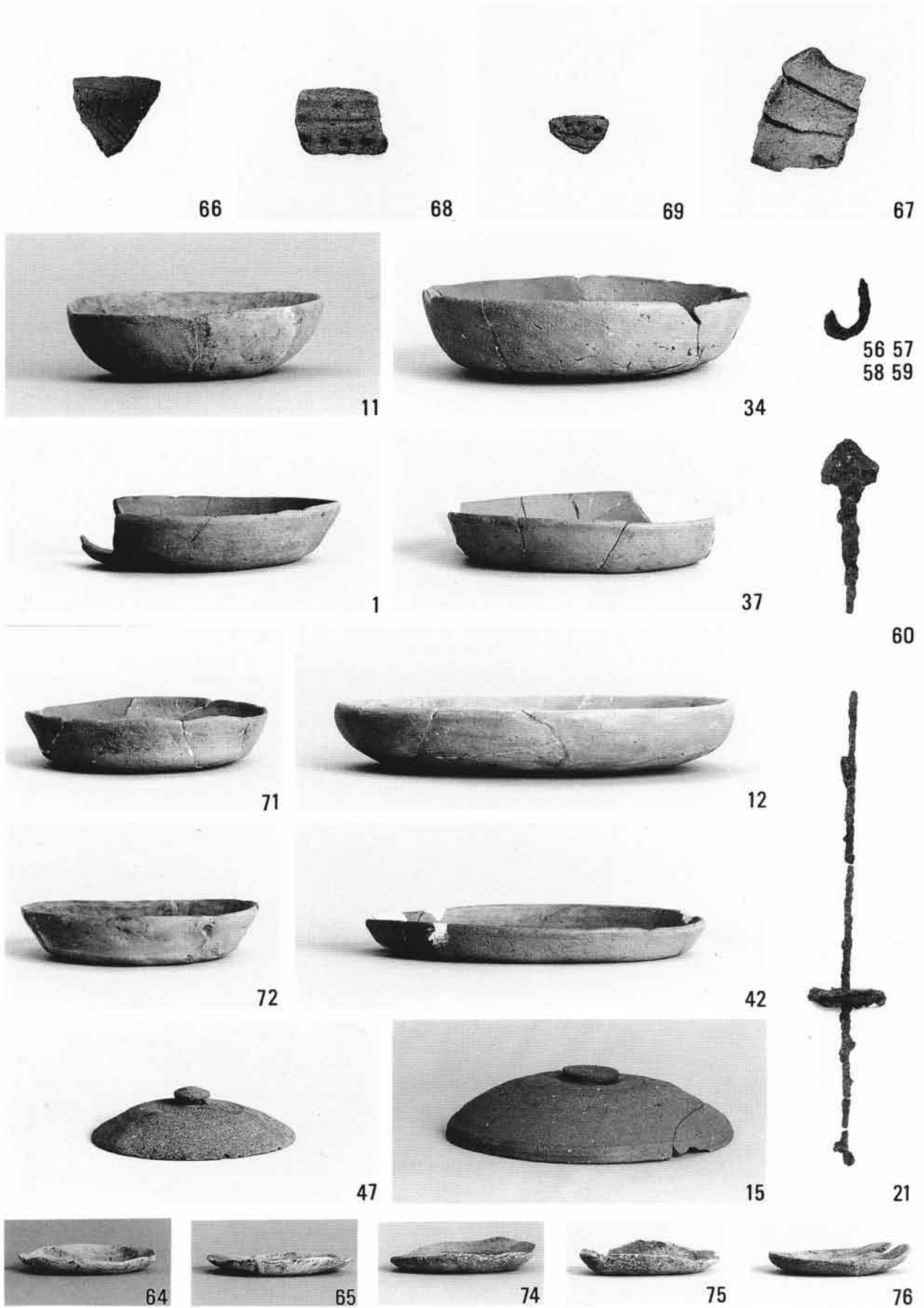
S B14 (西から)



G地区全景（北から）



SH24、SH25、SH27、SH29（北から）



出土遺物 (1 : 3)

V. 多気郡明和町 ^{みょうじょう} 明星地区内遺跡群

1. はじめに

県営は場整備事業（明星地区）にかかる埋蔵文化財発掘調査の対象となった、多気郡明和町大字明星地区に位置する水池遺跡と黒土遺跡を「明星地区内遺跡群」として報告を行う。

調査の方法 調査地は、Ⅰ区が雑木林、Ⅱ・Ⅲ区が植林地であった。直線的な排水路を中心とした調査区のため、地区割りはⅠ～Ⅲ区を通して行い、4mの柵目を切った（第38図）。Ⅰ区北端からⅢ区南端までの距離はおおよそ146mである。包含層や遺構に伴わない遺物は、南北のアルファベットラインと東西の数字ラインの交点が北西隅となる方眼をその小地区として取り上げている（例N42、P45など）。

なお、第1次調査（試掘）により、表土から遺構検出面までの深さは浅いと判断されたため、掘削は全て人力で行った。

2. 調査区の位置と周辺の環境

調査区は明星集落の南側、水田地に接する標高約10mの植林地および雑木林に相当している（第34図）。調査区の東側には土師器焼成坑で著名な国指定史跡「水池土器製作遺跡」の指定地がある^①。南部は黒土遺跡で、同様な土師器の焼成坑が明和町教育委員会の調査により検出されている^②。このように今回の調査区周辺には土師器生産に関係した遺跡がかなり濃密に分布していることを想定させる。

この土師器焼成坑は、近接する斎宮跡（国史跡）の時期とほぼ重なるため、それとの

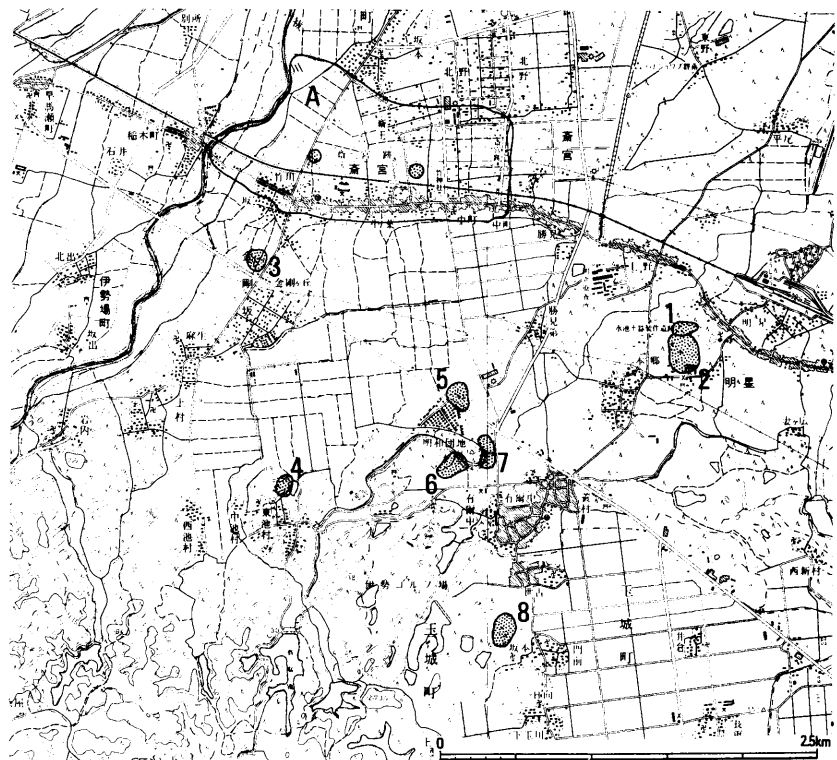
深い関連が想定される。また、戦後しばらくまで付近の養村地区などでは神宮に奉納するための土師器が数戸で生産されていたといい、今でも「神宮土器調整所」として往時が偲ばれる。全国でも稀な土師器焼成坑の密集地帯であり、今後は古代～現代に至る土師器生産の実態究明が急務である。

3. 調査の成果——層位と遺構——

今回の調査区は、Ⅰ～Ⅲ区に分かれている。小字では全て「水池」に相当するが、周知の埋蔵文化財包蔵地としてはⅠ・Ⅱ区が水池遺跡に、Ⅲ区が黒土遺跡に、それぞれ相当する。しかし、当報文中では便宜上2遺跡を分けずに記述していく。

（1）基本層序（第36図）

各調査区において現表土の下に客土層が認められる。この客土層は東側ほど薄くなっており、Ⅲ区で



第34図 遺跡位置図 (Scale = 1/50,000) (国土地理院発行 1/25,000 [松阪])
1. 水池遺跡 2. 黒土遺跡 3. 金剛坂遺跡 4. 戸峯遺跡 5. 堀田遺跡 6. 発シB遺跡
7. 発シA遺跡 8. 砂谷遺跡 A. 斎宮跡
※遺跡は土器焼成坑検出遺跡に限る。

は東端で消滅している。

遺構基盤層は明赤褐色系の粘質土である。この層は客土層の無いⅢ区東端で現地表面から約0.3mで検出できる。遺構基盤層の下には黄色系粘土層があり、この層が地山に相当すると考えられる。

Ⅲ区の中央南壁土層に見られるように、遺構基盤層の明赤褐色系土層は、現地形と比べて西への傾斜がかなりなだらかなことが判る。これは客土層の形成と密接に関係すると思われる、後に検討する。

(2) I区の調査

I区は、国指定史跡「水池土器製作遺跡」指定地の西約80mに位置する(第35図)。調査区の層位(第36図I区)は、現表土の下に旧表土があり、その間

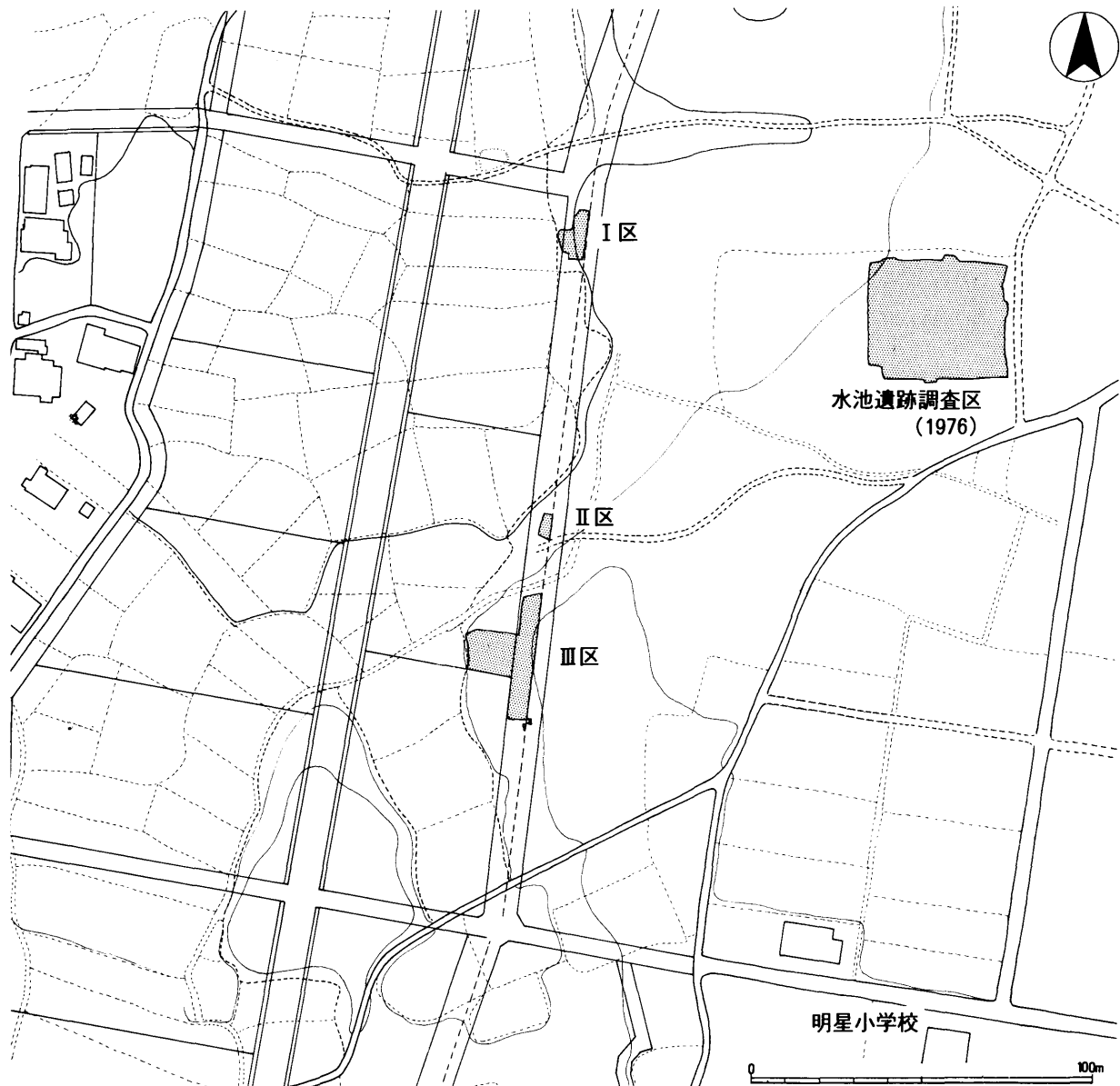
に客土層の堆積が認められた。遺構検出は明赤褐色土層上で行った。

検出した遺構にはピット・溝・不定形土坑がある。ピットは建物としてまとまらない。溝は浅く、不明瞭な落ち込み状を呈しているものである。

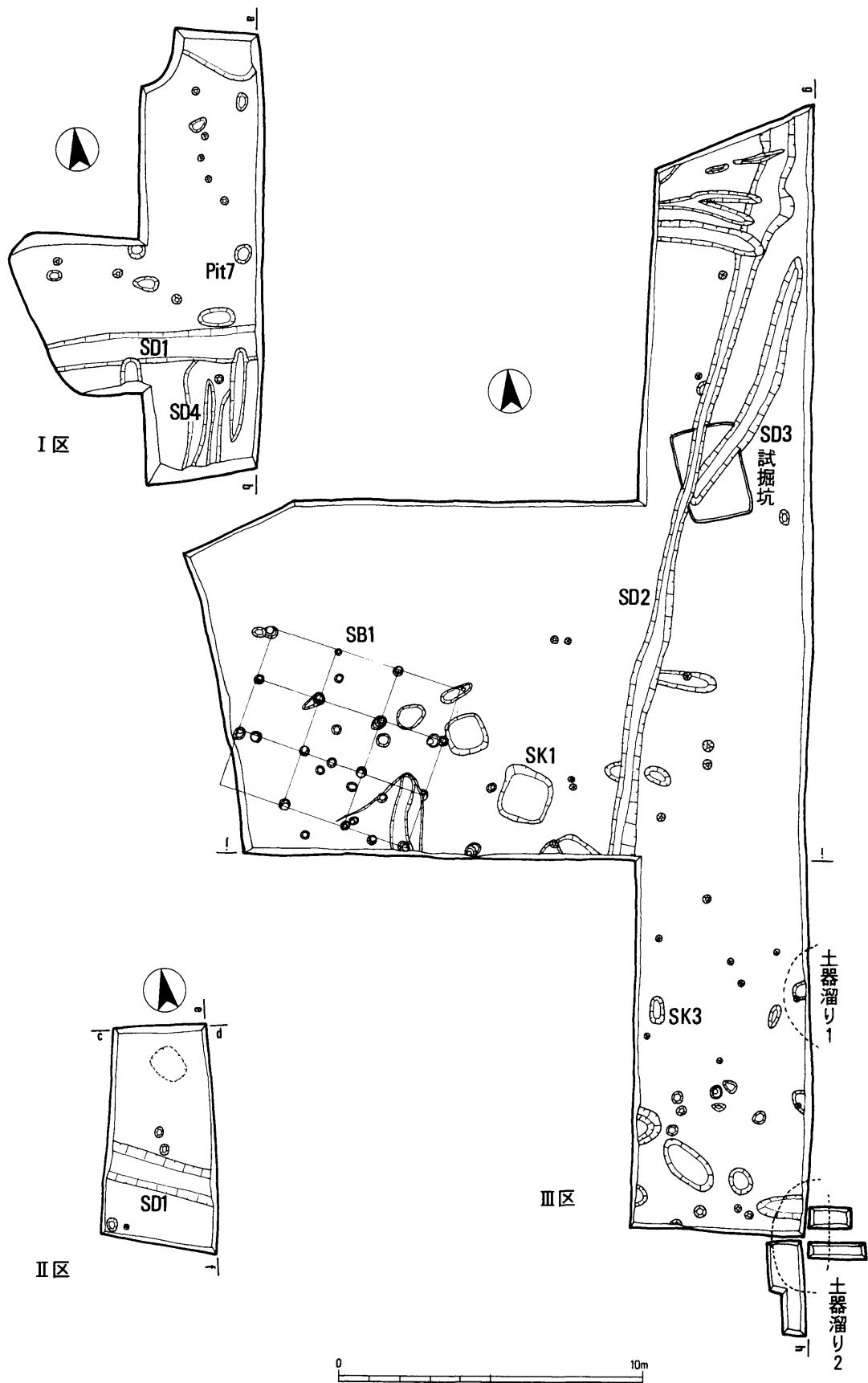
出土遺物は極めて少量である。ピット7からは奈良時代頃と考えられる土師器甕(第44図61)が出土した。その他、黄色混礫土層(第36図I区11層)から陶器鉢(第41図62)、客土中からサヌカイト片が出土している。

(3) II区の調査

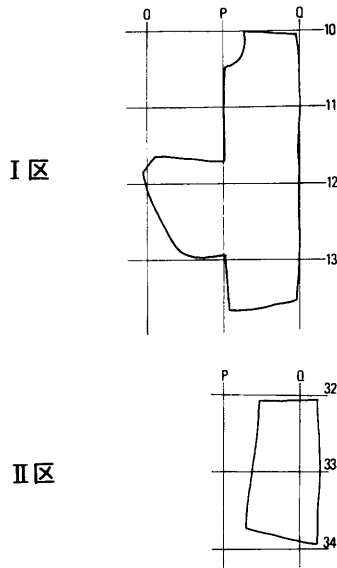
II区はⅢ区の北に隣接している。調査区の層位(第36図II区)は、暗赤褐色土層の上に客土が堆積す



第35図 調査区位置図 (Scale = 1/2,000)



第37図 調査区平面図 (Scale = 1/200)

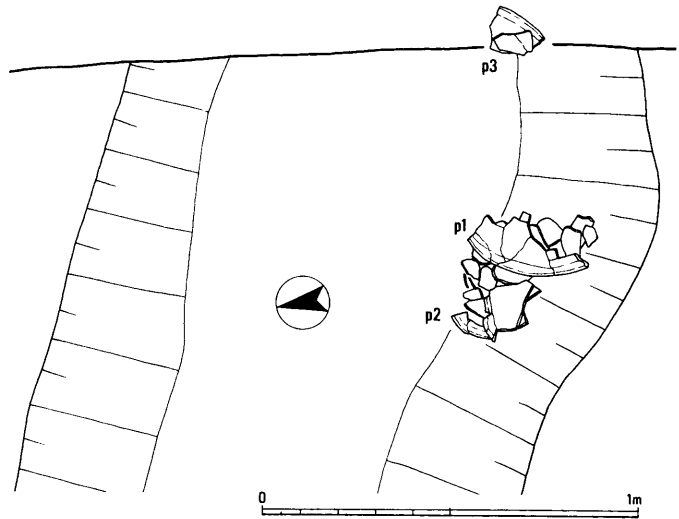


第38図 調査区地区割り図 (Scale = 1/400)

るものである。客土層は東側から西側へとゆるやかに傾斜しながら堆積している。遺構基盤層は明赤褐色系土層である。

遺構は溝の他、ピット・落ち込みが検出された。

溝SD1は東西方向に走るものである。遺構埋土は基本的に客土層の一部と同質のものである。遺構検出面上の客土層も含めた堆積状況を観察すると、客土層の形成時にこの溝も埋められた可能性が高い



第39図 II区SD1土器出土状況図 (Scale = 1/20)

と考えられる。溝SD1からは土師器の焙烙が折り重なって2固体分出土した(第39図)。溝SD1付近からは陶器播鉢(第44図55)も認められ、客土層の形成と溝の埋没時期を示すものと考えられる。

(4) III区の調査

III区は今回の調査区の南端に位置し、最も面積が広い。層序は、東壁に見られる状態が基本と考えられ、遺構基盤層である明赤褐色土上に表土を含めて3~4層の薄い堆積土が認められる。しかし、調査区中央に設定した東西方向の土層(中央南壁)では、遺構検出面までの深さが西へ行くほど深いことが判る。これはI・II区に認められたのと同様な客土層によるものであり、調査区中央を南北方向に走る溝SD2が境界となっている状況が観察される。

検出した遺構には掘立柱建物・溝・焼土を伴う土坑・ピットなどがある。また、遺構とは別に扱うべきかも知れないが、遺構検出面から1層上に、土器を多量に含んだ層(「土器溜まり」と仮称する)が2か所認められた。

掘立柱建物SB1(第41図)は調査区内で3間×3間分を検出した。しかし、南側あるいは西側に若干広がる可能性も大きい。桁行を東西方向、梁間を南北方向として記述していく。

柱間は、30.3cmを1尺として換算すると、桁行が7尺(約2.2m)、梁間が6尺(約1.8m)のそれぞれ等間の総柱である。柱掘形は0.4m~0.2mである。柱痕跡は、確認できたもので直径0.15m前後である。

ピット内に根石をもつものはない。また、掘形の深さは、断面図に見るように一定していない。M42pit9とM43pit9の柱痕跡内には土師器鍋がそれぞれ数個分投棄されていた。

土坑SK1は、掘立柱建物SB1の東側に位置する方形の土坑である。その機能については後考する。

土坑SK3(第42図)は楕円形を呈する浅いものである。埋土は、最下層が熱によって還元されたものと考えられる灰褐色土で、その上に焼土や木炭が含まれる層が認められた。土坑そのものが熱変しているのではない。上層の暗褐色土層を中心に、土師器甕6点、皿2点、小皿1点、陶器碗(山茶碗)1点が一括投棄と思われる状態で出土した。甕は煤が付着したものである。

土坑SK3のような焼土層が認められる遺構に類似したものとして、土坑SK4がある。この土坑から遺物は出土しなかったが、窯壁の一部かと思われる焼土塊が出土した。

溝SD2は、調査区を南北方向に走るもので、その南北端は調査区外に伸びている。断面形状は基本的に逆台形を呈するものであるが、北端では皿状を呈する。遺物はほとんど含まず、時期の決定は難しい。しかし、先述の客土層がこの溝を境に西側へ認められることから、客土層形成以前の何らかの区画を表したものかも知れない。SD2を境に東側より西側の方が1段低いことも区画溝であることを示すものかと考える。

土器溜まりは、調査区の南端に2か所認められた。表土直下において認められるものであり、陶器・土師器の破片を多量に含んでいる。土師器のうち甕は使用時に付着したと見られる煤が付着しているものが多くあり、土器焼成坑に付随する「物原」のようなものとは想定し難い。

なお、Ⅲ区の南に接して古墳状に隆起した地形が認められた(第40図)。トレンチを設定して掘削したところ、各所に認められたのと同質の客土層が認められ、その中から近世以降と考えられる瓦片が出土した。したがってこの隆起地形についても、客土層の形成と何らかの関係があるものと判断した。

4. 調査の成果 — 出土遺物 — (第43~44図)

今回の調査で出土した遺物はコンテナ箱に約20箱であり、そのほとんどが土器類である。

出土土器は大別して4時期に分けられる。弥生時代以前・奈良時代・平安時代末~鎌倉時代前半・江戸時代以降である。遺物の詳細は観察表を参照していただくこととし、ここではその概要を記す。

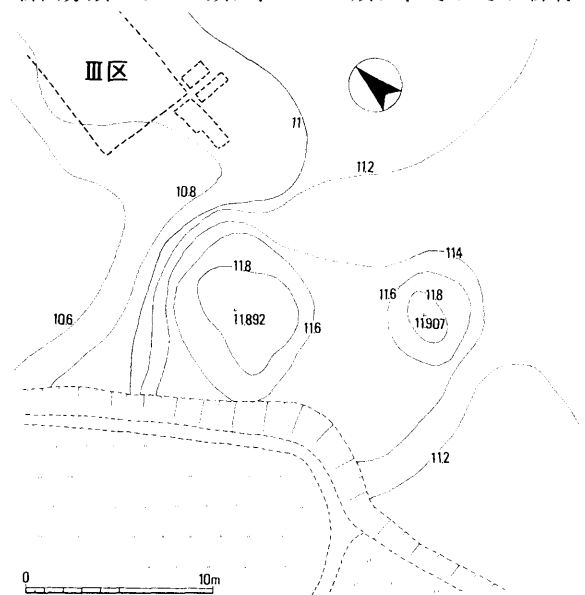
弥生時代以前のもはⅠ区から出土したサヌカイト片のみであるが、その正確な時期は不明である。

奈良時代に該当するものは土師器甕(61)の他、須恵器平瓶(54)がある。

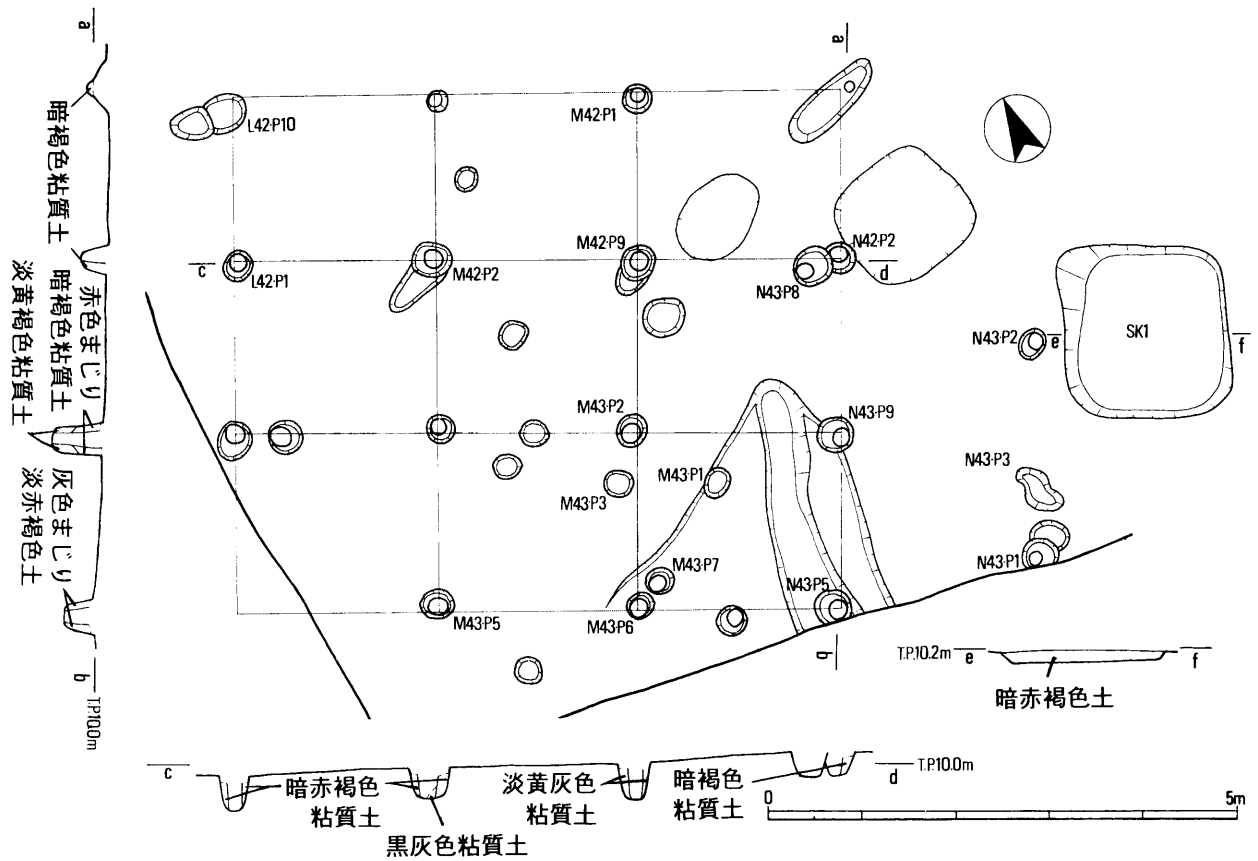
平安時代末~鎌倉時代前半のもが当調査によって出土した遺物の大部分を占める。新田洋氏による分類^③(以下、新田分類)を基準としたが、新田分類の1~4類については当報告では「甕」とする。平安時代末としたものは新田分類の3~4類に相当するもので、Ⅲ区SK3、土器溜まり1・2出土の遺物が概略相当する。鎌倉時代前半としたものは新田分類の5類に相当するもので、Ⅲ区SB1柱痕跡内出土土器がそれにあたる。

江戸時代以降としたものは、厳密な時期比定は今後の課題であるが、Ⅱ区SD1・Ⅰ区客土層出土の土器が相当する。陶器播鉢(62)は瀬戸産と考えられ、藤澤良祐氏の編年^④による瀬戸本業焼第9~10小期、19世紀前半頃に比定できるようである。

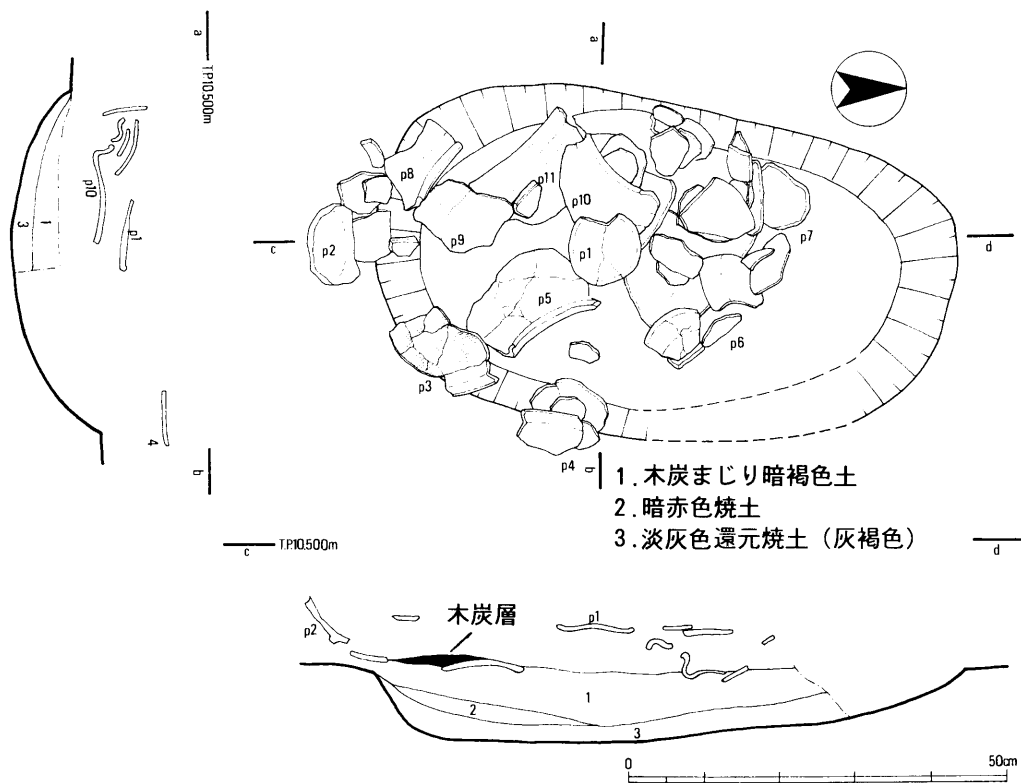
その他、土製支脚が3点出土している。51・52は新田分類の3~4類に、19は5類に、それぞれ併行



第40図 Ⅲ区南の隆起地形 (Scale = 1/400)



第41図 III区SB1およびSK1平面・土層断面図 (Scale = 1/80)



第42図 III区土坑SK3 平面・土層断面図 (Scale = 1/20)

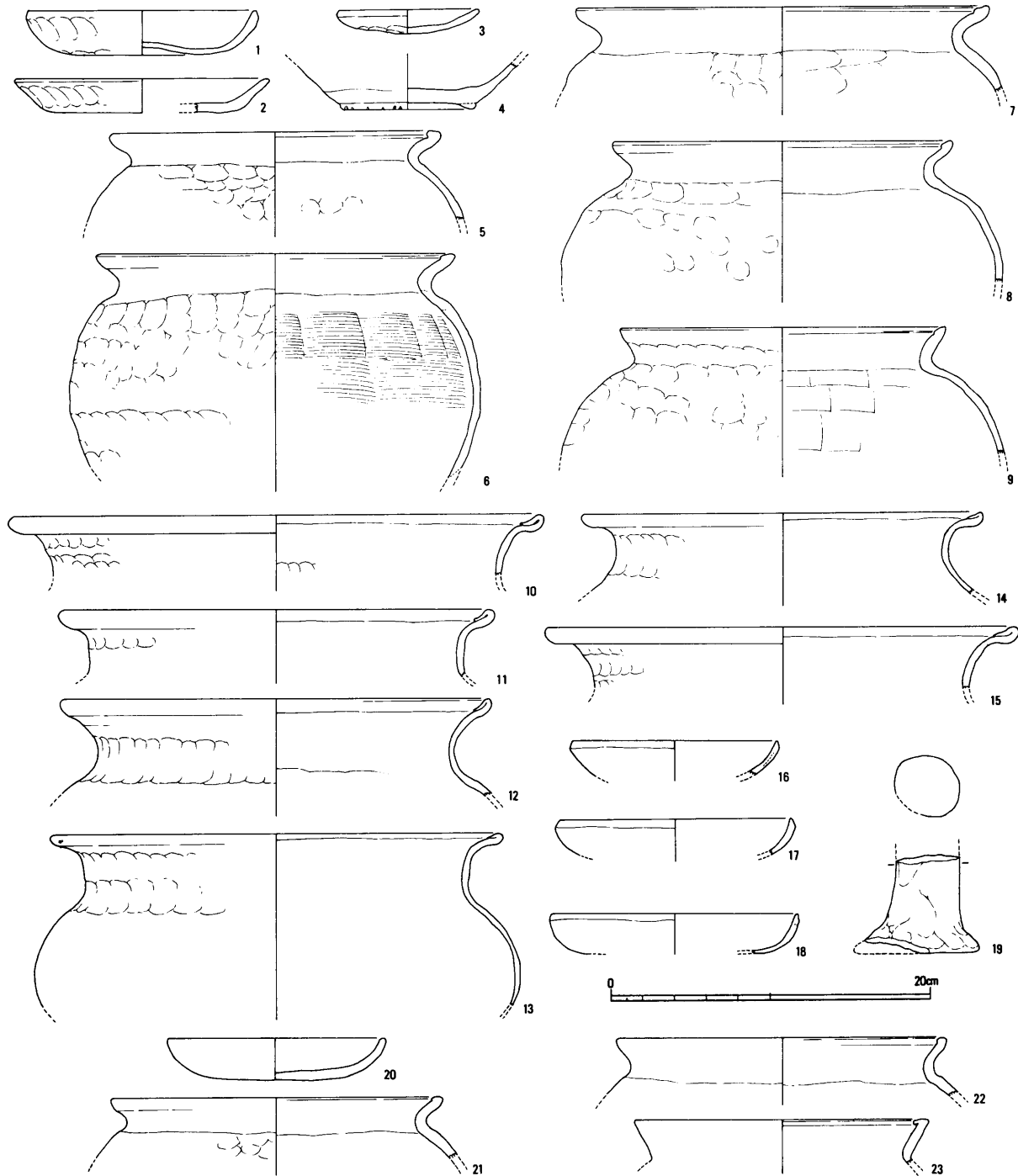
するものと考えられる。

5. 調査のまとめと検討

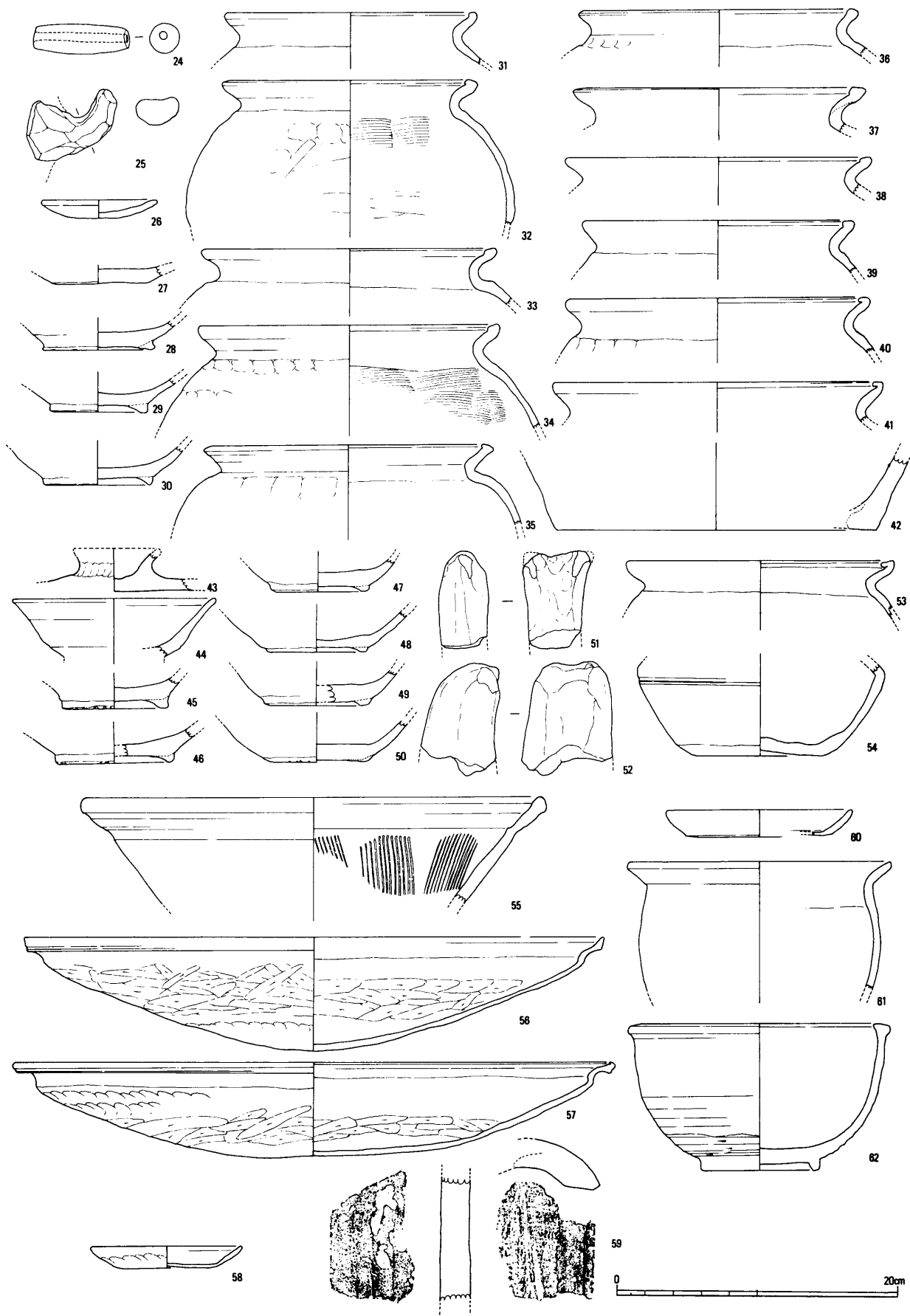
調査区は排水路部分を中心とした線的なものであった。そのためⅢ区に認められた掘立柱建物の群としての広がりやⅢ区土器溜まりの性格など、明らかにし難い点も多くある。それでもいくつかの点で興味深い結果を得ることとなった。今回の調査で

得られた問題点をまとめておきたい。

土坑SK3の機能 今回の調査では土器焼成坑などの直接土器製作遺構に関わるものは確認できなかった。また調査区全体の遺構・遺物密度も低い。これは、水池・黒土両遺跡における土器製作遺構群の西限を示すものとして把握される。ただし、Ⅲ区土坑SK3・4では還元された焼土層や焼土塊が認められたことから、Ⅲ区の東隣に土器焼成坑が存在する



第43図 土坑SK3、掘立柱建物SB1他出土土器 (Scale = 1/4)



第44图 I、II、III区各遺構他 出土土器 (Scale = 1 / 4)

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土時	焼成	色調	残存度	備考	実測 No
1	土師器 皿	Ⅲ P45	SK3P6	(口) 14.8 (高) 2.8	外:ナデ、指オサエ 内:ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	淡褐色	口縁 1/5		3
2	〃	〃	〃 P6	(口) 16.2 (高) 2.1	外:ナデ、指オサエ 内:ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	〃		4
3	〃 小皿	〃	〃 P1	(口) 8.9 (高) 1.7	外:指オサエ、ナデ 内:ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	明褐色	4/5		2
4	陶器 碗	〃	〃 P2	(高台)8.6	外:ロクロナデ、高台:ナデ 内:ロクロナデ	密 0.5~3.0cm の小石	堅緻	淡灰色	高台 3/5	山茶碗 高台にモミガラ痕	5
5	土師器 甕	〃	〃 P9	(口) 21.0	外:ナデ、オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	淡茶灰色	口縁 1/5	外面にスス?	9
6	〃	〃	〃 P3、7、10	(口) 22.7	外:オサエ、ナデのちヨコナデ 内:ナデ、ハケメのちヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	やや軟	褐~淡褐色	口縁 3/5		7
7	〃	〃	〃 P10	(口) 26.1	外:オサエ、ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	淡茶灰色	口縁 1/8		8
8	〃	〃	〃 P5	(口) 21.4	外:オサエ、ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	やや軟	淡黄褐色	口縁 1/4		6
9	〃	〃	〃 P10 最下層	(口) 20.6	外:オサエ、ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石		淡褐色	口縁 3/5		1
10	〃 鍋	〃 N43	Pit 9 (SB1)	(口) 34.0	外:指オサエのちヨコナデ 内:指オサエのちヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	〃	口縁 1/3	柱痕跡内から出土	10
11	〃	〃	〃	(口) 27.4	外:指オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	〃	〃		37
12	〃	〃	〃	(口) 27.4	外:ナデ、オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	口縁 2/5		11
13	〃	〃	〃	(口) 28.5	外:ナデ、オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	口縁 1/5		36
14	〃	〃 M42	Pit 9	(口) 25.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	口縁 1/10		43
15	〃	〃	〃	(口) 29.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	良好	淡茶灰色	〃		42
16	〃 皿	〃	〃	(口) 13.2	外:ハクリ 内:ナデ	密 0.5~1.0cm の小石	やや軟	淡黄灰色	口縁 1/8		62
17	〃	〃	〃	(口) 15.1	外:ハクリ 内:ナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	〃	淡茶灰色	口縁 1/5		63
18	〃	〃 N42	Pit 2	(口) 15.8	ハクリのため不明	密 0.5~2.0cm の小石	良好	淡褐色	口縁 1/5		46
19	土製支脚	〃 M45	Pit 6	(脚柱) 3.6	外:オサエ、ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石		淡赤灰 ~淡灰褐	下部 3/4	熱により一部赤変	47
20	土師器 皿	〃 P44	黄味淡赤褐色土	(口) 13.9 (高) 2.6	ハクリのため不明	粗 0.5~3.0cm の小石	やや軟	淡褐色	口縁 1/3		35
21	〃 甕	〃 N43	Pit 1	(口) 20.8	外:ナデ、オサエのちヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	〃	〃	口縁 1/5		39
22	〃	〃 O43	SK1	(口) 20.8	ハクリのため不明	密 0.5~1.0cm の小石	〃	茶灰色	口縁 1/8		41
23	〃	〃	〃 A	(口) 18.4	ハクリのため不明	粗 0.5~2.0cm の小石	軟	淡褐色	〃	外面にスス	40
24	土錘	〃 Q46	土器溜り(南)	(長) 7.0 (径) 2.2 (孔径) 0.65	ナデ、オサエ	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	淡茶灰色	完形	黒斑あり	51
25	土師器 把手付?	〃 Q47	〃		外:ナデ、オサエ 内:ナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	〃	淡黄灰色	把手 90%	飯か?	28
26	〃 小皿	〃 Q47	〃	(口) 8.3 (高) 1.3	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	良好	〃	口縁 1/4	黒斑あり	26
27	〃 碗	〃	〃	(底) 7.2	外:ロクロナデ、糸切り 内:ロクロナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	やや軟	淡褐色	底部 完存	ロクロ土師器	16
28	陶器	〃	〃	(高台) 8.1	外:ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内:ロクロナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	堅緻	淡灰色	底部 3/5	山茶碗 高台はモミガラ痕	25
29	〃	〃	〃	(高台) 7.1	外:ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内:ロクロナデ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	淡茶灰色	底部 完存	山茶碗	24
30	〃	〃	〃	(高台) 7.8	外:ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内:ロクロナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	底部 2/3	山茶碗	17
31	土師器 甕	〃	〃	(口) 18.0	ハクリのため不明	粗 0.5~2.0cm の小石	軟	淡黄灰色	口縁 1/3		29

表8 遺物観察表(1)

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土時	焼成	色調	残存度	備考	実測 No
32	土師器 甕	Ⅲ Q47	土器溜り(南)	(口) 18.3	外: オサエ、ナデのちヨコナデ 内: ハケメ、板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	良好	淡灰褐色	口縁 1/5		21
33	〃	〃	〃	(口) 21.2	外: オサエ、ナデのちヨコナデ 内: 板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~5.0cm の小石	〃	黄褐色	口縁 1/5		31
34	〃	〃	〃	(口) 21.6	外: オサエ、ナデのちヨコナデ 内: ハケメ、ヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	〃	明~淡褐色	口縁 1/5		22
35	〃	〃 Q46	〃	(口) 20.8	外: ナデ、オサエのちヨコナデ 内: ナデ(?), ヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	軟	明褐色	口縁 1/3		33
36	〃	〃 Q47	〃	(口) 19.9	外: 板ナデ、ヨコナデ 内: 板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	黄褐色	口縁 1/10		27
37	〃	〃	〃	(口) 20.8	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗 0.5~3.0cm の小石、黒色小粒	良好	淡褐色	〃		23
38	〃	〃	〃	(口) 22.0	ハクリのため不明	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	〃	口縁 1/5		20
39	〃	〃	〃	(口) 19.4	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石、黒色小粒	良好	〃	口縁 1/10		30
40	〃	〃 Q46	〃	(口) 21.7	外: オサエ、ハケメのちヨコナデ 内: ナデ、ヨコナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	〃	淡灰褐色	口縁 1/5		32
41	〃	〃 Q47	〃	(口) 23.7	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗 0.5~1.0cm の小石	〃	〃	口縁 1/10		19
42	陶器 甕	〃	〃	(底) 22.9	外: ナデ 内: ヨコナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	堅緻	淡灰色	底部 1/10		18
43	土師器 蓋	〃 N43	第2層	(脚柱) 5.2	外: オサエ、ナデ 内: ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	淡褐色	脚部 完存		45
44	陶器 碗	〃 P46	〃	(口) 14.6	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	密 0.5~1.0cm の小石	堅緻	淡灰色	口縁 1/8	山茶碗	56
45	〃	〃 M43	〃	(高台) 7.6	外: ナデ、ロクロナデ ハリツケ高台 内: ロクロナデ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	〃	高台 4/5	山茶碗 高台にモミガラ痕	57
46	〃	〃	〃	(高台) 7.4	外: ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内: ロクロナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	やや軟	淡茶灰色	高台 2/5	高台にモミガラ痕	55
47	〃	〃 P46	〃	(高台) 7.1	外: ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内: ロクロナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	堅緻	淡灰色	底部 完存	山茶碗	54
48	〃	〃 Q44	〃	(高台) 7.1	外: ロクロナデ、ハリツケ高台 ナデ 内: ロクロナデ	密 0.5~2.0cm の小石	〃	〃	底部 3/5	〃	53
49	〃	〃	〃	(高台) 7.6	外: ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内: ロクロナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	〃	〃	底部 1/3	〃	59
50	〃	〃 M43	〃	(高台) 7.3	外: ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内: ロクロナデ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	〃	底部 完存	〃 高台にモミガラ痕	58
51	土製支脚	〃 M40	〃	(脚柱) 3.8	外: オサエ、ナデ	粗 0.5~2.0cm の小石	軟	淡赤灰~ 淡茶灰色	上部 4/5	被熱で赤変 崩れ易い	52
52	〃	〃 O41	表土		外: オサエ、ナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	やや軟	淡赤灰 ~淡茶灰色	上部 80%	〃	48
53	土師器 甕	〃 N43	第2層	(口) 19.0	ハクリのため不明	粗 0.5~2.0cm の小石	軟	淡黄灰色	口縁 1/5		44
54	須恵器 平瓶	〃 P44	〃	(体) 17.8 (底) 9.0	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密 0.5~2.0cm の小石	堅緻	暗灰色	体下部 3/5	内面に自然釉がお ちる	50
55	陶器 摺鉢	Ⅱ Q33	客土層	(口) 33.6	外: ロクロナデ 内: ロクロナデのちハケメ	粗 0.5~1.0cm の小石	〃	釉: 褐色 器: 茶灰色	口縁 1/5	瀬戸美濃 全面に 鉄釉がかかる	60
56	土師器 焙烙	〃	SD1 P2・3	(口) 41.8 (高) 8.1	外: ナデ、ヨコナデのちケズリ 内: ナデ、ヨコナデのちケズリ	粗 0.5~2.0cm の小石	良好	明褐色	4/5		13
57	〃	〃	〃 P1	(口) 43.4 (高) 6.8	外: ナデ、ヨコナデのちケズリ 内: ナデ、ヨコナデのちケズリ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	明褐色	4/5	外面にスス付着	12
58	〃 皿	〃	〃	(口) 11.0 (高) 1.6	外: オサエ、ナデ 内: ナデ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	淡褐色	1/4		14
59	平瓦	〃	〃		凸面: ナデ 凹面: ナデ、模骨痕	粗 0.5~3.0cm の小石	〃	暗灰色 (断)灰色		端面カット	15
60	土師器 皿	I P12	SD4	(口) 13.4 (高) 1.9	外: ナデ、ヨコナデ 内: ヨコナデ	密 0.5~1.0cm の小石	〃	外: 暗褐色 内: 明褐色	1/4		38
61	〃 甕	I P11	Pit 7	(口) 18.9	ハクリのため不明	粗 0.5~2.0cm の小石	軟	淡茶灰色	縁 1/5		49
62	陶器 鉢	I P12	SD1上 黄色泥礫上層	(口) 18.9 (高台) 8.6 (高) 10.6	外: ロクロケズリ、高台ケズリ 出し、ロクロナデ 内: ロクロナデ	粗 0.5~3.0cm の小石	堅緻	(釉) 淡緑灰 色 (器) 茶灰色	口縁 1/5 高台完存	瀬戸、美濃 釉は高台除く全面内 面にトチン痕4ヶ所	34

表9 遺物観察表(2)

可能性は高い。

注目されるのは、この周辺域で多数確認されている土器製作に関連する遺構・遺物が飛鳥時代から平安時代前半までの間のものであるのに対し、SK3は出土土器から平安時代末頃に比定できることである。平安時代末頃の土器焼成坑はまだ確認されていないが、この資料により、当地における土器製作が少なくとも平安時代末頃までは継続して存在していたことが考古学的に推測される。土器型式からは平安時代末頃の土器に前代との断絶は見出し難く、スムーズな変化をたどっている。このことから、古代以来、同一系譜上にある製作者集団（工人）が中世初頭頃まで存在していたと考えて大過なからう。

しかし、SK3からは直接土器焼成坑の形態が推量できない。この遺構の確認により、何らかの土器焼成遺構が平安時代末頃に存在していたのは確認できるが、これまでに確認されたような形態とは異なった土器焼成遺構がこの頃成立している可能性も充分あり得よう。

建物外土坑について 3間×3間分が確認されたSB1の東にはSK1が存在する。SK1はSB1の梁間1間分とほぼ同じ規模である。SK1の西に存在する小穴（N43pit2）は、SB1東端からその桁行1間分の距離にあり、さらに北から2間目の梁間のほぼ中央に相当する。これらの遺構の配置とその数値から、掘立柱建物と土坑が有機的な関係にあることはまず間違いない。

掘立柱建物に伴う土坑として想起されるのは、いわゆる南東隅土坑である。これは建物内部の南東隅に土坑を内包するものであり、当資料とは自ずから性格が異なる。ただし、県下での南東隅土坑資料が示す時期は平安時代末～鎌倉時代に集中し、当資料も時期的にはそれに併行する。類例の増加を待たざるを得ない現状では、建物に伴う土坑を設ける時期的な特徴の一環として把握が可能なこと、その付設方法には建物南東隅以外にも幾つかの方法が存在していたらしいこと、の2点を指摘しておく。

なお、SK1出土土器（22～23）とSB1柱痕跡内出土土器（10～19）には型式差がある。これについては前者が建物存在時期を、後者が建物廃絶時期を示すものと考えておきたい。

客土層について 次にI～Ⅲ区の土層観察によって認められた客土層を検討する。今回の調査区は水田と植林地の境目にあたる。客土層の色調は黄色～赤褐色系統で、質はかなり脆弱である。この色調の土は今回の遺構基盤層およびその下の地山とも言うべき土と同系統と考えられる。そして水田部に接するあたりに最も厚い堆積が認められる。このことから遺構基盤層および地山を掘削した土と考えるのが最も適当であろう。調査区周辺の地形は東から西へなだらかに傾斜するものであり、調査区付近の現水田面より1段高い部分を削平したとは考え難い。このようなことから、この客土層は現在の水田部分から運ばれたものと考えられよう。

さて、現水田部分から相当量の土が運ばれる理由としては、水路設置、水田域拡大、の2者が考えられる。このうち水路の設置のための排土とするにはその量はあまりにも多い。したがってここでは水田域拡大に伴う客土の可能性を考えたい。

この客土層の形成時期を示す土器にI区出土の陶器鉢（62）、Ⅱ区のSD1出土土器（56～59）および陶器播鉢（55）がある。62は前述のようにおおよそ19世紀前半に比定される。55は群馬県渋川市・中村遺跡で調査された、天明3（1783）年の浅間山大噴火によって埋没した遺構群から出土した播鉢と同型式と考えられるため、それとさほど時間的に隔たるものではなからう。

以上のことから西暦1800年前後を中心とした時期に客土層の形成、すなわち水田域が拡大された可能性を考えたい。

（伊藤裕偉）

〔註〕

- ① 明和町教育委員会・三重県教育委員会編『斎王宮跡—広域市町村圏道路調査—』（1977）
- ② 明和町教育委員会中野教夫氏のご教示による。皇学館大学考古研究会編『土師器とその窯—明和町を中心として—』（1986）
- ③ 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型」鍋—に関する若干の覚書」（『三重考古学研究』1 1985）
- ④ 藤澤良祐「本業焼の研究（1）」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅳ 1987）
- ⑤ 横田克明・五十嵐信ほか『中村遺跡』（渋川市教育委員会 1986）



調査前風景（Ⅲ区）



調査風景（Ⅲ区）

明星地区内遺跡群
I区



北側全景（南から）



SD 4 および東壁土層断面（西から）



全景（南から）



溝S D 1 遺物出土状況および土層断面（西から）

明星地区内遺跡群 Ⅲ区



全景（北から）



SB1付近（西から）

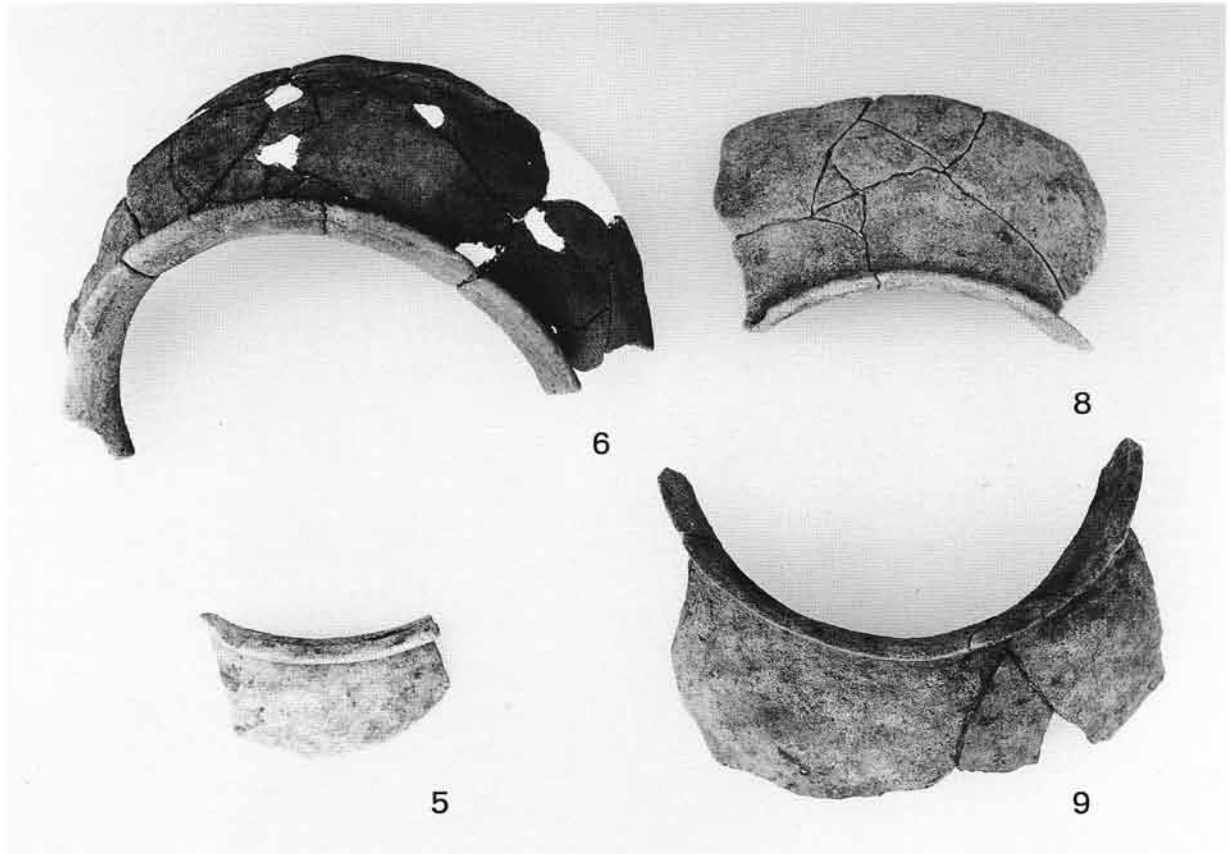


土器出土状況（東から）

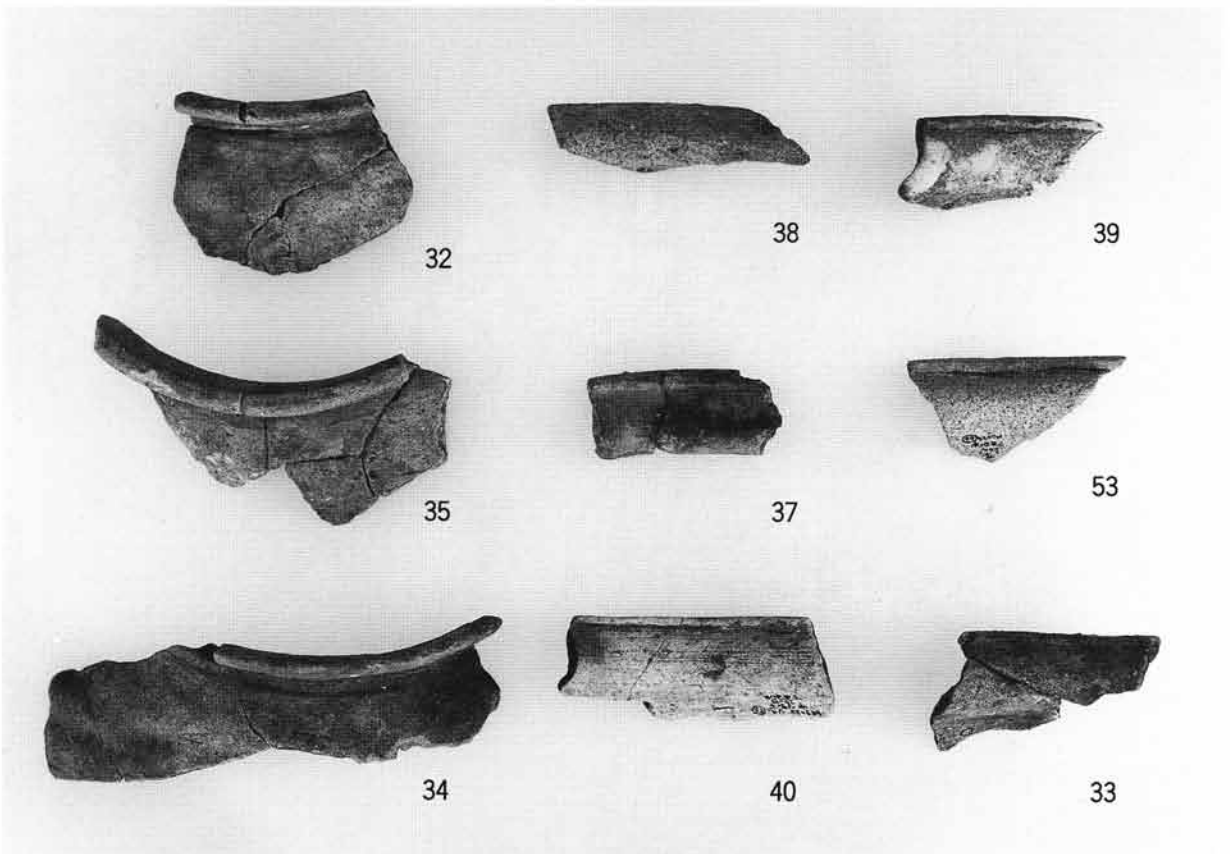


完掘状況（東から）

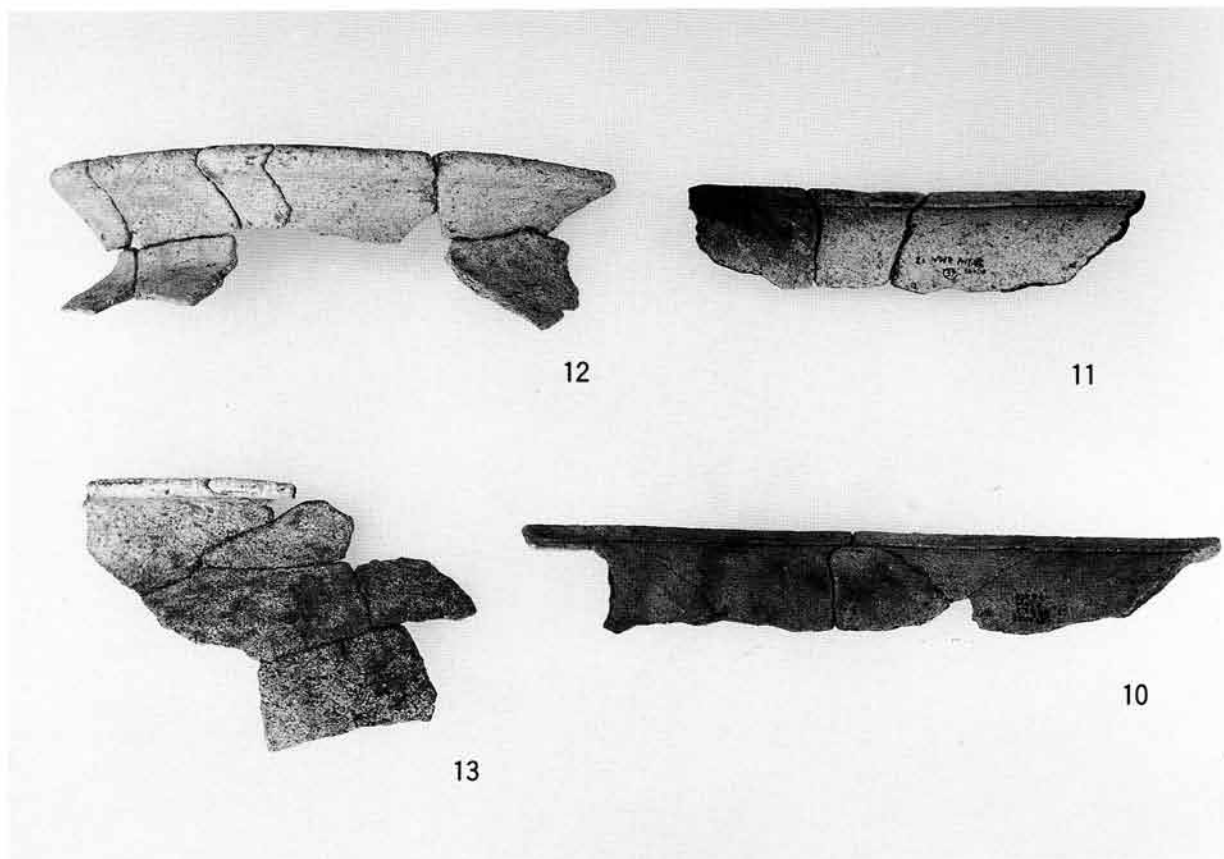
明星地区内遺跡群
出土土器



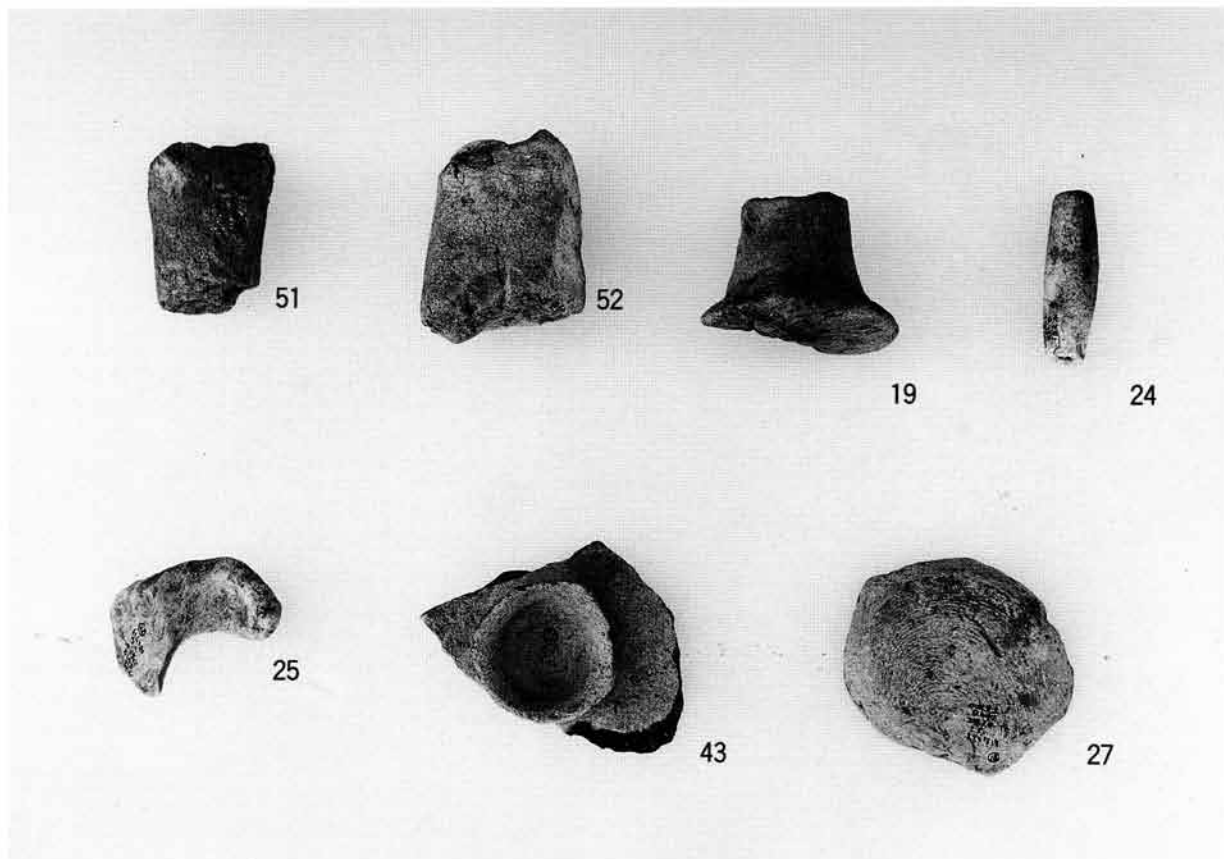
S K 3 出土土器 (第43図)



土器溜り出土土器 (第44図)

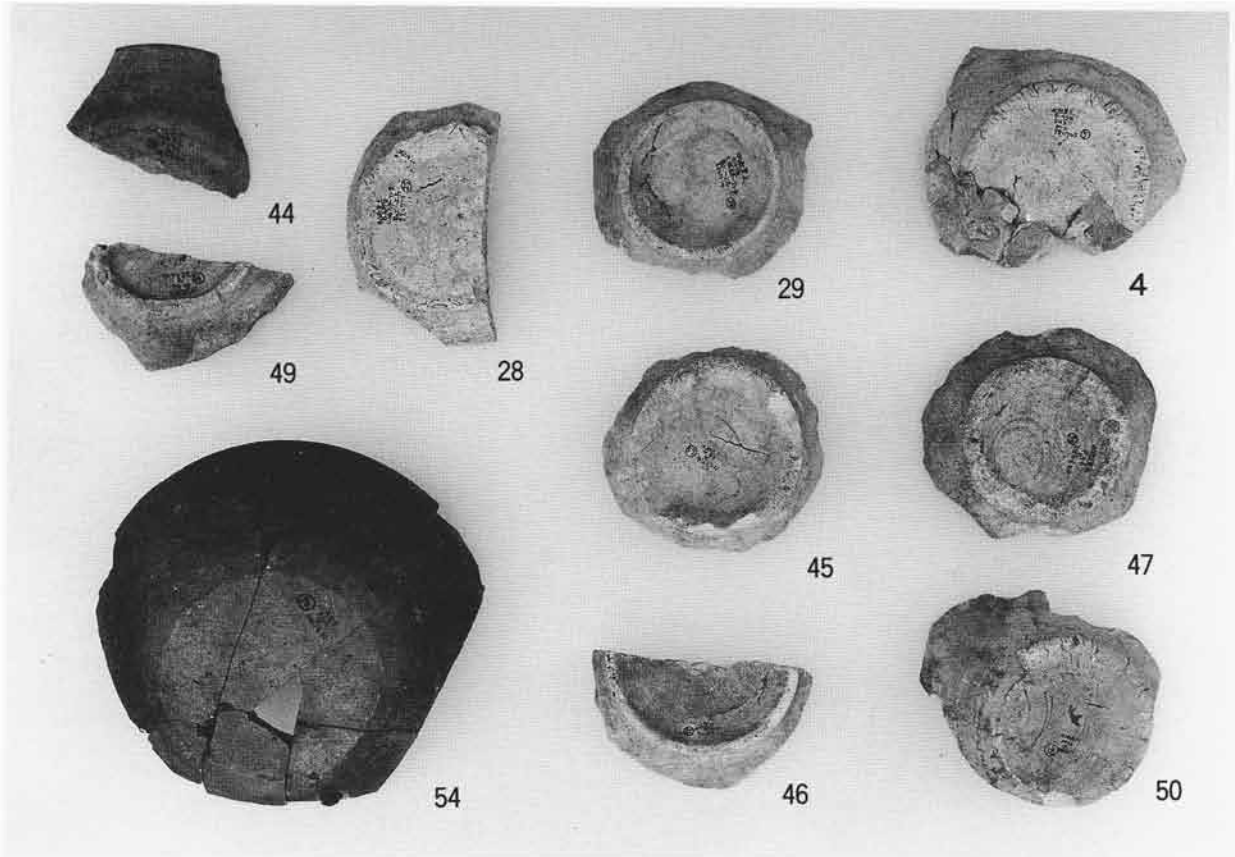


S B 1 出土土器 (第43図)

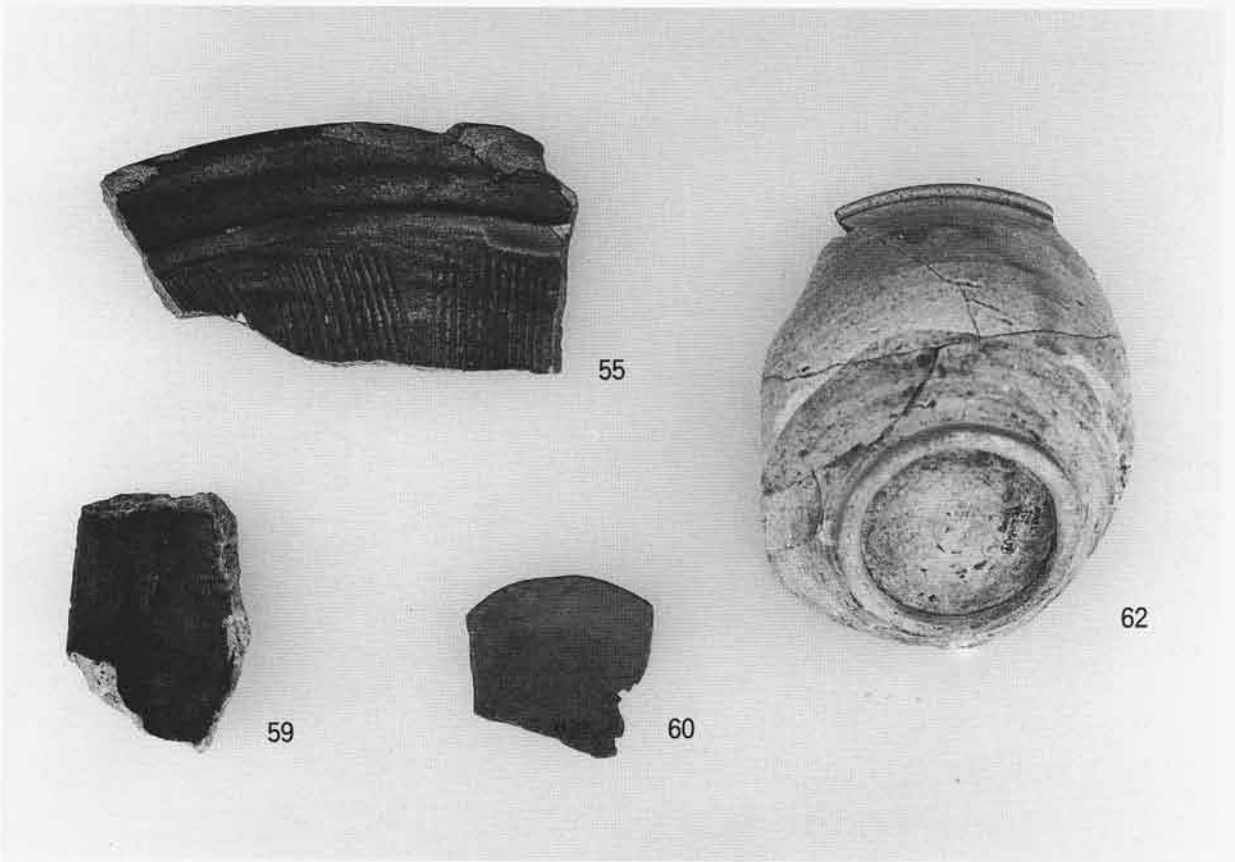


土製支脚・土錘他土師器類 (第44図)

明星地区内遺跡群
出土土器類



須恵器・陶器類 (第44図)



I・II区出土土器 (第44図)

昭和63(1989)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 88-2

昭和63年度農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

—第2分冊—

1989年3月

編集 三重県教育委員会
発行
印刷 光出版印刷株式会社
